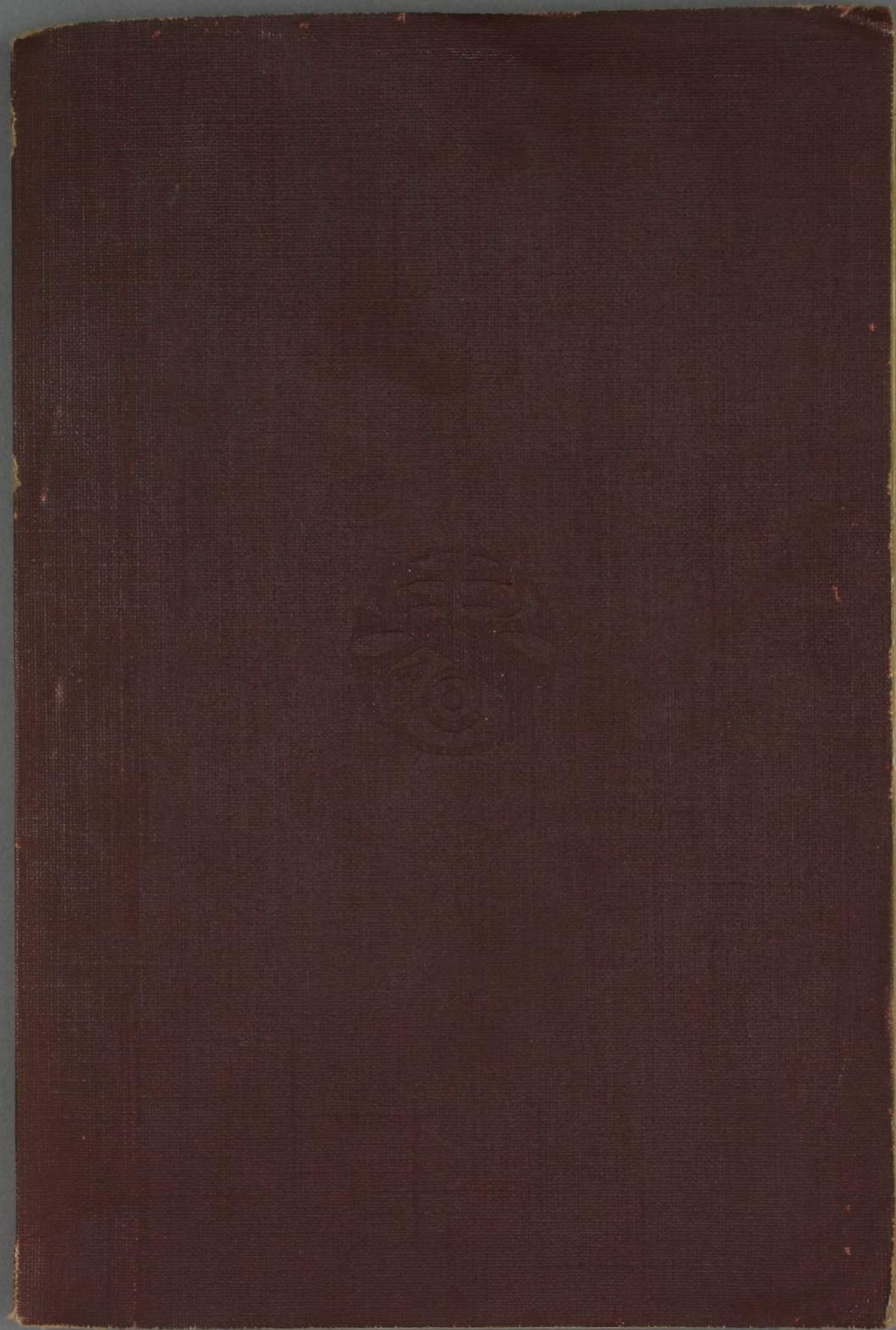
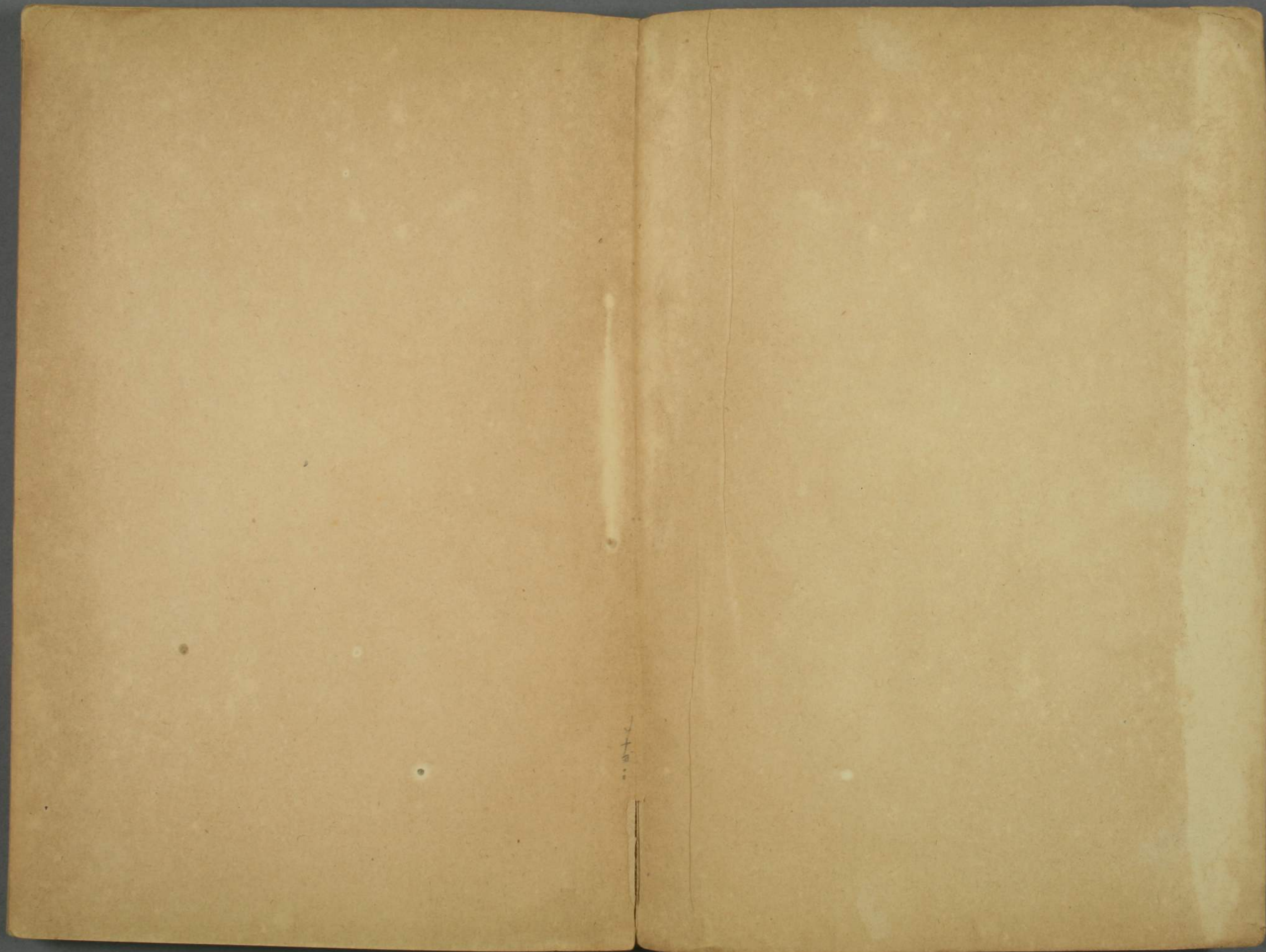


牧方本
所内通





牧の方はしがき

此の作は明治廿九年一月にはじめて稿を起し、さて
引きつゞ、『早稲田文學』の紙上に掲録し、同じ年の
うちに完結すべかりしを、種々の塵事いできて思ふま
ゝならず、遷延して同三十年の春に及び、かくてやう
く、三月のなかばに稿を脱し、更に修正の筆を加へ、
こゝかしこ添削して、こたび一卷となし、なり。事柄
の大むねは、正しき史乘に據りたれど、枝葉は悉く作
者の想像に成りて、殆ど何の據り所もなきが多し。さ
れば人物の都合、舞臺の趣など考へて、年月、地理など



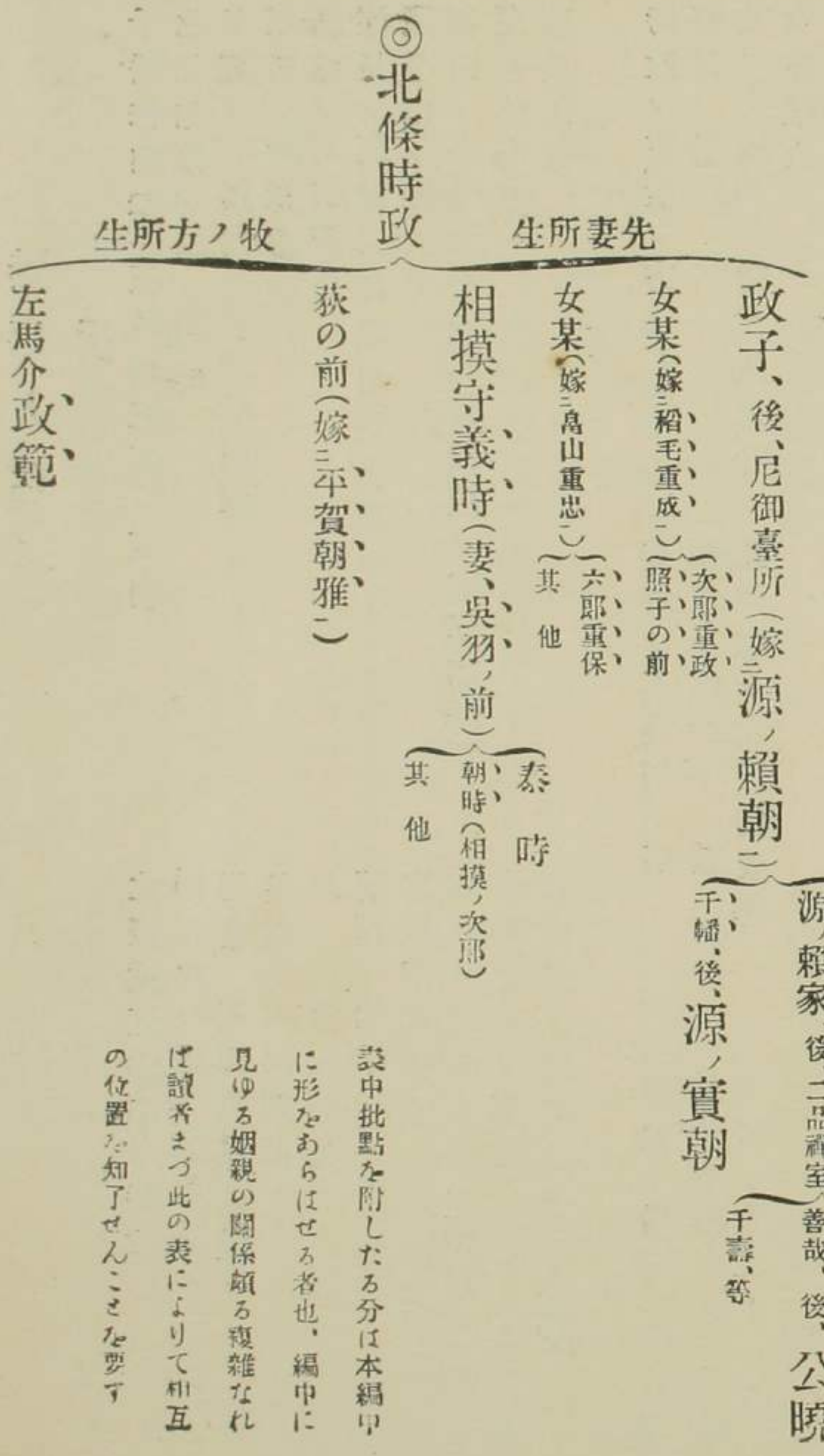
は、ほしいまゝに伸縮せり、例へば、實朝政範の年齢の如きは、おのゝ二年づゝを減じたり、義時、牧の方は、た同例なり。又鎌倉府の廣袤の如きも、其の實の二倍大となし、御所と北條邸との距離をも其の實より遠きものとなしたり。かゝるたくひの事柄尙あまたあり、讀者心得たまひてよ。

口

明治卅年四月中旬

春のや主人識

北條氏血統



表中批點を附したる分は本編中に形をあらはせる者也、編中に見ゆる姻親の關係頗る複雑なれば讀者まづ此の表によりて相互の位置を知了せんことを要す

登場人名

男

千幡御前後ニ三代將軍源ノ實朝
北條相摸守平ノ義時
平賀ノ右衛門ノ佐源ノ朝雅
稻毛ノ次郎重政
結城ノ七郎朝光
深見ノ三郎二郎致興
籠手田ノ勘六
和田ノ小平太井ニ北條相摸ノ次郎(朝時)
琵琶法師某
商賈工匠

北條遠江守平ノ時政
同左馬ノ權ノ介政範
稻毛ノ三郎重成入道
畠山ノ六郎重保
牧ノ左源太輝英
穂積ノ瀨平
木匠四郎作
輝英ノ僕藤太井ニ藤内
醫師紀河ノ宗近
侍士雜人軍兵及ヒ力士等

女

時政ノ室、牧ノ方
笹尾ノ局
牧ノ方腹心ノ侍女魚米、升
女童數人
尼御臺所
萩の前

義時ノ室、吳羽ノ前
稻毛ノ女、照子ノ前
北條家ノ女房、侍女等

伊豫ノ局
侍女折枝
呼賣ノ女、二人

場に登らずして屢々編中に見えたる人名

二品禪室(賴家)

畠山ノ次郎重忠

牧の方目次

第一段

(其一) 往來の雜説

自第一頁

(其二) 中門外の爭論

自第一三頁

(其三) 奥殿の風波

自第二一頁

第二段

(其一) 藥師堂の落慶供養

自第三一頁

(其二) 堂内の密談

自第四五頁

(其三) 山下の人殺し

自第五八頁

第三段

(其一) 七夕の大雷雨

自第六八頁

(其二) 旅館の曲者

自第八六頁

(其三) 奥庭の落花狼籍

自第八九頁

第四段

(其二) 閑室の密談……………白第一〇〇頁

(其三) 墮志の狂亂……………白第一〇四頁

第五段

(其二) 杜かけの伏兵……………白第一一七頁

(其三) 由比が濱の血の雨……………白第一二〇頁

第六段

(其二) 浴室の逆謀……………白第一二八頁

(其三) 築山邊の小道遙……………白第一三八頁

第七段

(其二) 月前の平家琵琶……………白第一四四頁

(其三) 橋殿の一刹那……………白第一五〇頁

(其三) 釣殿の大團圓……………白第一五三頁

牧 方

春 の や 主 人

第一段

(其一) 往來の雜説

鎌倉今小路と長谷小路との間に懸りたる橋の袂に五六人の工匠商賈壁塗鍛冶檜物師染殿など今更店先から飛んで出たといふ風にて、各々商賣道具を手に持ったまゝ、烏帽子袴の時服、一同今小路のかたを見込み立ちかゝりゐる九月下旬晚景

二「あんだッペい〜。あんだッて大名衆が泡アクツて、ぶツそろツて、御所のはうへ出掛けるだか。これハア只事ぢやアあんめいぞ。三「何んでもハア此間中から、地震のでッけいのがつゞくだから、縁起でもねえこんだと思ツてゐたい。二地震

と謀叛人は土地の名物 三又ハア謀叛人かも知んねえ。三真に聞いては見てはどやら一將軍さまのお膝元も居つては近劣り 四草創のそもくから又しても謀叛々々 三物騒な噂ばかり。四慾につられて六年前引越して来たは見込ちがひ 三今にも軍がはじまるかと 四片時も心が休まらぬ。五大名衆でも御連枝でも頼まれぬは浮世の常一手近いためしは頼家さま一此間までは日本國に、たんだひとりの大將軍さま 四其の例ない御榮華も變れば變るけふびのお暮らし 五尼御臺さまのお沙汰どあつておいとしやお髪をおろし 三お代がはりとなつたばかりか、御若君の一番さまも、比企の判官さまも御滅亡 二おと、この千幡さまは、まだハア十一か、十二ぐれる 三北條さまが預つて、お世話をさつしやるといふこんだが 二かういふ時にやア、わりい人が、えて謀叛を 三たくらむもんださ。五さういへば頼家さまも、えらう御無念がッてゐるといふゆゑ 三エ、そんだら何ぞ 昔そんな噂が 五イヤ、あるでは無けれど、知れぬは世の中イヤモ物騒なことぢやわいの。

此のうち、向う今小路の方より、呼賣の女二人荷箱を頭の上にといたゞき、バタバタにてかけ來たり

呼二人、コレ事ぢやぞや。 二オ、濱小路の姉御たち 三事ぢふは何だッペい。 三早う様子を 昔さかした。 呼二くはしい様子は知りましないが、北條さまにムラッしやつた、若君様の千幡さまが 呼二御膳さまに俄のお立ち 呼三三浦さまと結城さまと、大勢で御守護なされ、あわて、御所へお歸りなされた 呼二それが元で噂はどりく。 呼二北條さまの界隈は上を下への 二人騒ぎぢやわいなア。 二ハレマ、それはハアたまげたこんだぞ。 二マアあんだッて歸つたや。 三北條さまは實の祖父さま 四何の氣遣ひも無い筈ぢやに。 呼三サア、たが氣にもさう思へど、圖られぬは心の奥底一ナソレ、牧の御方さまは、大きな聲ではいはれぬぞ、御總領の義時さまや、尼御臺さまとも成さぬ中 三エ、そんだら何ぞ怪しいこんでも 呼二あつたといふは世間の取沙汰 呼三まことか虚かは知らぬけれど、御膳のなかへ毒をまこみ 昔々「エ、」。

ト皆々大きな聲する。

一呼「ア、コレ。すぐ橋むかうは由縁のお邸牧の左源太輝英さま。

ト皆々よろしくこなし。

呼「それぢやによつて、いつ何時 呼「三軍がはじまらうも知れぬゆゑ今から直に私
したちは 呼「こちのに知らせて、まさかの用心。呼「そんなら皆さん 二ムさらば
でムんす。

ト二女は急ぎ橋を渡り、長谷小路の方へ走りゆく。

二「こりやかうしてはをられましない。四「嗅に知らせて、まさかの用心。三「そんな
ら皆の衆。皆々「ござれ〜。

ト皆々あわて、はいる。ト橋向より牧の方の甥牧の左源太輝英直垂を裏が
へしに被て袴を前うしろに穿き、その裾をひきすり、烏帽子はかぶらず、すべて
トンチンカンの服装、家来甲乙のうち、乙は佩刀と取りちがへて櫛の棒をさへ
げ持ち、主従大あわてにて出で來たり、橋を渡り、今小路の方へかけゆく間、始終

棄せりふにて家來を叱ること。

左「身仕度にて餘程のひま、いり遅参いたしては相すまぬワ、うつけとは汝等がこ
と、うぬらゆるに、かくの仕合せ、エ、急げ〜。たどへ酩酊いたしをらうと〜
エ、急げ〜、たどへ熟睡いたしをらうと、なせ早やく起しをらぬ 甲「ヘイ〜
左「エ、急げ〜、遅参いたしては相すまぬワ。

家來乙輝英の袴の裾をふまへる。輝英つんのめる。

左「ア、イタ〜。甲「こりや何となされました。左「ヤ、イ〜。ガツといへば

すつと申す、急ぎをれと申せばとて、主人を突倒すちふことがあるか。乙「ま、眞
平御免下さりませ。左「氣をつけをれ、うつけものめ。ヤ、最前から脚のあがさが合
點ゆかずと、どんじをったが、ヤ、こりや成らぬワ、後さへだ。ヤ、こりやどうだ、此
の直垂は。ヤ、イ〜、如何に狼狽いたせばとて、汝よく裏がへしに被せをったな。

甲「ヘイ〜。左「うぬ〜、ヤ、無らぞ〜、烏帽子が無らぞ。こりや成らぬワ。
取ッて返さば時刻がおくれる、さりとて此のま、〜エ、是非が無ら、かうしたぞ。

予はこれにて身仕度致す、藤太はすぐさま取ッて歸し、予が烏帽子を持参いたせ。
家來乙一散に橋向うへかけてはいる。

左エ、重ね、不届至極。ヤ、ぬがせをれ、さうではないわい、右から先へぬがせ
をれと申すに。ヤ、何だ、そりや何だ。うぬ、そりや何を持参いたした。乙、ヤ、こ
りや如何ぢや。お太刀と思つた此の品は、左ヤア重ね、不届者めが。如何に
狼狽いたせばとて、佩刀は武士のたましゐ、うぬ、よくも、取りちがへずでの事に
予が面に泥を塗らうといたしをッたな。乙、ま、眞平御免下さりませ。左、うぬ、
此の分にはさしおかれん、手打にする、覺、ヤ、右手指はいか、いたした。さては
心の焦だつま、こりやありがちの不覺ぢやわい、君を思へば身を忘る、こりや
有りがらの粗相ぢやわい。ヤ、藤内、うぬも早速はせかへッて、予が兩刀を持参い
たせ。

家來乙、どつちてはいる。あとに輝英一人残り、棄せりふにて小言をいひ、
橋の袂にたちて衣裳を着直すこと。こゝへ畠山六郎重保が僕穂積の瀬平、今

小路筋を一散に走り來る。あとにつゝいて、稻毛入道重成が女照子の前の腰
元折枝、武家女房のこしらへ、かつぎなしの下髪姿。モウシ、と呼びながら、
息を切ッておひすがる。

折ア、コレ待ッて、瀬平どの、これはど呼ぶのに聞えぬわいの、待ッてといふたら
まッていの。瀬、ヤ、誰れかと思へば折枝どのか。何の用かは知らぬが、若殿を火急
のお迎ひ、御免なれ。

トゆかうとする、折枝あわて、止め

折ア、コレ待ッて、瀬平どの、是非頼まれて貰はにやならぬ。外でもない、此のお文
を、そちの若殿六郎さまへ、瀬、何ぢやお文ぢや。文と聞いてはひらさらまッびら
文なら餘人に頼まッしやれ。目のまはる急ぎのお迎ひ

トかけいだす袂をどらへ

折エ、マ、もぎだらな、またしやんせ。照子の前さまのお心を、知ッてゐながら他人
らしい、是非さいてもらはにやならぬ、たごへ親御さまと親御さまとが御中た

がひをなされうと、お二人はおいとことし、筒井づゝの幼な馴染御婚禮の其の折を、指折數ぞへて待ちこがれ。瀬エ、そのやうな長物語り、きいてゐる間は無い、大事のお知らせがおそなはるゝそと離した。折イエ、離さぬ、離さぬわいの。いとしほや照子の前さま、ひよんなことが元となり、御破談となつてそれから、只くよくと物案じ、三度のお物も進まぬがち、一日くく、に瘦さッしやる、はたの見る目も痛くしい、親御さまは兎も角も、聞えぬはそちの重保さま。瀬、それをおれが知ることかえ。折、それにまた憎らしいは、新大名の左源太づら、牧の方さまを笠に被て照子の前さまへ無體の戀慕―慾には目の無い入道さま、どのやうな間ちがひから、詰とおッしやるまい物でもない、若さうなツたら如何あらうぞ―いちらしいは照子の前さま、其のお心を推量して、お前もどらど傍から口そへ、元の通りに直るやう、其の掛橋は此の玉章六郎さまが御覽じたら。瀬エ、それならば尙さら御免だ。折、イエ、如何あつても頼まにやおかぬ。瀬、イ、ヤ離せ。折、離さぬ。瀬、こりや叶はぬ。

ト瀬平ふりはなし、逃げだすをおひかくる。此のうち左源太、たちぎ、腹の立つこなし、つゝと出る、薄くらがりの心。出あひがしらに、かけだす瀬平と、双方見事に額あはせする。

左瀬「アイタ」。左「ヤ、イ、うぬれ、無禮者めが。瀬、何だ、無禮だ、額あはせはあひみたがひ、身勝手なことをいはッしやるな。左、こいつが」。それがしを誰れだと思ふ。うぬ、此の分にはさしおかれん。おのれ、如何様なる遺恨あつて不意にそれがしを突倒した、真直に白状いたせ。瀬、とんだいひが、りをいはッしやる。知りもせぬお身さまに、遺恨も執念もあるものかえ。左「ヤ、イ、くく、―言はせて置けば、雑言過言―うぬ、それがしを誰れだと思ふ―北條どの、奥方、牧の御方には實の甥、牧の左源太輝英だわやい。瀬、折、エ、。左、只今かしこで、ちらとさきけば、うぬはたしか、畠山の惣領六郎重保が下郎だな。瀬、エ、。左、重保が下郎とあれば、ハ、アわかッた、こりや何ぢやな、主人の羽ふりよきを鼻にかけ、新参者のそれがしゆゑ、何かな耻辱を與へんとて―ウンニヤ、さうだきッとさうだ、北條どのへ参第の、其の妨げを

いたすのぢやな。瀬め、めッさうな、毛頭さやうな。左ヤア、いふなく、一定それに相違はない。新参なれども、當將軍家の直参たる此の左源太を悪口なし、うぬいひが、りだどぬかしたな。瀬サアそれは、薄くらがりゆゑ、あなたさまとは夢さう存せず。左ヤア、さかぬ。うぬ、此の上は、折ア、申し、慮外ながら、あなたさまへ申上げます。只今のお粗相は、全くわらはの不束ゆゑ、そのお人の存じませぬこと。どうぞ此の場は、此のまゝに、左ム、さう申すは、稻毛どのの腰元な。折ハイ。左、そもじが折入ッての取做しなら、魚心あれば水心、さいてとらすまいも、のでもなければ、イヤイ、よく聞けよ、新大名は一段と、當座の面目が大切なるに見よ、晴衣裳にまッこの通り、泥を塗ッた不届奴、無禮至極の下郎め。此の分には、さしおかれん、此の處にて、手イヤ、こりや成らぬ。アノ家來共は、エ、何をいたしをる。おのれ、手打にせば、刀の汚れ——かうしてくれう。

トたちかゝる。

折マア、お待ち下さりませ、御存じの上から、ま、どうぞナア、わらはに免じ、おゆる

されて下さりませ。其の代りには、何事でも、あなたさまの御用とならば、左きくと申さば——ウンニヤ、さかぬ——さかぬ。

ト又たちかゝるを折枝とめ。此の中橋向うより、以前の家來、甲乙、烏帽子、太刀、指添を持ち、急ぎ出来る。

左ヤア、よいどころへ。ソレをやつを叩き伏せる。甲乙、心得ました。瀬ヤア、大身とて容赦すれば、あまりといへば無體のふるまひ、左何がなんど。ソレ、ぶッちめる。瀬何を。

折枝、うろたへ、どめうとして、誤ッて灸所をあてられ、悶絶する。四人は、げしき立まはり、ト、瀬平、左源太につかみかゝる。左源太鞘のまゝ、指添にて眉間を打つ。瀬平アッといッて、たぢろく。主従たちかゝり、散々に打擲する。

左ぎまア見ろ。者共いそげ。

ト主従一散に、今小路の方へかけゆく。折枝、心づき起あがり、瀬平が倒れたるを見て、驚き介抱する。瀬平、無念のこなし。

瀬北條どのを笠に被て、人を人とも思はぬ左源太 折サ、其の腹立は尤もなれど、主人持の身を忘れ、一徹短慮はお前の病ひ何處ぞ怪我はしえやえやんせぬか。ひどう痛みはせぬかいの。これといふのも畢竟は戀の遺恨に六郎さまを憎いと思ふ八當りひよんなことであつたわいなア。

このうち畠山六郎重保狩衣裳騎馬にて弓を携へ、郎黨一人つきそひ、すべて野狩の歸りといふこしらへにて、長谷小路のかたより橋を渡り、こゝへ來かゝる。瀬平星あかりにすかし見て

瀬オ、そこへおこしなされまするは、若殿ではムりませぬか。保さいふ汝は、瀬平ならずや。折マ、よいどころへ、六郎さま。ひよんなことでムりました。保そなたは折枝合點ゆかぬ此の場の有様。汝が眉間の其の血沙は、折お聞きなされて下さりませ、無念なはたつた今がた 瀬エ、そこどころかーモン若殿、一大事でムりまする。保ナニ、一大事とは心懸りーシテ、其の仔細は、瀬サ、其の仔細は、如何なる敵かは存じませぬぞ、尼御臺さまの御沙汰とあつて、若君さまには俄の御還御。大





方 の 牧 (二一)

瀬北條どのを笠に被て、人を人とも思はぬ左源太 折サ、其の腹立は尤もなれど、主人持の身を忘れ、一徹短慮はお前の病ひ、何處ぞ怪我はしややんせぬか。ひどう痛みはせぬかいの。これといふのも畢竟は戀の遺恨に六郎さまを、憎いと思ふ八當り、ひよんなことであつたわいなア。

このうち畠山六郎重保、狩衣裳騎馬にて弓を携へ、郎黨一人つきそひ、すべて野狩の歸りといふこしらへにて、長谷小路のかたより橋を渡り、こゝへ來かゝる。
瀬平星あかりにすかし見て

瀬オ、そこへおこしなされまするは、若殿ではムりませぬか。保、さいふ汝は瀬平ならずや。折、マ、よいどころへ、六郎さま。ひよんなことでムりました。保、そなたは折枝合點ゆかぬ此の場の有様。汝が眉間の其の血沙は、折、お聞きなされて下さりませ、無念なはたつた今がた 瀬、エ、そこどころか、一モシ若殿、一大事でムりまする。保、ナニ、一大事とは心懸り、一シテ、其の仔細は、瀬、サ、其の仔細は、如何なる故かは存じませぬぞ、尼御臺さまの御沙汰とあつて、若君さまには俄の御還御。大

60

65

70

75

80

85



カ

このうち畠山六郎重保が、長谷小路のかたより橋を渡り、こゝへ來り、
 狩の歸りといふこしらへにて、長谷小路のかたより橋を渡り、こゝへ來り、
 瀬平星あかりにすかし見て
 瀬オ、そこへおこしなされまするは、若殿ではムりませぬか。保、いふ汝は、瀬
 平ならずや。折、ま、よいどころへ、六郎さま。ひよんなことでムりました。保、そなた
 は折枝、合點ゆかぬ此の場の有様。汝が眉間の其の血沙は、折、お聞きなされて下
 さりませ、無念なはたつた今がた。瀬、エ、そこどころか、一モシ、若殿、大事でムり
 ます。保、ナニ、大事とは心懸り、一シテ、其の仔細は、瀬、サ、其の仔細は、如何なる
 故かは存じませぬ、厄御臺さまの御沙汰とあつて、若君さまには、俄の御還御。大

倉あたりは上を下へ今にも戦がはじまるかと思ふばかりの亂ちく騒動。北條さまが御謀叛とはや一ぱいに噂は口々保ヤ、保ヤ、。瀬兵具を整へ西の御門へ我れ先にと大名がた一スハ大變と存せしゆゑお迎ひの爲下郎めがこれまで參ッてムりとする。保さてこそ珍變。つゞけ。

ト其の儘馬に一角入れてかけだす。郎黨つゞく。瀬平ついで起ち、よろ／＼とよろめきふみこたへて行かうとする。呆氣にとられてゐたる折枝此の時

あわて、瀬平をとめ、

折コレ瀬平どの此の照子さまのお文をば 瀬エ、そこどころぢや

ト折枝を突放し

瀬ありましないわら。

ト一散についてはいる。折枝呆れたこなし。

(其二) 中門外の争論

大倉が谷なる北條時政が邸。中門外。馬の嘶き、人聲物音、騒然たる初夜の景。こゝへ門内より前の場の牧左源太手に松炬をもち、うろたへてかけいで。左「サア事だ、サア事だ。老公の一徹短慮に、かて、加へた牧方の疳癩火のつきさうな真最中へ、薪に油は平賀朝雑どの。こりや大事にならずにやおかぬワ。いざ合戦となつたが最後、流箭一つ飛んで来ても、此の素肌では——こりやならぬワ。藤太はぬぬか。藤太々々々。

ト下手より郎黨藤太いそぎ出で来たる。

左「オ、藤太か。事だ。一大事と相成つたワ。太ヒエ、そんなら彌々噂の通り、御所から討手がまゐりまするか。左「討手は如何だか存せぬが、風の手も火の手もわるい。所詮は事だ、合戦々々。汝は直さま韋駄天走り、邸へ戻つて甲冑もろとも、身共が弓矢を持参いたせ。太「ヒエ、左「ヤ、いなせ起たぬ何をうち——時刻が後れる、急げ。太「ご、御免なされて下さりませ、こゝ腰がぬけましてムりまする。左「ヤア、うぬれ臆病者めが。勇將の下に弱卒なし、疾く参らさばぶツをな

すぞ。太「まゝ、まゐります。す。

ト此のトタン、向うより同じく左源太の郎黨藤内はた〜にて一さんにかへ来たり、左源太主従に突きあたり、けしとぶこと。

左「ヤア、無禮奴、何をいたす。内「ヤ、御主君——た、大變でムります。左「大變とは、内「表御門へ、う、討手の大軍。左「太「ヒエ、内「有無をいはず無二無三に——アレ〜あしこへ。左「ナニ、あしこへ——ヤ、いかにもあまたの——ヤ、い、い、い。内「太「南無三。

ト藤太藤内、こけつまるびつ門内へにげてはいる。

左「ヤア不忠やつ、まて〜、うぬれ。ヤアかた〜——コレ、まッてくれ〜——いであひめされ——いであひ、い、い、い。

ト左源太臆病の思入、いろ〜うろたへ、ト、腰のぬけたるこなし。すぐに向うより稻毛重成入道同じく、另次郎重政物具に身を堅め、兵器を携へ、郎黨大勢ひき具していで来たる。

左いであひめされし。稻「そこにゐるは牧、左源太どのではムらぬか。左くわばらし。政「コレサ、左源太どの照英どの。左南無阿彌陀佛」。稻「これはしたり、照英どの。左ヤ、貴殿は——オ、稻毛どのでムりましたか。稻「驚き入つたる今宵の珍變若君御前の御事より、老公御夫婦に御嫌疑かゝり、程なく御討手としきッて風説。政「信偽はわかぬぞ、びツくり仰天。稻「スハ、老公の御一大事、萬一讒者の寄せ來ん備へ。政「日ごろの忠節此の時と取るものも取りわへず、手勢を引き具し。稻「稻毛父子推参いたすと、すぐさま御披露。稻「政「下されたし。左「さては討手と——イヤナニ、う、討手をひきうけ、一人にても防戦なさんと存せしところ、持病の痲氣に敵しがたく。稻「ヤア、何はまかれ、奥の御模様シテ、老公にはいづれに御座ある。政「平賀朝政どのには参着ありしか。稻「シテ、御方には御異變なきか。政「シテ、相州には。左「マ、マ、さやうにたゝみかけてお尋ねあつても——ま、痲氣が、動氣が——兎も角も御披露。まばらしく。ト左源太あわて、門内へはいる。

稻「ヤア、案外なるうろたへ者——もどかしい、奥の様子心元なし。ヤイ、汝等はこゝに据へてのよ。作まぬれ。ト稻毛父子、門内へ入らうとする、ト向ふにて。保「まばらしく。ト畠山六郎重保、烏帽子直垂、ばた〜にてかけ來たり。保「申すことあり、まばらしく。稻「誰れかと思へば、おことは重保。政「珍事の仔細は知られつらん。稻「悠長らしき其の打扮。政「呼びとめられしは。稻「何等の所要だ。保「こは心得ぬ、其のお言葉、不思議の御嫌疑か、ッたるは、當北條家未聞の悪名まづ第一の御詮議は、讒者の有無をとりまらば、老公御夫婦の御濡衣乾し奉るを急とすべし、然るに何ぞやげう〜しく、兵具を携へ馳けつけられしは、道路の匹夫を驚かし、嫌疑を加ふる粗忽の振舞。政「ヤア、おーだまッて聽いてゐれば、おのが不覺を棚へあげ、我々親子をさみなす暴言。高木風をまぬかれず、當家を妬む卑劣のともがら、舌刀を研ぐと兼ねての風説。讒者のあるなし調ぶるうち、討手理不盡に

寄せ来たならば、六郎には何とせらるゝ。保たどへ御討手寄せたりとも、三代相恩の御所に向つて、一矢たりとも弓引かんや。さらぬだに此の年來、外戚の威權にはこり、我意の振舞おはするなんと、口無悪なき世上の取沙汰。御疑ひかゝつたらば、まづ御謹慎あるべき折柄、門内に兵馬を集へ、不穩の振舞これあらんは、いよゝゝ以て逆意の疑ひ。猶黙れ、逆意とは何のたはごと。我意の振舞おはするとは、前後を存せぬ無禮の一言。和主の如き無分別が、兎角に浮説の基を作る、取りも直さず讒者のかたわれ。保、ヤア聞にくし其の一言。今ひとたびおほせあれ、伯母智とて、聞棄には致しませぬぞ。猶何だ。血相かへてそりや何だ。讒者と言つたが何と致した。保、他人の口より出でば知らず、便佞讒誣を異名に呼ぶ、えせ入道のそこもどが、讒者呼ばゝりかたはらいたし。猶何がなんと。政、うぬ

ト重政をどりいで、抜かうとする、重保其の手を抑へ

保、こりや何とする、次郎重政。政、何とするとは知れたこと、父をさみなす汝がそつ首。保、フム、すりやそれがしを斬らんす心か。政、知れたことだ。保、何を。

ト重政また抜きかけるを、重保つき戻し、左右にわかれ、双方柄に手をかけ、きつとなる。此のトタン奥にて

朝、兩人ともに、さつたゝ。

ト平賀右衛門佐源の朝雅、烏帽子直垂にて、松炬もつたる童郎黨を随へ、門内よりはせいで、二人の間にわつていり、よろしくこなし。

朝、大事の折から、嗚呼の鬨諍、兩人ともに鎮まりませうぞ。保、右衛門佐源のお退き下され。堪忍ならざる次郎が雑言。政、うぬ、そのおとがひ——お退き下され。朝、ヤア、一大事を前にひかへながら、血氣に前後を忘れたるか。入道どのも年甲斐なし、何故おどめなされませぬぞ。

トこれにて入道耻ぢたる思入。

朝、面目なし、右衛門佐源の無體の過言を申せしゆゑ、ついそれがしまで釣り入れられ——こりやヤイ重政、据へをらうぞ。政、ちやと申して。朝、エ、据へをれと申すに。

ト重政まぶしくひかへる。

朝「イヤナニ入道仔細は已に知られつらん、尼御臺がこよひの御處置は、近ごろ以て理不盡千萬、まತ್ತ今以て義時ぬしのかつふつ何等の音沙汰無きは、一定父母をなみする同腹當家の耻辱未聞の悪名、このまゝにはすて置きがたしと、烈火の如き御腹立時宜によつては、兵士をひき具し、御自身御所へ参入あらんか。利害善惡決しがたく、今奥殿にて御評議最中。保ナニ御自身にて兵士をひき具し、朝重保にも重政にも、どく列席いたさるべし。保法外なる其の御所存、稻玄からばすぐさま政参候なし、保ことばを盡し、おどいめ申さん。

ト此の時門内より以前の左源太かけいで

左「かた／＼これに御座ありしか。相州公の奥方、吳羽の前、只今俄に裏門口より御参入でムりまする。朝「ナニ、義時ぬしの内室が、朝「アノ裏門より、保「オ、それをさいはひ、いで／＼すぐに。

ト重保つゝと先にたち入らんとする、稻毛へだて、

稻「ヤア尾籠なり、六郎重保。和ぬしは禮義をぞんじをらぬか。

ト手荒く突き戻す。重保くわつとなつて意氣こむを、朝雅さそくに押しへだ

朝「アイヤ、左源太との稻毛どのを案内めされい。

ト重保無念のこなし、稻毛よろしく思入、朝雅に會釋して先にたつ。皆々つゝ

(其三) 奥殿の風波

北條邸の奥殿の一室、まんなかに遠江守時政白髪かづら、烏帽子直垂、うしろに太刀持の小童下手前のかたに、相模守義時の室、吳羽の前、下髪當時の盛服、手をつかへてゐる談話なかばの體なり。

時「スリヤ全く世上の浮説をしづめん爲の餘義なきはからひ、義時は申すに及ばず、尼公にも疑念はなきよな。いさゝか他念は無いと申すか。吳「何の御他念がムも

ませうや。そもくこよひの一條は、義時とても寢耳に水あまりの珍事に仰天なし、取あへず伺候の上事の仔細を承らんと、ひそかに用意の其の折から大江をはじめ和田三浦在鎌倉の大名小名前後の思慮なく動擾なし、一時に參集なされしゆゑ、いよく廣がるゆゑし、風説一定仔細のはんべること、夫の察しにつゆ違はず、此の流言の源は、禪室さまに加擔のともがら、同志うちさせうす結構にて、申し觸らせし苦肉の策略、時ム、さてはさやらの仔細であつたか。さる深意ありと知らざるゆゑ、只理不盡なるはからひと、老の一徹忍びがたく、すぐさま御所へ推參なし、目のあたり尼御臺を詰問なさんといらだちしは、ア、我れながら、不覺々々。此の上は義時の諫に、えたがひ、ヒツと蟄して御沙汰をまたん。吳其のお言葉をうけたまはり、夫に代り御使に、立ッたる此の身が心の安堵歸ッてかくと傳へんには、夫相州にも嘸よろこび。そんならいよく御怒りは、時オ、サとけた、さッぱりと解けたはやい。

ト此のトタン、小簾のうちにて

牧イ、ヤ解けぬ、解かせぬわいの。吳エ、。さうおッしやるは、母上さま、牧相州ぬしのお使ひがら、母が對面しませうわいの。

ト時政の室、牧の方、下髪時様の盛服、まづくとたちいで、上手前のかたにすまふ。

吳オ、これはく母上さま、母上さまにもあらためて、宵よりの一伍一什を、よう申しわけいたせいと、くれくれも夫のいひつけ、牧アコレ、其の間にあはせの追従言葉、やめにして貰ひませう。何ぢや、此の母にもあらためて——其のにもとは何のため。コレ、そもじもよう知ッての通り、三従は女子の訓嫁いでは、夫にえたがふ時政殿に否が無くば、みづからが何の故障いませうぞ。まかるにあらためて此の母にもとは——ハテマアおき、やいの、此の母をば——夫はあれどもないがしるにして、我意をふるまふ、邪心女と思つてか——イエ、其の證據は今宵の措置、三代相恩の御主君をば、毒害なさらず悪人ど、ようかりそめにも疑うた、よう悪名をおつけやツたの。吳サア、其の仔細はつい只今も、父上さまに、申しひらき根無し

事とはとくより御ぞんじ 牧「フム、すりや根無し事と知ッてゐながら、義時も、尼御前も、事ありさうに若君御前を、多勢で守護なし還御せさせ、此の鎌倉中一ぱいに、ますく、悪評募らせしは、只此の母に、みづからに謀叛の悪名つけうす爲か。吳何のマア物体ない、さらく、以てそのやうな 牧「さうで無くば何故に、まづ根無しとどこの發頭たる、其の悪者をば糺問せいでなせ浮名をば募らせましたぞ。吳「サアそれは 牧「まツた、みづからは兎も角も、北條一家の大耻辱と、よも氣づかぬとは、えいふまゝ、然るに何ぞや、義時は、影も見せず、沙汰もせず、今となつて体よきいひわけ——みづからは繼母ゆゑないがしろにするも道理なれど——父御に對して不孝でないか。吳「サアそれは 牧「其の返事き、ませうか。、ませうか。

ト吳羽の前じゆつなきこなし、時政始終氣をもひ思入ありて

時「奥の腹立も一理あれど、義時が申すも道理畢竟は世上の動擾を鎮めんため、據なく右様の取計ひ 牧「すりや義時の申すことをば、アノ道理ぢやとおぼしめすか。な、さぬ中ゆゑ人百倍、まはり氣邪推もあるならひと、千幡君の介抱にも、心を摧き身

を惱まし、夜晝苦勞の絶ゆる間なく、心をつくせし御もてなしを、何ばなさぬ中ぢやとて、かりそめにも逆心とは——エ、どこを見て、どう睨んで 時「それはおことのひがみ心といふもの、義時がうたがうた譯では無けれど 牧「ナニ、ひがみぢやとや、まはり氣とや。成程まはり氣で、ムらうわいの、みんな邪推で、ムるわいの——イエ、イエみづからはひがんである、ひがんであるゆゑ、ひがみの無い、尼御前にも、義時にも、若しや邪推があらうかと、生中無うてことかけぬ、政範といふ實子あるゆゑ、苦勞の絶ゆる間の無い——女子とはなせ生れたぞ。よし女子とは生るゝとも、繼しい母にはなるまいものを——エ、なせ、今ごろ悟つたぞいのう。時「ハテサテさう一圖に仔細もきかず 牧「イエ、其の仔細は聴くに及ばぬ。義時が疑うたを、みづからを疑うたを、有理ぢやとあるからは——さうぢや。

ト牧のかた憤怒の形相ついと起ち、すぐに奥へゆかうとする。時政吳羽の前はツと驚き

時こりや何處へ 吳、まあ、おまちなされませい。牧、エ、はなしや——はなし
て下され。たつた一目和子に、政範——時、マ、まあ、下に。

ト時政牧の方をとめる。牧の方狂氣の如く、どいむる兩人を振拂ひ、奥のかたへ
かけ入らんとする。此の時下手より前の場の平賀朝雅、重成入道の二人急ぎ入
り來たり、やうく牧のかたをとりおさへる。牧のかた聲たて、泣き伏す。

時政、吳羽の前氣を揉み立寄り、何事かいひ慰めんとするを、朝雅と、いめ

朝、吳羽の方には、六郎重保、何事やらん願用ありとて、御便宜を彼方の一間に——此
の場はそれがし心得たり——空つた考公には——稻毛どの、ソレ最前の一伍一什
を。

トよろしく皆々に吞込ませる。

稻、オ、いかにも——老公には、憚ながら、御閑室にて暫時の間——吳羽御前にも、マ
、あちらへ。

ト吳羽の前心得て下手へ、時政は小童をつれ、稻毛と共に奥へ、皆々はいる。あ

と牧のかたと朝雅と殘る。牧のかた尙泣き伏してゐる。朝雅すりより、あたり
へこなしあつて

盟、先刻よりの御怨言、一々御尤とお察し申す。義時の疑ひは、畢竟尼御臺の御さし
がね賢女なれども、さすがは女性、さかしきだけに疑念深く、兎もすれば御まはりぎ、
これまかしながら上下君臣と別かれさせ、いまだ母上の御氣質を、ようお酌取遊ば
されぬゆゑ——さもあれ不貳のまごゝろは、竟に天地に通ずるためし、必ずお心に
懸けられまするな。牧、ノウ推量して下さりませ、あの政範さへ無いならば、けふよ
り前にも幾たびか、口へだして、いひたいこと、主であらうが、何であらうが、まことを
いへば、我が子も同然、それに何ぞや、將軍家の威を鼻にかけ、後妻と見くびつて、事に
つけ物につけ、意地くねわるい尼御前、そのかた組の義時夫婦、いひたいことは、山々
あつても、ひとつは、主といふ名前が、權、又た二つには、政範をば、跡目にでもせう、下心か
と、義時は、じめ一門に、肚さぐらるゝ、かくちをし、こらへこらへてゐたものを、邪推
にも、ことをかき、千幡君を毒害なし、あの政範を將軍家の跡目になさんくわだてど

は——よう邪推したちやムらぬかいの。此の邪推の鹽梅ではよしや今度の濡衣は此のまゝに乾いても不憫なはあの政範——貌ばせなら聲音なら千幡若に似たいけにおひゆくさきの末々まで、嘸世の人にも目をつけられ野心もあるかと疑はれ、如何なる憂目を見やらうぞや。それを思へば此の母が心はちぎるゝ思ひぢやわいのう。朝そのお歎はお道理千万今大小名多しと雖も何人か老公の威權に及び申さうや。其の内方たる母上は若し御實母でおはさうなら尼御臺は申すに及ばず恐れながら將軍家とても憚り重んじたまはんすらんに——まッた御愛兒政範ぬしもゆめさらさやらの懸念もなうて立身出世あるべき筈を——げにまゝならぬ世とはいへど容貌こそはよう似たれど發明伶俐は千幡君にはるかに優る稟性——こよなき家門に生れながらげに母上の仰の如く先を取越し案すれば心にかゝる和子がゆくすゑ。世サアそれゆゑに今日を限り時政どのとの縁を切ッて黒髪おろし——みづからさへ無いあらば和子が身に嫌疑もあるまい——どうぞわの子の行末はナウ婿どの朝雅どの頼むは御身の外には無い稻毛親子とも協議し

て、どうぞ頼ない政範の方になつて下されいのう。

ト牧のかた愁のこなし朝雅よろしく思入。此の時奥より稻毛入道たちいで稻「アイヤ其の御思案よろしかるまい。

トまづかにいひ牧の方の下手にすまふ牧の方朝雅よろしく思入。

稻「イヤナニ牧の御方、和子の行末を案じさせられ御隠居遊ばされん御決心は、さることには候へども御方おはしませず相成りなば平賀朝雅どの在すと雖も他は悉く他人も同然、和子の後楯ほどく無く——まッた承る所によれば怪しからぬ今宵の浮説は前將軍家に一味の輩が申し觸らせしことゝあれども一旦かゝるよからぬ風説鎌倉中に廣かつたれば容易に疑ひは取消しがたし。イヤナウ朝雅どの一たび染つたる白き絲は、また故の色に復るを難んず。濕るれば草枕の諺あり。御高慮はいかゞでムるな。

ト氣味あひにていふ朝雅も思入あッて

朝「げにそこものいはるゝ如く、世上一ばいに喧傳したれば彼の惡説の根を絶つ

こと、一朝一夕には叶ひがたし——まったいちはやく根を絶たざれば、枝葉を生じ花實を結ぶ。

ト稻毛と牧の方とへ思入わッていふ。此の間牧のかたぢッと思入。

牧はんに言はるればそれも有理——すりや如何にせば我が子の身の爲 稻ざれば——それがしが存するには——所詮疑ひのかゝりし上は毒食へば皿の喩——

ト朝雅、コレとおさへ

朝ハテ卒爾千万——壁に耳が

トあたりへこなし。

朝ござりまするぞ。

ト三人よろしく思入、こなし。

第二段

(其一) 薬師堂の落慶供養

上のかた石の階段岡の上に新築の鐘堂階上階下共に、三ッ鱗の紋附いたる幕を張り、はるかに大藏郷の山野森林の遠見正面にはッたて小屋新御堂普請小屋塲と書いたる棒杭材木いろ／＼立てかけあり。木工四郎作五十拾好、同じく甲乙丙丁、いづれも烏帽子袴の時装、長き板材にゐならび、又は大なる角材に腰かけ、銘々下賜の酒を飲んでゐる。恰も本堂にて供養最中、鉦太鼓など賑かにきこゆる。すべて鎌倉大藏郷新御堂背面の躰。

甲ナント北條さまの御威光はすばらしいものか。たッた三月の間に、かういふ滅法界もない薬師さまのお堂が出来た。何でも世の中は威光と金だ。乙、さうとも。お大名衆も多いが、威光くらべぢやア、こちらの北條さまに齒はたゝねえ。四、ほんに齒がたゝぬといへば、お憫然に二品頼家さまは、どう／＼お薨りなされたげ

トこれにて一同うろたへ下になる。

左場所柄をも辨へぬ不届者めが。昔へい〜 鳥もはや御供養も相濟んだれば、御下向に程あるまじ、立騒いで無禮あらば、どいつもこいつも首がないぞよ。昔ヒエ、左以後をきつと憤みをらうぞ。昔へい〜。左汝等には用事はない穢いものを取りかたづけ、さりと退散いたせ。昔へい〜、畏りましてムリまする。

ト皆々はいる。あと左源太家來に向ひ

左コリヤヤイ、牧ノ御方には、こよひ御祈願の御趣意あつて子の刻まで御籠り、たゞし相州どの、左馬ノ介どのには、もはや御歸館に程あるまじ、予は少々此のところ、に所要あれば、其の方共身に代はり必ず共に粗相なきやう 寒心得ましてムリまする。左ゆけ〜。

家來はいる、左源太残り

左ヤレまづこれで相濟んだが、さて、これからが此の方の一大事ぢや、是非とも今日はまづ入道から口説きおとし、あの美しい照子の前を、申しうけねば相ならぬが

どうぞ首尾よくあの入道を。

ト思案の思入此のうち醫師、紀河の宗近、人をもとむる體にて、下手より入來たり

宗、そこにおいでなされますは、牧ノ左源太さまではムリませぬか。左、あのうつくしい照子の前を、宗、モシ〜、左源太さまで〜。左、申しうけねば相ならぬが、宗、コレサモシ、左源太さま。

ト背をうつ、左源太びつくり

左、エ、びつくりいたした。和主は醫師の紀河の宗近ではないか。宗、よいところでお目にかゝりました。今日の御供養には、御一門御參會と承り、稻毛ノ入道さまに、火急の御内談がムリまして。どうぞ閣下さまのお肝煎で、おあはせなされて下さりませ。左、何ぢや、稻毛どのに火急の内談、ハテ似たこともあるものぢやわえ。

此の方も稻毛どのに火急の内談第一は此の方の内談、其の方の内談相すまんうち、は、此の方の内談——イヤさうでない、此の方の内談相すまんうちは、其の方の内談

相濟さんらちは——エ、何だか原意がわからなくなつて去もうた。ヤ、入道は何とせられた、今一應尋ねてまゐる。和主は此のあたりに相待ちをりやれ。宗、ありがたうムりまする。

左源太石段を上り、はいる。

宗、ハテ何のことか、ねッからわからぬ。それはさうと、どう考へても、あの毒藥

トいひかけて、あたりへこなし。

宗、一足飛に立身して、御典藥になりたいたいばツかり、ツイ稻毛さまの口に乗り、ラツカリ調劑は、またなれど、どう考へても腑に落ちぬは、稻毛さまの口ぶり——きのふ大工の四郎作が、問はず語りの噂といひ、萬一ひよんなまきぞへに——エ、思ひだすもそゝげがたつ。どうあつてもあの藥を、コリヤ取りもどさにやならぬわえ。

ト心配の思入。こゝへ向ふより、稻毛入道の女照子の前、腰元折枝、かつぎなり、塗笠を持ち、いで來たり

折御病後のおからだゆゑ、嘸お艸臥でムりませう。アレわここに見えませるが、今

度出來ました新御堂でムりまする。照、スリヤあの御堂に、六郎さまは、折、さやうにムりまする。照、エ、うれしや、早う案内してたもの。折、マ、おせきなされませるな。よう心得てをりますわいなア。

ト折枝、さきにたち、小屋の前へ來たり、宗近を見つけ

折、モシ、ちと物が尋ねましたい。畠山の六郎さまは、よもやまだ、アノお下りではムりますまいな。宗、オ、さうおッしやるは、稻毛さまの——お腰元ではムらぬか。二人、エ、宗、オ、あなたさまは御息女さま。

二人は悪い處で見つかつたといふこなし。

宗、よう御參詣でムりましたナ。ヤレ、おすこやかな其の御様子、もうおさッぱりどなされたカナ。折、さうおッしやるは、宗近さま、マわるいどころ——イエ、アノわるいどころか、ずんとおよろしうムりまするわいなア。

ト二人、貌見あはせ、困つたといふ思入。

宗、それは、重疊々々。ヤ、重疊といへば、先以て幸ひの上、天氣此の上もない御供

養會入道さまにはさぞお疲れ、ちやうど愚老も入道さまに 折アモシ、いさゝか仔細あつて、けふ此のところへ姫さまがおこしあつた其の事は、入道さまには内々ゆゑ 崇ナニおこしあつた其の事は、入道さまには内々とは 折ハイアノ極内でもりますれば 崇ハテナ、ずりや最前お下りでないかとあつたは 折ハイアノそれは 崇アノあれは 折サア畠山の六郎さまに 崇ナニ畠山の六郎さまに。成々々、成る程。折アノいさゝか、わたくしが、お願ひ申す事あつて 崇アイヤ、その儀は兼ねて、成るほど、如何さま——こりや御内密が御尤。よろしうムる、吞込申した。幸ひ愚老序ムれば、六郎さまを此のところへ 折スリヤアノあなたが——それはマア、忝うぞんじます、が、どうぞ入道さまには 崇、よろムる、念には及ばぬ。ようムる。

トひとり吞込んで石段を上り、はいる。

折むさくるしうはムります、が、マこれへなど、まばらくお掛けなされませ。

ト折枝材木の塵を拂ひ、主従腰をかける。照子の前思入あつて

照父上の目を忍び、たつた一言六郎さまの御心根をきいたる上と、やうくあくがれ来て見れば、忽ち人に見咎められ、あさましい目を見たわいのう。折アレまたしてもお氣の小さい。おいひなづけの中といひ、おちいさいから御一所にお育ちなされたお従兄弟、密事といふではなし、何のマアその御遠慮。今にもあれ六郎さまが、こゝへお出遊ばしましたら、存分お怨みをおっしゃりませえ。いざ御婚禮といふ間際になつて、何ぢや、仔細がある、破談する——橋市の賣買ではあるまいし、ヨウマあのやうに言はれたもの。サ、何がお氣にめしませぬ、家柄か、御縁綴か、お育ちか、お氣だてか 照ア、コレ、又してもはしたない。誰彼時でもこゝは往來。折、ホイ、わたくしと、また、こゝが、あんまり、貴嬢がお内氣ゆゑ、マ此のやうにおっしゃらば、と思つたのが口へで、ホ、ハ、ハ、ハ、マそれにして、あんまりなは先方さま、一年二年三年と、ツイ延び、に沙汰もなく、藪から棒の御破談は、どうした表裏でもりまするか、さつぱり合點がまゐりませぬわい。照サア、薄々は知つての通り、そも此のたびの御破談は、伯父婿、畠山重忠さま、公け私しの事につき、祖母上御存生の

其の頃さへ、父上とはお心合はず、それを祖母さまが苦勞にして、兩家の爲にと五歳まで、六郎さまとみづからをば、御膝元で手鹽にかけ、お育てなされし海山の御恩がへしもならぬ間に、祖母さまには御大病其の御いまはに、忝なや、六郎さまとみづからをば、行末必ず夫婦にせよ、それぞすなはち天下の爲、兩家の爲ぞとくれぐれも、繰り返しての御遺言。何辨へぬ子供氣にも、世に嬉しかりし約束の、反古となつたるけふこのころ。

ト照子の前愁の思入。此のトタン、折枝ふと石段の方に目をつけ

折ア、モシあそこへ六郎さまが、嬉しや、お従者もおつれあさらず。幸ひおたりに往來もなし、ナア申し日ころのお怨み、存分におツしやりませ。

ト折枝下手へゆきかける。

照ア、コレ何處へ。ナウコレ待つて、そなたがこゝにゐやらいでは、折イニく速に歸りなす、ツイアノ一寸、照ア、コレ折枝——ナウまつて——ア、コレ折枝さかぬふり、足早に下手へはいる。照子の前あどを追うて下手へ行く此

のうち、島山の六郎重保、石段を下り人を求むる風情、四下へこなし、上手を見廻しながら、真中へ、照子の前は下手を見やりながら、真中へ、双方おぼえず突きあたりて、びつくり、よそしくこなし。六郎無言にて、上手へ戻らうとする、照子の前こらへかぬし、思入思ひ切つて、かけより、六郎の袖をひかへる。照喃、まつて下さりませ。保、さういはるゝは、稻毛の御息女、照子の前どの。何ぞ御用ばし、ムりなするか。

ト袖を拂ふ、照子の前うつむいてすゝり泣き、黙つてゐる。

保、さてはそれがしに用事の人とは——公向の御用ならば、只今にも承らん、私事に候は、往日申進せし通り。御用とは何事で、ムるな。

照子の前ヤハリ無言で泣いてゐる。六郎ツカ〜と行かうとする、照子の前あわてゝおひすがり、また袖をひかへる。

保、馴々し、おはなしなされい。照、六郎さま。あんまりでムりなするわいなア。親と親とは、どうあらうと、自からとあなたとは、六歳五歳まで一所に育ち、大きくなつ

ても北條の御別邸では面をあはせ互ひに氣心知りあうて親と親とが仲たがひを、必ずなだめ行末は祖母上さまの御遺言を、保ヤア祖母上の御遺言を、忘れぬ御身が何として祖父時政のを説き惑はし、祖母上をおしこめまゐらせ、北條家の後妻となりし、あの牧の方に阿りへつらふ、父と兄とを諫めたまはぬ。照サ、それにこそは譯あること、保、剩へ、そののみならず、前將軍家禪室様をば、御身が父の重成入道、讒言なせしそののみか、修善寺にての御他界は——御横死と専ら取沙汰。照エ、此程の問答も、庭訓に戻る憚り。さらばでムる。照、ナウマッて下さりませ、父入道にそのやうな、非道の行ひあらうとは、保、イヤ其のいひわけ無用でムらう、非道の嫌疑解くるまでは、まッた父と一つで無い、忠義の證據の見えざるうちは、照、すりや其の證據が見えたなら、亡き祖母さまの遺言通り

ト照子の前思はず取りすがらうとするを、六郎ついと身をすさ

保、ヤア、公私を混せし其の一言聞く耳は持ち申さぬ。

ト口早にいひ見かへりもせずはいる。此の以前石段より牧ノ左源太、酒に酔

うたるこなし、酒おくびをしながら下りかけ、此の躰を見てびっくり、嫉妬の思入ぬき足して下り來たり、普請小屋のかげにまのぶこと。照子の前よりしくこなし、聲たて、泣き伏す。ト、貌をあげ思入あッて

照、いはうと思ひし万分一も——あんまりすげない、六郎さま。

ト此のうち左源太よろめきながら忍び足に立ちいで、照子の前のうしろへ來て

左、あんまりすげないで、照子の前

トだしぬけに抱きしめる。

照、エ、誰れぢや。左、み、身共ぢや。照、エ、慮外な、誰れぢや。左、アイタ

アイタ。ハテ大事ない。身共ぢや。

トいひながら手をはなし、前へ來てずツと貌をだす。

左、ソレ身共ぢや。ハ、ハ、ハ、ハ、牧ノ左源太、照英でムる。

照子の前むツとしてきツとなり

蒙味の細民まで 矜信心膽に銘し 政隨喜の思ひを 二人いたし交してムリま
 する。牧、建立の其のはじめにかゝる大造を營まは、前將軍家二品禪室伊豆にて
 御他界の間際といひ、まッた近年御賦役かさなり、士民疲勞の折柄ゆゑ、世上のおも
 はくもいかゞなんぞ、例の畠山重忠父子、まッた義時の異見もありしが、もとより此
 れは私し事病身なる左馬ノ介が、一身安全の宿願ゆゑ、更に下民をわづらはさず、夫
 時政が自方の營み如來も御納受ましましてか、滞りなきこたひの落慶。これとい
 ふのも畢竟は、親子の衆の骨折ゆゑ、ほんに嬉しう思ひまするぞや。矜惶れ入ッた
 る其のおことば、滞りなき御落成は、全く以て、時政公の御威徳、人皆なづきまがふ
 ゆゑ、令せざれども事はかどり、また、く間に此の大造 政天が下廣しと雖も、北條
 家の御威光にならぶものなき御全盛 矜憚りなく申さうならば、將軍家は置き物
 同然、誰がいッし鎌倉山の星月夜星は、即ち大小名、誰が目にもつきは、將軍大日輪の
 執權は、光あまりにまばゆきゆゑ、名所の名にこそうたはれざれ、照らすは月の幾百
 倍

トいひかける、此のうち政範よろしく思入、牧の方重成を目でおさへ、政範へ思
 入あッて

牧「イヤナウ、其の星月夜といふことは、星影月に似たるをいふとか。鎌倉山にいひ
 かけしも、名所ゆゑにはあらずと聞く。オ、それはさうと、日もはや全く暮れはて
 たり、ドレみづからは改めて、誦しかけし御經を。今がたもいうた通り、夜半の風の
 身にさはらん、和子は館へ片時も早く

トこなしあッていふ。

範「仰ではムリますれど、母上が子の刻まで、御こもりあるからは、それがしも子の刻
 までは、牧「イヤナウ、それは要なき遠慮。義時どのも、右衛門佐も、さきだッて歸ら
 れたり、母の身は案じずとも、早う館へ戻りやいのう。矜あのをやうに仰せあるに、お
 違背あるは却ッて御不孝。御方の御意にまたがひ、サ、御館へお歸りあれ。今こ
 ろは遠州公にも、嘸かしおまぢかねに候はん。政サ、お歸りなされ〜。
 ト皆々すゝめる。政範心の残る思入、やがて決心して母に對ひ

範「さやうならば母上さま、お先へ退るでムりませう。惣、それがよい。」

レ次郎「伯まはりを 政ハ、心得ましてムりませう。」

ト次郎「立たんとする此のトタン下手にて「うせう」ト左源太の家來藤内藤吾、前の塲の木匠四郎作をひつたて堂の前へ来る。次郎たちあがり廣椽に

いで

政「ヤアさうくしい何事なるぞ。吾ハッ稻毛さまへ申上げます、主人左源太の命にて、御境内に非違なきやう、警固いたしまかりありしに、うさんなるは此れなる毫奴。内、最前暇を遣しましたに、尙うろく」と徘徊なし。吾「只今もお幕の蔭より、玄きりにこなたをさしのぞき、けしからぬ獨りごと。内、なんまみだぶつとちやんばんに、お館をさみならず口吻此奴胡亂と存せしゆゑ。二人ひつたてましてムりませる。四、なんまみだぶく。政「ナニ、お館をばさみせしとは。吾「左馬ノ介さまがお十四にて、從五位下に御昇進は、法外過分と申せしのみか。内、榮耀には餅の皮分に過ぎた御全盛、此の行末が懸念など、吾「存外なることを申し散らし、剩へ前將軍

家の御他界をば、當お館の御之むさど、いはぬばかりの奇怪の雜言。四「なんまみだぶく。一、稻「ナニ前將軍家の御薨去をば、當家の御所爲と申せしとな。容易ならずるその一言。察する所そやつめは前將軍家をそ、のかし、御謀反す、めたてまつりし、比企、仁田が餘類ならん。次郎「きつと詮義いたせ。吾「仰の如くこやつめは、もとは比企さまにお出入せし、木匠めでムりませる。稻「さてこそく。油斷ならざる當節柄、必定同類これあるべし。ソレまばり上げて白状させい。四「アコレ待ッて下さりませ、お處刑は厭ひませねど、白状することはムりませぬ、同類も何もムりませぬわい。ツイ思ふことが口へ出て、ア、なんまみだぶく。政「ヤアいけしぶとい其の老奴、ぶちのめして白状させい。吾「内、心得ました。ト藤内藤吾たちかゝる。此のうち左馬ノ介思入あつて

範「兩人控へし。吾「内、ハ、範「無用なるぞ。吾「内、ハ、ハ、

ト二人ひかへる。稻「毛親子不審の思入

稻「何故に政範どには 政「此の拷問を 稻「無用なりとは。範「其の老人の申す所

は、一々ことわりぢやとぞんじまするゆゑ。政何とおツしやる。

トこれにて牧の方もよろしく思入。政範少しく膝をすゝめ
眞長兄相州義時とのすら、御齡四十までは小四郎にて、いまだ受領の御沙汰無く、玄
ツた父上時政公は、草創の御功臣御舅にて在せしかど、君御一代の其の間は、曾て受
領のお許しなく、六十歳の御時まで、北條四郎と申せし由。其の例には似もやらす、
寸功もなき若輩が分に過ぎたこたびの任官冥加の程もおそろしとみづからすら
思ふもの——其の老人が正直の言葉に科がムりませうや。稻左馬ノ介との、お言
葉ながら、それはちとちがひ申すぞ。積善の家には餘慶あり、父祖の徳は子孫に報
ふ。時政公の御功勞によつて、此のたびの御任官、何の其の遠慮に及びませうや。
政況や才智拔群にて、大人も及ばぬ政範との、御任官に何のひがこと。それをさみ
なす此の老奴、前將軍家に最負なし、當家をそしるは必定曲者。いで、それがし
が苦を加へ、本音を吐かせ御覽に入れん。

トまた立ちかゝるを

範「アイヤ、其の御折檻には及びませぬ。政とはまた何故にな。眞老人が正直は、面
と言葉にあらはれたり、曲者とは思はれませぬ。前將軍家の御他界に、不審をいだ
くも尤なれば、當家の所爲をあやしむも、ことわりかどぞんじまする。喃母上長兄
はじめ重忠とのが御異見ありしは、このこと、此の政範が過分の任官、まツた御他
界の間もなきに、目ざまし造營供養、人皆目をそばだて、心のうちでそしつても、威
勢におそれ、言はぬと聞く。老人が直言は、此の方のよき誠め、慮外をゆるし、放免あ
るやう、母上へ願ひまする。

ト此のうち四郎作涙を流し、思入

四「アありがたいおこゝろさし、活如來さま。かういふお方があればこそ、どん
な業も消滅し、一人出家して九族天に昇るとやら。アなんまみだぶ。ト
ト牧の方ヒツと思入あつて

牧「なるほど、和子のいやるもことわり、殊には供養會の折でもある、薬師如來の寶前
にて、苛責の苦はいとあさまし。ナウ次郎、其の者の詮義は無用、そのまゝ、放ち遣し

させうぞ。政スリヤアノこやつをこのまゝに 牧いかにも。これも罪業消除の
いとぐち 政「稲」エ 牧「イヤナウ、これがまことの放生會ぢやわいのう。

ト稲毛親子がてんのゆかぬといふ思入。

政「ヤオレ者共命冥加の老奴めを、ナツレ、きりく」とぼつたてませい。

ト藤内藤吾に向ひ、まばりあげて邸へつれゆけトこなし。政範それと見て取
りし思入。

範「ア、イヤ、その老人には、いさゝか問ふべき仔細もあれば、それがし只今引立て申
さん。政、それは餘りに憚り多し、かゝる卑しき下人をば 範、それがしが勝手でム
れば 政、ぢやと申して 範、ハテ勝手ぢやと申すに。政「へー。範、左様ならば母上
様、御兩所にも、御免下さりませう。 稻、左馬ノ介どの、お立ちなるぞ。

トこれにて従者小童大勢いで來たる。政範、四郎作に早うついて來いとこな
し。四郎作手を合せ拜むこと。皆々政範を警固し、向ふへはいる。
牧「圖らぬ事に思はぬ暇どり、御身がたも無氣づかれ。餘事は左源太が心得居れば、

遠慮なら退出して、一日の疲れをお休めあれ。ドレ更めて御經を。

トかたへの經づくゑに向かはんとする。此のうち入道親子貌を見合はせ思
入あつて膝をすゝめ

稻「アイヤまばらく。最前より申上げん」とぞんじながら、兎角何かと人目の妨
げ、さしひかへまかりありしが、せんころ竊にきこえおきし、南蠻傳來の秘密の藥劑
牧「エ、 稻、やうくのことにて、手に入れましてムリとする。

ト懷中より式の如く包みたる藥劑をとりいだし、牧の方の前に置く。牧の方
ぞつとしたる思入貌をそむける。

稻「さて此の毒藥の効能といッば、効神の如しと雖も、不思議の藥劑故、皮膚の色も變
らず、外目には只急病と相見ゆれど、四五日にて衰弱なし、竟には全く命を取る、おそ
ろしき大毒藥。 牧「エ、 稻、まッた、此の如く色もなく、絶えて香りもムらぬゆゑ、如
何なる食にお加へあるも、決して勘づかるゝ氣づかひなし。時機は失ふべからず、
御臺所御下向以前に、御下手あるが最上策。 さすれば万一にも事露れ、一大事に及

ふといふとも朝雅上洛の其の間に、かなたにて策をめぐらし、かやうくと兼ねての手配り、やつがれたまた策略あり、決して御懸念に及ぶべからず。何は去かれ、此の品は、またと得がたき奇薬なれば、人目にかゝらぬ其のうちに、何卒お納め下さるべし。

ト此のトタン御堂のうしろ、下手幕蔭より、前の塲の醫師、紀河の宗近うかひいづる。同時に同じく上手立木のうしろより、北條相摸守義時、忍びすがたにて立ちいで、様子を窺ふ。宵闇にて、四下おぼろげなるこゝろ。此のうち牧の方いひだしに、くいといふ思入よろしくあつて

牧、イヤナウ重成どの、今更となつて、此のやうなこといふときは、嗚や、女子はいふ甲斐なし、何事も出来ざる、頼まれぬ根性ぞと、嘸さげすみもなされうなれど、榮耀に限りは無しとかや、今更やうく心附けば、空怖ろしい身の罪障。此の身の榮花、我が子の譽ありし昔の月見れば、盈つればかけし宿願の、忽ち叶ふ如來の靈驗——あらたかなるを見るにつけ、そゝる懺悔の萌せし折柄、けふまた導師が供養會に、あり

がたかりし御宣説——空怖ろしくかたじけなく、さつぱり心が變はりましたわいの。政、稻、エ、。牧、いつぞやの商議は、只一時の夢と思ひ、淺ましいその品は、早う取り納めて下さりませ。

トこれにて、親子貌見おはせ、呆れし思入、入道膝を進め、稻、牧の御方そりや御本心で仰せらるゝか、イヤサ御本心で——ナニ御本心——ハテナア。

トよろしく思入、ずつと寄りて聲をひそめ

「噯、イヤナニ榮耀には際限なし、盈つれば虧くると仰せあれど、人間わづか五十年、花咲かぬ木も秋來れば、落葉に漏れぬ有爲無常。十二分と望をかけ、やうやく八九分が世のならばはし。はじめよりちいこまり、三ヶ國の受領もあらば、世の思ひでとおぼしめさば、兎角思ふとはたがひ易し、老公は早や古稀の御齡、一旦萬一の御事あらば、尼御臺は申すに及ばず、相模守どのも苦手なれば、笑止や、和子のうしろ楯は、天にも地にも朝雅どの——たい一株の稚櫻、うさをみ山にうづもれて、日蔭の春をや送

りたまはん。政心憎しとおぼしめす、尼御臺が御權柄も、當將軍家の御腹ゆる。主客たちまち處をかへ、尼御臺になり代はり、新將軍家の御母ど、かしづかれたまはんもお心一つ。稻いま日ッ本國に、天子はあれども無きに等し——六十餘州に此の上なき、榮華の手蔓が目前に、散らつくものをいふ、甲斐なや、事成らんす今となり、俄に二の足ふませらるゝは——さては左馬ノ介どの、御任官にて——さすがは女性。すりや從五位下で御満足か、イヤサ、左馬ノ權ノ介ど、日本六十餘州の總追捕使、大將軍のみくらむとは、天地のちがひと御存じ知らずや。齡ばへなら、貌ばせなら、瓜を二つの政範どの、新將軍家とならべて置いて、何らを取ると申さんに、似たるが中に、勝劣あり品といひ、器量といひ、たが目にも和子へ落札——然程の器量はありながら、くちをしや、御陪臣のひこばへゆる、右を見ても左を見ても、皆丈高き老松古柏、政其の古株に蔽はれて、花は咲くとも見えがくれ埋もれたまはん、行末を、御無念とはおぼしめさぬか。牧サア、その行末も氣が、りなれど、生中のことまいたさば、自身は兎も角も、政範が身の上に、稻サ、生中のことならば、其の御懸念もことわりな

れど、六十餘州の大君を、うみなはんもの天下に無し。事なつたる曉には、やつ七郷は築山同然、政七里が濱も、泉水つゞき、稻將軍宣下の御拜賀に、千幡どの、衣冠東帶、去年の拜賀を見るにつけ、委かたちもそっくりあのみ、何と見るやうではムりませぬか。政かほと申せど、御がてんなく、いふ甲斐なくも、掌に、握りし寶を棄てさせらるゝか。牧サアそれは、稻尼御臺には、わするせられ、相州どのには、邪魔がられ、さらでもいと、あぢき無き、老後を送らせたまはん所存か。牧サアそれは、稻機會は失ふべからず、此の藥劑は、天の賜、政片時も早くお用ひあつて、稻モシ御方、政牧の御方、稻いかいで、政いかいで、ムる。

ト、兩人つめ寄る、牧の方ヒツと思入。此のトタンを、ろくろと俄には、げしき山風の音。堂内の燈火一時に消え、宗近椽の下より、探り寄りて、手早く、藥包を取り身を退る。

政ヤ、只今の山嵐に、稻誰そ無いか。ともしびく。政父上、大切なる藥劑は、稻オ、いかにも。ヤ、無いぞく。誰れかある、ともしびく。

正しく風にて庭上へ——ソレ次郎人の來ぬ間に 政ハ、
 ト此のうち下手より、醫師宗近窺ひいで、這ひまはりて薬の包を拾ふ、トタンに
 上手より義時うかいひいで、一寸たちまはり、次郎其の間へはいりダンマリ摸
 様、ト、義時薬の包を奪ひて元の幕蔭へ身をかくす。醫師は一散に向ふへ逃
 げてはいる。
 政「さてこそ曲者。」
 ト向ふを見込みキツトこなし。堂内の牧の方稻毛不審の思入。左源太松炬
 をどツてかけいづる。

(其三) 山下の人殺し

正面岡の裾を見せ、所々に立木、藪だ、みなせよろしく、上手に大なる松の立木。
 下弦の月やうく、昇りたれど、四下は尙おぼろげなる心、すべて大藏郷南の山
 下道の體。爰へ向ふより前の場の木匠四郎作「なんぞみだぶく」ト念佛を

となへながら出で來たり、よき所にどまり
 四若殿さまのお慈悲にて、惜しうもない命を拾うたれど、世の成行を見るにつけ、淺
 ましいことばかり。御最負うけし比企さまはじめ、仁田さまも御滅亡上つがた
 から下々まで——アあさましいく、ちやうど瘦犬の食争ひ、之れを思へば、早う如
 來さまにひきとられた女や、婆々アどんが美ましい。なんぞみだぶく。

ト念佛をいひく、正面へ來る。此のトタンばたくくにて、向ふより醫師紀河
 の宗近、一散に逃けて來て、四郎作に突きあたり、けしとんで飛びこえる。同時
 に又ばたくくにて、稻毛の次郎、抜刀にて一散にかけて來る。宗近うろたへて
 松の幹に上らうとして、上られぬことなし。此の中倒れたる四郎作起き上る。
 次郎かけつけ、宗近と思ひ、一刀に斬倒す。宗近之れを見て、腰のぬけたること
 し、松の幹にだきついて藏れてゐる。次郎死骸に立ちより、月影に透かし、貌を
 見ること。

次ム、さてこそ。

ト引起こし、懐中を探ることよろしく、ト、さがしもの、見わたらぬといふ思入不審だといふこなし。
去一度ならず二度までも、様子を窺ふ不敵の曲者、心はやり只一刀に——エ、玄なしたり。正しく外に今一人。

ト思入。宗近これを聞きふるへる。
去詮義の手蔓を失ひしは、我れながら不覺の至り。

トよろしく思入。此のうち下手に松炬の見ゆるこゝろ。次郎驚き、急に血刀を拭ひ鞘に收めんとする、トタンに下手より左馬介政範、老僕に松炬をもたせ、太刀持の小童をつれ、潜行の體にて出で來たる。次郎つゝと出で、血刀にて松炬をたゞき落す。老僕驚いてけしとふ拍子に、四郎作の死骸につまづき、ワツといッて逃げる。此の聲に驚き、小童も太刀を持つたるまゝ、一所になり、一散に元來しかたへ逃げゆく。政範指添へに手かけキツトとなる。此の間に次郎元來し方へ一散に逃げのびる、之れと同時に紀河の宗近、松の蔭より這ひ

だし、起き上り、上手へ逃げらんとする。政範目早く見とめ、
曲者まで。

トこれにて宗近また腰のぬけたるこなしへタクタとなる。政範走りよッて襟上をとる、宗近ふるへながら手をあはせる。

龜合點ゆかざる此の場の光景。オ、無慚なる下人のまかばね。今逃げ去つたる曲者は、必定汝が同類ならん、眞ッ直に白狀いたせ。宗、わゝわたくしは、どゝ同類ではムりませぬ。御免なされて下さりませ。

ト此のうち政範月影にて宗近の貌を見ること。

龜汝は醫師の宗近ではないか。宗、エ、さうおツしやりまする貴下さまは——オ、若殿でムりましたか。政、ヤイ、宗近、定めし仔細を存じをらう、眞直に申さずば、疑ひは汝にかゝるぞ。

ト四郎作の死骸に立ち寄り、つく／＼見て

龜こりやこれ正しく最前の——ヤイ、宗近、此の夜深に何用あッて、汝はこゝらに群

御きををるぞ。宗、その儀は。龜、老人を殺せしは何者ぢや。宗、サその儀は。政、ヤア胡亂な眞直に申さずば、父上に申しあげ、嚴重に申し附けうか。宗、マ、申し上げをすく。ぢやによつて、愚老めが、この場に居あはせました其の事は、何卒お慈悲に、御内分に、龜、ナニ此の場に居あはせしを、内分にして呉れいとは。宗、愚老が此のところ、居あはせしことが、知れずれば、此の首がムりませぬ。その老人は愚老と見ちがへられ、ツイはッさりどやられました。ヤレおそろしや。政、シテ何故に其方は、此の場に居あはせしを、包み藏すぞ。宗、その儀は、どうもあなたさまには、龜、言はずば、邸へ引つたてやうか。宗、ぢやと申して、此の事ばかりい。龜、ム、童と侮り、白状せぬな。此の上は、邸へ歸り、仔細を父上へ申しあげん——さうぢや。ト政、範行かうとする、宗、近あわて、袖をひかへ。宗、申しますく。ぢやによつて、御大事を、立聞きました其の事は、何卒あなたさまのお慈悲で、お包みなされて下さりませ。龜、ナニ立聞きせし大事とは。宗、サア其の大事といふは、龜、其の大事とは。

ト宗近絶體絶命だといふ思入。

宗、何をおかくし申しませう、いづぞや、稻毛の入道さま、ひそかに愚老をお招きなされ、云々の仔細がある、毒藥調合仕れど、のツびきならぬお頼み。慾に迷うて毒藥を、ツイ調進致したれど、よく思へば、心ならず、御供養會はこれ幸ひ、御退出を立ちうけて、入道さまにお目にかゝり、何卒藥を取戻さんと、待つ間のたいくつ、御堂の脇、聞くともあしにお三方が、世に怖ろしい御相談。龜、ナニお三方とは。宗、稻毛さま御親子と、龜、稻毛父子と。宗、御母上の牧の御方。龜、エ、シテ其の怖ろしい御相談とは。

此のうち、立木の茂りたる間より、北條相模守義時、前の場の忍び姿にて、ひそかに立ちいで、二人の問答を立聞きしてゐる。

宗、恐れ多くも將軍家へ、私しめが調進せし、其のおそろしい毒藥を

トいひかける、義時、つゝと出て、抜きうち、宗近を斬り倒す。宗近すぐ息絶ゆる。政、範おどろき、飛びすさり、指添に手をかけ、キツとこなし。

義「お騒ぎあるな左馬介——義時なるは。」

ト血刀を拭ひ鞘に收める。

範「ヤ、さういふお聲は——オ、あなたは兄上此の體は。義ホ、不審はもツとも——まづこれへ。」

トこれにて政範前へでる。

義「下人は口のさがなきもの——かりそめにも母上の御ん身の上にかゝはる大事——ふびんながらも——ナ

ト死骸へ思入。

範「スリヤ兄上には、最前よりの一伍一什を 義「いかにも——まツた御ん身が懸念の種たる、其の怖ろしき藥劑も仔細あツてそれがしが、圖らず手に入れ、すなはちこゝに 範「エ、。すりや今さゝし一條は、アノ眞實でムりまするか。義「申すもうたてき事なれども、我れはたいさゝか仔細あツて、圖らず今宵の御密談を 範「エ、。すりやいよゝゝ母上さまが 義「コレ。御密談の其の最中に、さど吹さおろす山嵐。」

義お騒ぎあるな左馬介——義時なるは。

ト血刀を拭ひ鞘に收める。

義ヤ、さういふお聲は——オ、あなたは兄上此の體は。義ホ、不審はもツとも——まづこれへ。

トこれにて政範前へでる。

義下人は口のさがなきもの——かりそめにも母上の御身の上にかゝはる大事——ふびんながらも——ナ

ト死骸へ思入。

義スリヤ兄上には、最前よりの一伍一什を 義いかにも——まツた御身が懸念の種たる、其の怖ろしき藥劑も仔細あツてそれがしが、圖らず手に入れずなはちこゝに 義エ、。すりや今さし一條は、アノ眞實でムりまするか。義申すもうたてき事なれども、我れはたいさゝか仔細あツて、圖らず今宵の御密談を 義エ、。すりやいよく 母上さまが 義コレ。御密談の其の最中に、さど吹きおろす山嵐





義下人は口のさがなきもの——かりそめにも母上の御身の上にかゝる事
 ——ふびんながらも——ナ
 ト死骸へ思入。
 範スリヤ兄上には最前よりの一伍一什を 義いかにも——まツた御身が懸念
 の種たる其の怖ろしき藥劑も仔細あツてそれがしが圖らず手に入れずなはちこ
 ゝに 範エ。すりや今きし一條は、アノ眞實でムりまするか。義申すもうた
 てき事なれども我れはたいさゝか仔細あツて圖らず今宵の御密談を 範エ。
 すりやいよく 母上さまが 義コレ。御密談の其の最中にさど吹きおろす山嵐

燈火消えし宵闇の御堂の庭に吹きとぶ藥劑——ゆくりなくも手に入れたり。是れ天道の助くる所か。焦眉の大事は除きたれど心にかゝるは此の行末 籠エ、なさけなや、浅ましや、さういふお心おはさうとは、さらく思ひもかけざりしが、心ならぬ事あるゆゑ、供養會の歸途内意を含め従者をかへし、最前ひそかに兄上の御館までまゐりしところ 義同じ心に我れもまた取つてかへせし新御堂 籠薬師如來も母上の其の邪まな御心を、まもつてはたまはらぬか。何足らぬことも在さぬに、なせそのやうなおそろしい世にあさましい御くわだて。エ、なさけない、母上さま。

ト政範よろしくこなしあつて、なげく。

義聲高し、人や聞く。子は親の爲にかくすと、かや、此の上は死を以ても、兄弟互ひに母を諫め、道ならぬ御心を、正路に戻しまゐらすべし。畢竟おことを秘藏のあまり、ふと御心の迷はせられ——イヤサ、誠心を以て諫めんに、なと御迷ひの晴れざるべき。ゆめ忠孝を忘れたまふな。とはいふもの、兒故の聞には 籠エ 義アイヤ、

子ゆゑに迷ひ、子ゆゑに悟る、煩惱やがて菩提のことわり。一つ環の接目となるは、子を思ふ親の愛着心——迷ふも悟るも、子を可愛しと思へばこそ。天にも地にもかへじとまで、復なきものにおぼしめす、おことが諫めまゐらさば、御迷ひの晴れんは必定。よくよく分別し賜へよ、母上、父上の御大事、まッた天下の御爲なるぞよ。
ト思入あつていふ。政範ヒツと思入。義時懐中より毒薬の包を取りいだし、此の品は御身の手元に——御異見申さん其の折の、一つの證據ともなるべければ。

ト政範薬をうけとることありて

範「サアそれにつぎ、兄上に 義「ア、コレ。あの人聲は、正しく迎ひの

ト下手へ思入。此の時下手より、以前逃げゆきし老僕、小童先きに義時の家臣

數人、松炬をもちて入り來り、二人を見て

甲「ヤ、それに渡らせらるゝは、乙「我が君では、ムりませぬか。丙「オ、左馬ノ介さまにも、丁「御安泰にてゐらせられ、皆々「祝着至極にぞんじます。義「オ、汝等は

左馬ノ介を警固し、片時も早く上館へ 皆「ハ、ア。

ト松炬をふりてらし、死骸を見て驚く。

義「ア、コリヤ。此の場の様子は、他言無用、老公の御下問あらば、下館よりと申しあげよ。イザさらば、左馬どのにも、範「さやうならば、兄上さま。義「サ、おゆきやれ。何事も、明日の日また

ト氣味あひ。政範心の残る思入、皆々に警固せられ、上手へはいる。あと義時ひとり残り、思入。

義「女子と小人とは、養ひがたしと——機運おのづから循環して、天北條氏に福す、十かへり松の榮えも、今の間、その機を知らぬ女性の猿智恵——ア度しがたし。

ふびんながら、政範は、遂には、幹を枯らすべき、其の毒薦のはびこる原、それとなく、謎をかけ、みづから枯れよと、勧めおきしが、齡には、まして、利發なれば、所詮は、與へし毒薬にて——ム。心外、一物無し、仁義骨肉、觀すれば、皆方便。愚昧ある者、此の理を覺らず、親疎に執着して、親を傷ひ、名に執着して、實を殘ふ。テモあさはかな人ぞ、

ろぢやなア。

第三段

(其二) 七夕の大雷雨

正面廣椽附の奥座敷照子の前居間の體書棚小簾なぞ飾りつけよろしく下手
 さげて廊下續き廻り椽の別室。居間前秋草の茂りたる前栽まよろく流れ。
 下手枝折戸。よき處ろに數脚の机をすゑ幾本の燈臺に火を點し香爐供物な
 ど總て古式の通り。居間の上手に照子の前机をひかへ菊燈臺の下に梶の葉
 に古歌を書いてゐる女童甲乙小手卷に巻いたる願ひの糸一いろ十筋づ、五
 色小手卷の數五つを竿にかけてゐる。

甲一どせに只一夜てふ棚機つめの契さへこそ羨まし身はすて小舟梶の葉にこが
 るい思ひかくとだに誰れかさぎの橋わたし 淨稻毛の入道重成が此の秋の
 かりやしきつくらぬ庭の千草かけいつしかくいゑるまふるく水小萩がくれの蟲

の聲星祭る夜の風情なり

ト此のうち女童糸をかけまふ。照子の前梶の葉に歌を書きかけ
 照オ、ふたりとも太儀であつた。用あらば呼ぶ程に遠慮なら退つて休みや。や
 んがて折枝が戻りやつたらよい褒美をとらせませうぞや。甲ありがたらムりま
 する。乙さやうならば 甲乙わたくしどもは 照オイノウ。若し折枝が戻りや
 ッたらすぐにこちへというてたもや。甲乙かしこまりました。照ゆきや〜。
 甲乙ハ、ア。

ト廊下よりはいる。

淨どもしのかげに照子の前まよんばりと筆さしおき

ト此の間歌をかきかけて愁のこなしあつて

照いつぞや薬師の御堂にて、父上大逆の御所行ありと重保さまのお物語りびつく
 りはまたなれどよもやと思ふ未練から心ためさん方便かと重保さまをば疑ひし
 が思ひぞあたる昨日けふ。萬一疑ひが真とならば日ごろの願ひは皆うたかた生

き存へて何たのしみ。あの折枝にいひつけて實否を探る其のうちも心にかゝる善と悪。吉左右か悪左右か幸ひこよひは七夕の願ひ一つは叶ふといふあの遣り水に祈願を籠め此の梶の葉を當座の歌占。さうぢやく。選ひとりうなづき前裁に降りたつ裾の秋の風千草の蟲も音をとめて弓はり月のかたふくや空くろくんと雨もよひ。

ト文句の通り照子の前歌をかきたる梶の葉をとりて階子を下りまよろく水に立ちより空に向ひ祈念すること。

照我が祈る事は一つぞ天の河空に知りても違へざらん。表は吉兆裏は悪兆。選祈願をこめて抛入る、折からさつと落す風あなやと見る間梶の葉は行衛白萩夏萩のまづえがくれに流れゆく

ト照子目をねふり梶の葉を水中に投げる。ドロくど風の音梶の葉まかけにてはるかにとび萩の下枝にかくれて流れゆくこと。

照エ、どんな。もしもやこれも願事

津若しや叶はぬ知らせかと又女氣のしをり戸口息せきかけ入る腰元の折枝は目早く

ト照子の前愁然と流をみやりよろしく思入。下手より折枝急がはしくいで來たり折枝戸をあけて内に入り

折エ、照子の前さま、こゝにおいでなさいましたか、一大事になりましたわいなア。照エ、大事とは心が、折マ、あれへ、こゝは端近

選誘はるいも誘ふも胸轟くや遠鳴りの神來たるらん大空はくろみ渡りて物ずい

ト折枝こなしあつて照子の前を促して居間に上る。此の間遠雷の音。照シテ大事とはその仔細は、折お氣のせくはお道理ぢやが容易ならぬ御大事大

さい聲ではいはいはれぬこと。大慶さまがお留主ゆゑ心をゆるし飲ったか左源太さまのけふの泥酔お邸からの歸路でがな小間物巷路の往來でのめらしやるやら、反吐すやらお侶は鈍な藤内どの、恰どそこへ出合がしら貧乏くじと引きおこし水ま

ゐらする。貌洗ふはづみに落ちし一通の穢い物で汚れたを洗ふはづみに封とけて、ふつと讀んでびつくりぎやうてん。マ、これ讀んでごらうじませ。

ト文句の通りあつて

照ヤ、これは父上から、牧の御方への 折アモシ

ト折枝よろしくこなし。

淨封もたのみも切れ果て、讀むごとくに胸つぶれわつとばかりに泣き伏せしが、すつくとたちまち文まきをさめ、奥の間さしてかけゆく。

ト照子の前密書を讀むく驚く思入悲歎のこなしよろしく、大なさに泣く。

ト決然と貌をあげ、密書を手に持ち、急に奥の方へゆかうとする。折枝あわて、袂をひかへ

折ア、モシ何處へ血相かへて——こりや何となされました。照エ、止めやんな、そこ退いた。面とあうて證據は此のふみ。折スリヤお前は大殿さまに、其れを證

據に御意見を 照ハテ知れたこと、そこ離しや。折イ、ヤめつたに離させぬ。如何お年がゆかねばとて、お前はお氣でも狂うたか。これほどまでの御大事、けふまでもお前にまで、お包みなされし御悪事を、今さら御意見なされたとて、おいそれと大殿さまが、何でお聞きなされませう。毛を吹いて疵とやら、破れかぶれといふ事が、どんな大事にならうも知れぬ、お心しづめ、コレ申シ、マア——おまちなされませ。照、それぢやというて、此のまゝには 折サア其の邊をわたくしも、案じたなりやこそ此のおしらせ——マア——下にござりませ。短氣は損氣、此の折枝が、一生の智慧袋事の破れにならぬやう、あざといながら思案がある——マ、下にゐて下さりませ。

淨言葉をつくい、なだむれば、又は、ゆるむ女氣に涙のみこそ、さきだてり

ト折枝よろしくとめる。照子の前下にて又泣き沈む。

折コレ泣いてゐるところでない、此事餘所より露見せば、お家は滅亡、それのみか、焦れてござる重保さまに、彌勒の世までも逢はれませぬ——サ、ちやによつて

分別どころ、大殿さまの御爲にも、お前の爲にも此の大事は、成ッても大事、洩れても大事、外から露見せぬうちに、コレ申シ照子の前さま、お前の口から内々で、かやうかやうと重保さまへ 照エ、折ハテマアお聴なされませ。仁義に強いと一ぱいに評判高い畠山様、ふツとあらた其の時は、つれないやうにお見えなされても、親御様も、重保さまも、お情ふかいお氣質と、よう呑みこんだ此の折枝——サ、たどへ日ごろはどうあらうと御親類なり、御大事、たのめば引かぬ義、狭心に、きツとあちよう双方の破れにならぬそのみか、親御さまとは別々の、お前の心も、掲焉に、成るか成らぬか大事の瀬戸命にかけて折枝がお使ひ。幸ひこよひは重保さま、だま腰越にござる筈、お侶がしらは瀬平どの、此の折枝が一生懸命、足らぬところは口上で、十が十まで去おほせませ。かういふうちも心がせく、ちやツと一筆、此の事をば 照、それぢやというて親の悪事を、折洩らすが却ッて孝行なら、何の仔細がムリませう。たとへお前がどのやうに、御意見あらうと日ごろから、聴く親御さまちやムリませぬ。ましてや此れは牧の方さま兄御さま、で御合體生中な事いひだせば毛

を吹き疵のそれよりか北條さまにも御縁者なら仁義に強い畠山さま何のお爲にわるからう。迷うてござるところでない、幸ひあれに筆硯——エ、モ鈍な御料紙

淨ひどり氣を焦るまな先へ、ひらめく稻妻、鳴る神に、あなやどすさる後にも、キラリ、稻妻、乃のひかり、あツとたまぎる聲の下、ツといでし稻毛の入道

ト折枝料紙筆硯をとりそへて、照子の前の前へ持行かんとする、トタンに雷近く鳴る、稻妻室内に入る、折枝、びツくりたじろき、背後の襖につさわたる。襖越しに刀、乃あらはれ、折枝手を負ひ倒れるト襖をけひらき、稻毛の入道血刀をひツさげいづる。

照ヤ、あなたは、父上さま——こりやむごたらしう折枝をば、淨かけ、寄る、姫をばどけたふし

ト文句の通りあツて、稲いはうやうなき不孝者めが。子は親の爲に匿すといふ、其の一大事を他人に知

らせ、主親の破滅を思はぬ、揃ひしも揃ひし横道者めが、うぬ。
淨、照子の前貌ふりあげ

ト 照子の前起きかへり、きツとなツて

照、コレ横道といふことを、父上、あなたは知ツてかいなア。 鴉、なんと 照、今更いふ
はおそけれども、なさない御くわだて、如何なる天魔の魅入れしぞや、たとへ非道
の御大望が、首尾よう成ツても十年廿年、只かりそめの御榮花、天知る、地知る、後の世
の報應はおろか、此の世でも、大悪人の名を取ツて、淺ましい御最後を、今目のまへに
見るやうな。横道者といふことを、かりにもおツしやるお心なら、御法體にもはぢ
たまひ、コレ喃申し、父上さま、お心あらため下さりませ。
淨、袂にすがりかきくどけば、手負ひもやうく、面をあげ

ト 折枝手さすをこらへ、這ひより

折、此の折枝が、人智恵も、所詮はお家を思へばこそ、人で無しとはお情なら。 悪事を
おぼしたちたまふも、御子孫の御爲に、成就ても成らず、成就ぬときは、何御ぞんじ無

い、姫さままで、かゝりやつながる悪縁に、焦れてゐる御方どの、えにしの絲の断れた
なら、取りも直さず、姫さまの御玉の緒を断らしやります、が、コレ親御さまの慈悲
かいなア。 姫さま不便とおぼしめし、怖ろしい御くわだて、思ひとまツて下さりま
せ。 照、オ、よういうてたもツたぞ。 それはとまでにみづからを——コレ手は淺
い氣をたしかに——必ず死ぬまい、死ぬまいぞや。
淨、手負ひにひッしと抱きつき、いたはる袖に、滾々と流る、血汐血の涙、入道は耳に
もかけず

ト 文句の通り、よろしくある。

鴉、ヤア身勝手なるよまひ言女童の知ることかえ。 助、からぬ汝が命、きりくどく
たばりをれ。 照、エ、なさない其のおことば、すりや此れほどに申しても、道なら
ぬ企をば、 折、思ひとまるお心は、二人モシ、ござりませぬかいなア。 鴉、ハテ、くど
い、しれたことだワ。 照、ハ、ハア。
淨、はッどばかりに泣き伏せしが、もう此の上はと、父が指添ぬくより早く、喉へあは

やど這ひ寄る折枝、ひつたいて我れど我が乳の下深く貫くきつさきさつと流る
血は瀧津瀬折枝は苦しき息の下

ト照子の前つゝと寄りて入道の指添を抜き自害せんとする折枝指添をひき
たくりて我が乳の下を貫く照子驚き介抱する。

折ア、モシかまうて下さりませ。どうせ死にゆく此の折枝が最期に残すたつ
た一言——お前様は今こゝで空に死なしやる御身で無い。叶はぬまでも異見し

て命のばり親御さまもまた兄御さまも助かつて願の通り六郎さまと——たゞ
方艸は六郎さま

運隙を見わはせ片時も早うといふ舌こはる断末魔入道怒りの聲荒らげ
折ヤア死際まで要らざる入智恵につくさ不忠の下司女め。

運手負をはったと椽より下へ喃無慙やど照子の前かけ寄る頭にはたゝがみ抱き
おこせば絆断れてはつたり落つる指添の血汐を洗ふ雨の足車軸を流す如くなり

ト入道折枝を階段の下へ蹴落とす照子の前かけよりて介抱すれど折枝は已

に息絶え雷雨彌々はげしくなる。
淨折しも奥よりかけ来る次郎

ト次郎重政下手廊下口よりかけいで

政父上こゝに御座ありしか、一大事と相成りましたぞ。折ナニ、一大事とは 政ヤ
折枝があゝの體は 折大事を知つたる下司女むすめ照子をそゝのかし訴人せん
どいたせしゆゑたちどころに成敗せり。シテ——大事とは何事なるぞ。政密事
を知つたる紀河の宗近當晩より行衛知れずさてこそは油断ならずと思ふにたが
はず宗近めは當夜南の山下にて義時の手にかゝり空しくなりしと只今注進。折
ヤ、スリヤ、義時が、なたの密事を 次氣取りしからは露見は目前。父上にはこ
れより直に執権邸へ御越しあつて御方と萬事の御商議。折オ、先んずれば他を
制す此の上は一刀兩断——時宜によつては義時もろとも 政幸ひ平賀の右衛門
佐どのも、こよひはいまだ腰越宿り、うれがしより密使を走らせいざといはば兼ね
ての計畧 折オ、何事も餘事はおぬしに——からいふうちも心が、イデ

すぐに

淨はや立ちあがる椽端に、これ喃まつてと照子の前

稻エ、又しても邪魔なとめだて 政父上にはこゝかまはず 稻オ、合點

淨奥の間さしてぞはしり入る

ト文句の通り、照子の前椽端にかけ上りといひるを、次郎立ちふさがる。此の

ひまに入道奥へはいる。此の間雨休み雷遠く鳴る。

照此の上は——オ、さうぢや。

淨はしりよつて死骸のそば落ちたる指添血染の柄取る手をおツかけ、まツかど止

め、

ト文句の通り、照子の前自害せんとする重政とびかゝり其の手をおさへ

政、ヤア血迷うたか、たはけものめが。折枝が最後は自業自得何うろたへて此のあ

りさま。照エ、何ゆゑとは何事ぞいのう。かくまで根深き御悪事を知りつゝ、御

異見言はうにこそ、非道をすゝむる不孝不義。兄で無い汚らはしい、そこ離して下

さりませ。政、ヤア兄に向ひ無法の雑言。コリヤおぬしは狂氣したな。マ、離せ。

照、いや、離さぬ、そこ離して

淨、兄妹争ふ、其の折柄又一しきり降り来る、雨蓑笠出立甲斐々々しく、枝折戸口より

かけ入る郎黨

ト文句の通二人争ふうち、下手より稻毛の郎黨籠手田の勘六、蓑笠でたちにて

かけ來たり、

勘、大殿さまの御いひつけ、腰越への火急のお使ひ、一大事の御書状は、はや御出來で

ムり升るか。次、オ、心得た。今即刻

ト指添をもぎとつて、かなたへ投げやり

次、いひふくむる仔細もある、書院先に相待ちをれ。勘ハ、畏ッてムりませする。

淨はッど答へて引かへす、又吹き落とす山嵐に横ぶる強雨はたいがみ庭には千艸

の逆浪だち、なびき倒るゝ供物机まるふ小手巻竿もるともに五色の絲のさら、く

ト此の間照子の前もがき狂ふをおさへながらふツと糸に目をつけ

政オ、これ究竟。

淨これ究竟と五色の小手巻ひちぎッてさそくの機轉氣も半亂の妹の小腕ねぢ
わけて泣き入りもがくをいましめ繩餘るはぐるく椽先の柱にまッかど身づく
ろひ

次不便ながらも去ばしの究屈

淨いふ間も心は奥のかた足を空にぞ入る後に

ト此の間大あらしになり前裁の飾り付けはたくと倒れること五色の絲竿
のまゝ重政に倒れかゝる。ふと心附いたる思入泣さくるふ照子の前を五色
の絲を一束ねにして取繩のやうにしてこれにて縛り椽先の柱に結びとめ其
のまゝ急ぎ奥へはいる。

淨無慚なるかな照子の前は姿も亂れ黒髪もおどろくとふりみだす雷雨が軒に
いましめのこれや五濁の身を色絲にもがくほど尙搦み細



これ究竟と五色の小手巻ひちぎッてさそくの
機轉氣も半亂の妹の小がひなねぢあ
げて泣き入りもがくをいましめ
繩あまると身づくろひ
柱にあつかと身づくろひ
次ふびんながら
去ばしの
窮屈

ト此の間照子の前もがき狂ふをおさへながらふツと糸に目をつけ

政オ、これ究竟。

淨これ究竟と五色の小手巻ひつちぎつてさそくの機轉氣も半亂の妹の小腕ねぢ
あけて泣き入りもがくをいましめ繩餘るはぐるく椽先の柱にまツかど身づく
ろひ

去不便ながらもまばしの究屈

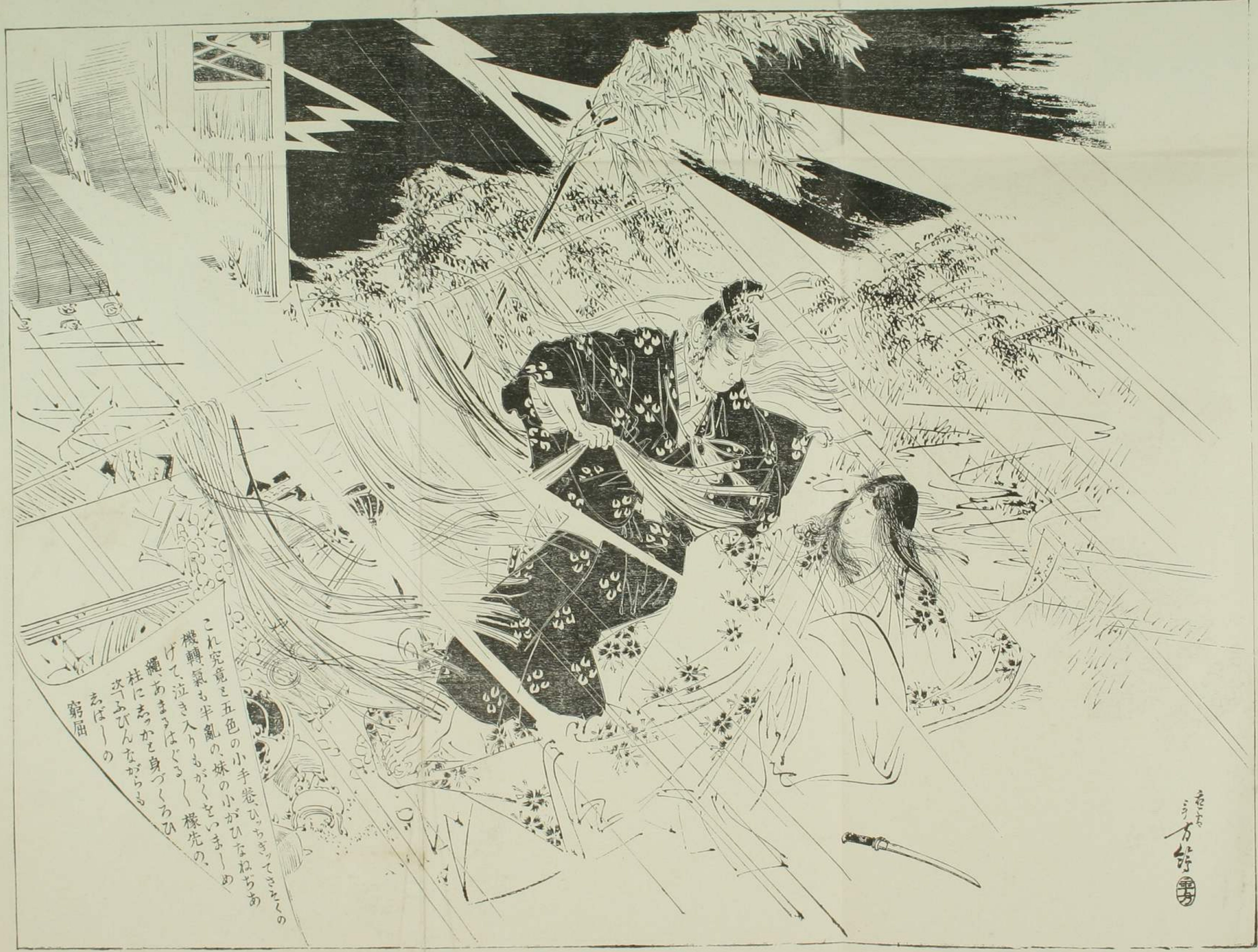
淨いふ間も心は奥のかた足を空にぞ入る後に

ト此の間大あらしになり前裁の飾り附けはたくと倒れること五色の絲竿
のまゝ重政に倒れかゝる。ふと心附いたる思入泣さくるふ照子の前を五色
の糸を一束ねにして取繩のやうにして之れにて縛り椽先の柱に結びどめ其
のまゝ急ぎ奥へはいる。

淨無慚なるかな照子の前は姿も亂れ黒髪もおどろくとふりみだす雷雨が軒に
いましめのこれや五濁の身を色絲にもがくほど尙翫み繩



三才方
三才



これ究竟と五色の小手巻ひちぢきいざよひの
 機轉氣も半亂の妹の小がひなねぢりあ
 げて泣き入りもがくをいま一の 椽先の
 繩にあまきと身づくろひ
 柱にあかたながら
 次ふびんながら
 あばしの
 窮屈

まさ
 方好
 印

去不便ながらも去ばしの究屈
 淨いふ間も心は奥のかた足を空にぞ入る後に
 ト此の間大わらしになり前裁の飾り付けはたくと倒れること五色の絲竿
 のまゝ重政に倒れかゝる。ふと心附いたる思入泣さくるふ照子の前を五色
 の糸を一束ねにして取繩のやうにしてこれにて縛り椽先の柱に結びどめ其
 のまゝ急ぎ奥へはいる。
 淨無慚なるかな照子の前は姿も亂れ黒髪もおどろくといふりみだす雷雨が軒に
 いましめのこれや五濁の身を色絲にもがくほど尙弱み細

照喃誰れぞ来て此の絲解いて——たもいのう。叶はぬまでも今一度、いうて見た
し、とめて見たい。

淨我れを忘れてかけいだしおせればまるふ軒の端にひらめく稻妻横しぶさざら
でも袖の雨やさめ骨身もそぼつばかりなり

ト文句の通り、いろ／＼ありて、ト、まばられたるま、泣き伏すこと
照、情なや、もはや時刻もおくれたり、此の上は折枝もろとも、父上の御爲に、ま

三途のみちまゐるべ。幸ひあそこに指添が
淨おぼえずかけよる目先にぬれそぼちたる以前の密書照子の前きつと目をつけ

ト文句の通り。ト、軒端に落ち散りて雨にぬれそぼちたる以前の密書に目
をつけ、きつとなる

照折枝が最期の遺言に、叶はぬまでも此の事を、六郎さまにひそかに知らせ——オ
、それよ、こよひは六郎重保さま、まな腰越にふるなら、こゝからは七八里、たとへ百
里が千里でも、思ひこんだる女の念力、幸ひあらしの暗まざれ、父兄と一つで無い、此

の身の心を神佛の、あはれみたまはば此の一念やはか貫かいでおかうか。一念疑
ッては石ともなる。南無や八幡大菩薩観音さま薬師さまこよひにちいまる一家
の運命。南無叶へたまへさッてたべ。天道さま佛さま。エ、されぬかくちをし
や。

淨躍り上りどび上り正體なげくかうべの上黒雨をつんざく稲びかり又もや目に
つく以前の指添

ト照子の前いろくもがき狂ふことありて、ト指添に目をつけ

照ム、此の身も共に切らば切れ——あの指添で——オ、さうぢや。

淨かけよる軒端にぐわらくく、轟くいかづち氣は半乱身を横さまに白刃の上
伏しまるびく、糸もろどもに身をすりつけきらんく、と狂乱の頭にひらめく稲
びかり左右に波うつ五色の糸もつれ乱る、黒髪は横ふる雨にさかたてがみ、蹶か
へす裳裾のからくれなゐ牡丹はな咲く石だに川に母失ひし兒獅子の悲しみ狂ふ
風情なり

照エ、されぬかされぬかいのう。

ト照子の前半狂乱となりて指添のはとりへかけ寄り文句の通り身をすりつ
け、糸を切らんとするまぐさいろくあり。ト、數ヶ所に疵を負ひ、尙されぬ
こなし。

淨七顛八倒身もだへし、もがき狂へばいつしかに、雪の肌紅の雨篠みだす大叫喚
かくどはるかに次郎重政あなやと驚きかけいづる椽はな間近くぐわらくく、
又もや破る、いかづちに、おつとたまぎる右左り、つんざく柱燃え立つ炎いまいめ
も、ふつと氣のつく照子の前

ト重政奥よりはしりいで、照子の前をとりおさへんとするトタン、椽の柱に落
雷する、二人ながらアツといッて倒れる。照子の前は及の上へ手ひぞく轉ぶ
こゝろ。

照ヤ、された。チエ、かたじけなやうれしやなア。
淨手に取る指添肩先より流る、血汐の雨瀧津瀬腰越さしてぞ

ト照子文句の通り、一散に向ふへはいる。

(其二) 旅館の曲者

腰越驛旅館の中門外。深夜の躰。こゝへ平賀朝雅の郎黨甲乙丙松炬をふりてらして、上手よりばた〜にてかけいで

甲「合點ゆかざる今の物音 乙「ついで聞いて聞こえし女の聲 丙「何にもせよ、どくと實否を、甲「たし申さん。

甲乙丙、下手へはいる。引きちがへて、下手より北條政範の郎黨△○□同しく松炬をもちて出で來たり

△「ヤレ〜何の事だ。藤澤までどのお侶觸れが急に腰越とかはったゆる ○「けふばかりはのんびりと、宵寐の果報と思ひの外 △「ぐッすりよい心持に寐入ったところを ○「きやッといッた女の聲と □「今の物音で起こされたが △「何の事だ女はおるか鼠一疋 ○「立ちさわいだ躰もムらぬ。三人ハテサテ馬鹿々々しい。

此のうち下手より以前の甲乙丙戸板の上へ前の場の籠手田勘六(簀笠打扮)の死骸を載せていで來たり

甲「そこにゐるは北條どの、御家來衆ではムらぬか。乙「只今かしこの古木の底にて 丙「うさんな死骸を 三人見つけてゐる。△「ナニ、うさんな △○□「死骸とはト皆々立寄る、甲乙丙、戸板をおろし

甲「最前の大がみなり、一定此のあたりへ落雷とぞんじをりしが 乙「御覽なされ、あの折雷火に撃たれしものにや 丙「まッ此の如くくすぶりかへり △「いかさま、甲「妻々々しき此の打扮 ○「こりや曲者に △○□「相違ムらぬ。甲「此のまゝには捨置きがたし。○「いで我々も諸共に 丙「ゆい〜主君へ 皆々「申しあげん。ト此の時中門内より

藝アイヤまゐるに及ばぬ。朝「それへまゐつて 二人「檢分なさん。

ト小童に松炬をもたせ、左馬ノ介政範、右衛門ノ佐朝雅、中門よりいで來たる。朝「只今委細は聞き知つたり、面體は見わかずとも、衣服身のまはりに見覚え無さか。

範「懷中を改め見よ。△○ハ、畏ッてムリまする。」

ト△○勘六の懷中を改むること、密書のなかば雷火にて焼け焦げたるをとりいだす。

甲「なかば焼け焦げてはムリますれど、乙「どうやら怪しい此の一通。」

トさしだすを政範うけとり

範「さてこそ。松炬これへ。」

ト政範密書を繰りひらく、朝雅も立ち寄り見る、小童松炬をさしだし紙面を照らすこと。讀むうちに、政範朝雅双方一度に驚くこなし。

範「ヤ、これは

ト朝雅さそくに小童の松炬持つ手を抑へる、ト火炎密書に觸れてすぐ燃えあがる。

朝「エ、何を粗相

ト小童をひきとらへ

朝「いたしをるのだ。」

ト突きとばす。小童よろめき倒れる。皆々驚くこなし。政範朝雅双方よろしく思入。

(其三) 奥庭の落花狼籍

畠山重保が寢所の前旅館の奥庭。こゝに前の場の稻毛の女照子の前氣絶してゐるを、重保が郎黨瀬平抱き起こし、重保燭をとり立ちかゝりゐる。

瀬「ヤ、曲者と思ひの外、こりやこれ正しく稻毛の御息女。重ナニ稻毛の——照子どのとな。」

ト重保も驚きて顔を見ること。

保「げに思ひがけぬ照子の前。かゝる深夜に只一人、瀬「ヤ、おめしものも血汐にまみれ、手疵を負はせたまへる御様子。保「如何なる椿事出来せしか。何はしかれ、疾く介抱。瀬「心得ました。」

ト介抱することよろしく

保照子の。瀬照子の前さま。

ト照子の前やうく心づき目をひらき

照オ、あなたは、六郎さまか

ト照子とりすがるを、重保しッかりとおさへ

保コリヤ照子の、気がつきしか。照そんならこゝは腰越かいの。すりや一念が

届いたか。チエ、かたじけない。

トうれしき思入ありて泣く。

保気がりなり、照子の前どの、如何なる變事の。瀬起こりましたぞ。保どく仔細は

を。瀬お話しなされ。照ナウ重保さま、一大事になりましたわいなア。

ト泣く。

保不覺なり照子の前泣いてゐる所でない。シテ其の仔細は。照サア其の仔細は

此の一通——マこれを見て下さりませいなア。

ト懷中より前の場の密書をとりだし、重保に渡すを受取りて讀むく、大に驚く思入。

保ヤ、こりやこれ正しく御身が父の入道より——ム、かたうどは平賀の朝雅

——容易ならざる此のくわだて。照圖らず折枝が手に入れし、其の密書にて知ッ

たれども、何とせんかた談合を、立聞く父が非道の刃不便や折枝は、あへない最後。

保ナニアノ折枝が瀬エ、照それさへあるに父兄が、悪事露見と見てとッて、

平賀どのへ火急の内通、一定君の御大事と聞き知る此の身はいましめの、えんにか

らまれ猶豫せば、親を地獄へおとすも同然思ひ切ッたる未練の繩目、あなたを力の

此の御訴訟御方はじめ父兄にも、別條無いやう重保さま、此の身不便とおぼしめし、

調停なされて下さりませ。

トよろしくこなし。此のうち重保密書を読み了はり

保驚き入ッたる大逆無道此の文面による時は、毒藥調進の一條は、牧の方は申すに

及ばず、あの右衛門ノ佐朝雅も、一味たること掲焉なり。ヤイ瀬平汝はすぐさま飛

脚の準備。我れはこれより奥へまゐり、此の密書を證據に、日ごろより不審と存せし、あの朝雅めが作り忠義の面ひツばき、さつと糺明いたしくれん。照エ、すりやあなは此の事をば、アノ表沙汰になされうとや。保オ、サ照子どの、御身の心中も不便なれど、驚き入つたる入道が大逆心御身どの縁もこれまでなるぞ。照エ、ハ、ハ、ハ。保ヤ、イ瀬平、何をぢぢ。瀬ア、モシ仰では、ムリますれど、女性の御身では、るゝと、雷雨も恐れず腰越まで、おこしなされし照子の前さま、親御さまのお命を、助けたいばツかりの、其の御孝心をお察しなされ、何卒此の儀は穩便に。保ヤ、アそれしきを汝に聞かうや。天は一物の爲に季節をたがへず、忠義を存する武士が、公道を私情にかへんや。瀬サ、さやうでもムリませうが、あなたさまと姫さまとは、おいひなづけの御中らひ。保黙れ瀬平、かゝる大逆露顯の上は、牧の御方どて用舎は無い、まして逆家のかたわれをば、縁者などは、汚らはしいわえ。照エ、そりや聞こえぬ、お情ない。子の口づから現在の親の非道を御訴訟も、一つは心の潔白を、あなたに知らせはめられて、せめてもそれを功に、親の命を助けうと思つてゐ

たを情ない、聞こえませぬ、六郎さま。保ヤ、ア見さげたり、照子の前おのれを清うせん爲に、父を訴人とは不孝の振舞。照ハ、ハア。保エ、時移る、さりとて支度いたせ。照すりやせうあつても、此の身の願ひは。保くどい、叶ひ申さぬ。照ハ、ハア。

ゆかうとする、袖を捉らへてはなさぬを、手荒く拂ふ。照子はたと倒れて其のまゝ泣きおとし、すぐ懐刀をぬいて乳の下を貫く。

瀬ヤ、こりや何と——早まつたことをなされましたなア。

ト瀬平うろたへ介抱する。

照イ、ヤ早まらぬ。子は親の爲にかくすといふ訓に戻りし不孝の罪死ぬる時刻は後れたれど、只一目でも重保さまに息あるうちに逢ふことの、叶うたは身の本望、たとへ不孝の子となるも、それに心は残らぬども、此の身の心を重保さまに知られで死ぬるが、いまはの迷ひ。

トよろしく苦しむ。重保は手負に寄りそひ

保「オ、其の心は此の重保、よう推量して候ふぞや。照そんならわらはの心中は

保「オ、心底見えた。照チエ、うれしや、かたじけない。

ト重保の手をとらへ嬉しき思入だんくにおちいる。

保「南無阿彌陀佛、くく。」

ト照子ばかりとなる、主従よろしく愁のこなし。ト、氣をかへ

保「オ、我れながら不覺千万。汝は死骸を取りかたづけ、急ぎ出立の用意いたせ。

瀬畏ッてムリとする。重、早くいたせ。瀬、ハ、。

ト瀬平死骸をいだし下手へはいる。

保「いで此の上は、朝雅を糺問なし、時宜によつては、たゞちに鎌倉へ引きかへさん。

オ、さうだ。

トゆきかける。

朝「アイヤおいでに及ばず、朝雅みづからそれへまゐり、委細申開くでムらう。

ト下手奥の植込のかけより、平賀右衛門佐たちいで、氣色ばみて立戻る重保に

向ひ

朝「イヤナニ六郎どの、最前よりのあらましは、ほゞ物かげにて承つたり、密書を證據

にそれがしを疑はる、條道理なれども、それには深き仔細あること、保「ヤア、

くし右衛門ノ佐、和殿が表裏の心腹は、それがし夙より疑うたり、言葉巧みに陳す

るとも、此の一通が動かぬかすが、ひ速かに觀念なし尋常に白状あるか、但しは細う

ちひつたてゆき、問注所の白洲に於て、きつと糺問仕らうか。朝「逆上まゝ、六郎重保。

身不肖なれども、此の朝雅は、忝くも源家の嫡流、頼義朝臣が六代の末孫にて、故右幕

下の猶子でムるぞ。出所不明の密書を證據に、見事、和殿が一存にて、繩うたる、な

ら、うッて見られよ。保「ヤア舌長し。え、打つまいと思はる、か、罪證既に顯然た

るに、不明呼ば、りかたはらいたし。朝「ハテサテ、死人に口無し、誰れを證據に、其の

一通の出所を明すぞ、イヤサ、畠山と稻毛とは、人も知つたる多年の確執、偽筆謀書も

間々あるならひ——サ、曖昧不明の證據をいひたて、人もあらずに執權の、其の

執權たる牧の方を、大逆罪におとさんなど、は——ム、さてはいひなづけと聞き

こよひ最後の時^{とき}到^{いた}り、日^ひごろ信^{しん}ずる佛^{ぶつ}神^{じん}へ、此^この身^みを犠^ぎ牲^{せい}の誓^{せい}願^{がん}は、母^はが善^{ぜん}心^{しん}發^{はつ}起^きの
ため、又^{また}二^{ふた}つには天^{あま}が下^{した}の騷^{さわ}動^{どう}未^み然^{ぜん}に除^{のぞ}かため。ナウけふあすの此^この身^みをば、不^ふ
便^{べん}と思^{おも}うて給^{たま}はらば、遺^い恨^{こん}を忘^{わす}れ、意^い趣^{しゆ}をすて、母^は牧^{まき}の方^{かた}が悪^{あく}事^じをば、内^{うち}分^{ぶん}にして下^{くだ}さ
りませ、此^この政^{まさ}範^{のり}さへないならば、源^{みなもとの}涸^かれし濁^{にご}り江^えの末^{すえ}の流^{なが}れはおのづと清^すむ、ナウ
聽^きき入れて下^{くだ}されい。のう。

ト右^{みぎ}と左^{ひだり}にとりすがりて、よろしくこなし。重^{しげ}保^{たか}も愁^{うれ}のこなし、感^{かん}じ入^いりし思^{おも}
入^{いれ}。

保^{たか}けなげに候^{まう}ふ、左^さ馬^まノ介^{すけ}どの。和^わ君^{きみ}が切^きなる心^{こころ}のうち、察^{さつ}し入^いりて候^{まう}ふぞや。御^{おん}
わざはひの根^ねだに絶^たえなば、意^い趣^{しゆ}遺^い恨^{こん}は私^{わたくし}しごと——平^{ひら}賀^がどの、所^{ところ}存^{ぞん}はいかに。
孝^{かう}子^しの心^{こころ}を無^むにせんこと、武^ぶ士^しの本^{ほん}意^いにあらじ。朝^{あさ}申^{まを}さる、所^{ところ}我^{われ}が意^いを得^えたり、朝^{あさ}
雅^がいかでか異^い存^{ぞん}あらん。只^{ただ}こゝに一つの難^{なん}義^ぎ、左^さ馬^まノ介^{すけ}は、御^{おん}臺^{だい}所^{ところ}御^{おん}迎^{むか}ひの正^{せい}使^しな
るに思^{おも}ひがけぬ、こよひの珍^{ちん}事^じ、勿^{もつ}論^{ろん}上^{じやう}洛^{らく}は叶^{かな}ふべからず、さりとして直^{ただ}ちに引^ひき返^{かへ}さ
ば、恐^{おそ}らくは疑^ぎ惑^{わく}を生^{しょう}じ、間^まちがひ出^{しゅつ}來^{らい}のもどるとならば、難^{なん}ナウ、それにも思^し案^{あん}あ

こよひ最後の時^{とき}到^{いた}り日^ひをる信^{しん}する佛^{ぶつ}神^{じん}へ此^この身^みを犠^け牲^{せい}の誓^{せい}願^{がん}は母^{はは}が善^{ぜん}心^{しん}發^{はつ}起^きの
ため又^{また}二^{ふた}つには天^{あめ}が下^{した}の騷^{さわ}動^{どう}未^み然^{ぜん}に除^{のぞ}かんとため。ナウけふあすの此^この身^みをば不^ふ
便^{べん}と思^{おも}うて給^{たま}はらば遺^い恨^{こん}を忘^{わす}れ意^い趣^{しゆ}をすて母^{はは}牧^{まき}の方^{かた}が悪^{あつ}事^じをば内^{うち}分^{ぶん}にして下^{くだ}さ
りませ此^この政^{まつり}範^{のり}さへないならば源^{みなもとの}涸^くれし濁^{にご}り江^えの末^{すえ}の流^{なが}れはおのづと清^{きよ}むナウ
聽^きき入^いれて下^{くだ}されいおう。

ト右^{みぎ}と左^{ひだり}にとりすがりてよろしくこなし。重^{おも}保^{たか}も愁^{うれ}のこなし感^かじ入^いりし思^{おも}
入^い。

保^{たか}けなげに候^{まほ}ふ左^さ馬^まノ介^{すけ}どの。和^わ君^{きみ}が切^きなる心^{こころ}のうち察^{さつ}し入^いりて候^{まほ}ふぞや。御^ご
わざはひの根^ねだに絶^たえなば意^い趣^{しゆ}遺^い恨^{こん}は私^{わたくし}しごと——平^{ひら}賀^がどの、所^{ところ}存^{ぞん}はいかに。
孝^{かう}子^しの心^{こころ}を無^むにせんこと武^ぶ士^しの本^{ほん}意^いにあらじ。朝^{あさ}申^{まを}さる、所^{ところ}我^{われ}が意^いを得^えたり朝^{あさ}
雅^{みや}いかでか異^い存^{ぞん}あらん。只^{ただ}こゝに一つの難^{なん}義^ぎ左^さ馬^まノ介^{すけ}は御^ご臺^{たい}所^{ところ}御^ご迎^{むか}ひの正^{せい}使^しな
るに思^{おも}ひがけぬこよひの珍^{あま}事^じ勿^な論^{ろん}上^{うへ}浴^{よく}は叶^{かな}ふべからずさりとして直^{ただ}ちに引^ひき返^{かへ}さ
ば恐^{おそ}らくは疑^ぎ惑^{わく}を生^{しょう}じ間^まちがひ出^{しゅつ}來^{らい}のもとるとならば 藍^{あゐ}ナウ、それにも思^し案^{あん}あ



重

六郎

すやかくてあらん限

印

ト右と左にとりすがりて、よろしくこなし。重保も愁のこなし。
 入。
 保けなげに候ふ左馬ノ介どの。和君が切なる心のうち察し入りて候ふぞや。御
 わざはひの根だに絶えなば意趣遺恨は私しごと——平賀どの、所存はいかに。
 孝子の心を無にせんこと武士の本意にあらじ。朝申さる、所我が意を得たり朝
 雅いかでか異存あらん。只こゝに一つの難義左馬ノ介は御臺所御迎ひの正使な
 るに思ひがけぬこよひの珍事勿論上浴は叶ふべからずさりとして直ちに引き返さ
 ば恐らくは疑惑を生じ間ちがひ出来のもとらば 範ナツ、それにも思案あ



重六郎
 すや〜てあらん限りは、オ、
 や〜と寐入るが如くは、オ、
 ト毒のき、ハテあ
 左馬介眠るめ
 うになりて
 抱いて
 ある

り我れ若しみづから毒を飲み世を早うせしと聞きたまはば母さまが泣き悔みぞ
たどのやうな御ひがみ。こよひの事は秘しかくし明日死なうとも駕にて病氣と
いひたて上洛し彼方にて煙となし程経て病死と知らせてたべ。

トよろしくこなし。重保感心の思入。

保「ア、残る暇なき心づかひ——如何なればかくまでに器量すぐれて生れながら
朝「魁けて咲く此の花の魁けて散るならひとて 保「芳しき名を末の世に傳へんす
べもなさせなや 範「海より深い母さまの情を仇と身を悔やみ、ただ一目御顔を、
見ること叶はず死ぬるとは 保「今にしへにたぐひ無き 範「いかなる悪縁 重
悪因の 朝「もつれつながら 保「朝「因果とし。

トこのうち政範うつとりとなる重保朝雅よろしくいたはる。

朝「コリヤ左馬ノ介姉もるともに右衛門ノ佐がおことに代り末長く母御の介抱心
得たるぞ。必ず心を安んじませうぞ。保「六郎かくてあらん限りは——オ、すや
くと寐入るが如く——ハテあやしき 二人「毒のさゝめ。

ト左馬ノ介眠るやうになりて抱いてゐる重保の腕へグタリとなる。朝雅重保貌見あはせ、双方よろしく思入こなし。

第四段

(其一) 閑室の密談

北條邸の一室上手に平賀右衛門佐朝政うつむきて愁の思入下手よき所に北條家の女房甲乙丙、おならび皆々愁の思入うつむいてゐる。

朝「二無き者におぼされし左馬介が不慮の夭折、老公のお力落し、牧の御方の御愁傷まのあたり、踏る如く此のたび下向の途々も、さこそと推察致しをった。スリヤ所詮御方には御対面は叶ふまじきか。甲「さればでふりまする。御持病の御瘧は、やう／＼癒らせたまひたれど。乙「三度のお物もめしあがらず。丙「昨晩も夜もすがら、泣き明させたまひしゆる。甲「そのお疲れにやうと／＼と。乙「丙「つい御寝なッてござりまするゆる。朝「オ、さもさうさ、さもあらん。御寝なるは何より良薬。

ゆめ／＼驚かしまゐらすべからず。まからば身共は此のところにて、お目ざめの時刻をまたん。遠慮は無用、お身たちは奥へまゐり、御介抱申してよからう。甲「さやうなれば仰にまたがひ。乙「慮外ながら。三人「わたくしどもは。朝「オ、お目ざめを知らせくりやれよ。三人「かしこまりました。

ト甲乙丙、會釋して奥へはいる。朝雅残り、よろしく思入。

朝「左馬介が非業の最後は、願うても無き我が仕合せ。新將軍家は幼弱にて、到底負荷に堪ふべからず、今天が下廣しと雖も、此の朝雅を除いては、系圖器量双つながら、兼ね備へし者一人なし。はじめはたか、執權職を望みにかけて、大望も待てば、甘露の日和とやら、左馬ノ介世に無き上は、遠州夫婦が砥礪の、其の恩愛を取りも直さず、あの政範と血を分けし、只一粒の愛女、萩の前の戀聲たる、此の朝雅が身に集めんと、我が三寸の舌頭次第。機をはづさず、智畧を運らし、稻毛の法師を玉に、使ひ、遠州夫婦の心を動かし、機密を氣取りし、重保親子まづ馬鹿者から押し、かたづけ、其のほとぼりの冷ぬ間に、將軍もろとも、義時めをム、ハテ時節は、俟つべきもの。

トにツたり思入此の時下手の扉をひらき、稻毛重成入道ひそかに立ちいで
稻右衛門ノ佐どの。

トあたりへこなし

朝「オ、入道どの、待ちかね申した。これへ〜」。

トこれにて入道朝雅のそばにすまひ

稻「お悦びあれ、至極の上首尾。朝「ナニ上首尾どな。すりや兼ねていひ觸らせし、彼の流言を信どなし。稻「イヤ〜彼奴も流石は曲者、容易くは動くべうも無かつしゆゑ、偽書を作り、上使をえたて、遠州公の命といつはり、今般謀叛の輩あつて、鎌倉表へ寄するの由、其の姓名も歴然たれど、事極秘なれば、委細は参着の後、執權の御口傳たるべし、さて右につき、重忠に追討使仰付けらる、早速一族を驅り催し、十分に兵器を調へ、火急の發向、嚴命なり、と眞實しやかに言はせしかば、市に三虎の喩に漏れず、鼻元思案の二郎重忠、信と心得、狼狽なし、已に昨日武藏の國を出發なせしと、飛脚の注進。朝「ホ、出來されたり、あつばれ〜」。此の上は片時も早く天の人を以て言

はしめし、其の謀叛人は重忠なりと——脚躰は事の破るゝ基——手を分かつて老公夫婦に。有無を言はせず、討手の準備必ず共におぬかりあるな。稻「念にや及ぶ兼ねての手配り。執權の一言次第、討手の先鋒は倅重政、こよひを過さず、重保めを、由比が濱邊へおびきいだし、まツた重忠めは、武藏の國二股川を渡らんころ、朝「ホ、ウ、何から何までさすがは入道。まからばそれがしは奥へまゐるツて、稻「いでそれがしは遠州公に

ト兩人立ちあがる、トタンに奥の方にて

女共「アレ、誰れぞ來て下さりませ。アレ、御方が御方さまが——アレ、誰れぞ來て下さりませいのう。

ト物言騒がしく、女中大勢の聲聞こえる。

稻「ヤ、あの聲は——まさしく奥の間。朝「ム、さてこそは案にたがはず——奥の事は御懸念あるな、貴所はすぐさま遠州公へ、稻「心得申した。

ト平賀は上手へ、稻毛は下手へ、大急ぎにてはいる。

(其二) 噴恚の狂亂

すべて鎌倉時代武家寢殿の造作、修飾等よろしく、こゝに時政の室牧の方、寢衣のまゝ、黒髪みだりがはしく、手に懐刀をぬきもちて、髪を断たんと争ふを、前の場の女房、甲乙丙、其の他、女童數人、取りすがりもみあひ立ち、惑ひ、うろたへゐる。牧の方の枕元には、故左馬ノ介の狩衣、立烏帽子など、取りちらしあること。

女甲「アレ、おあふなうムりなす。女乙、マ、おはなしなされませい。女丙「アレ、誰ぞ早う来て下さりませ。皆々、誰れぞ来て下さりませいなア。

ト女どもよろしく棄せりふせにてどめてゐる。前の場の朝雅、下手より走り入りて、すぐ泣き狂ふ牧の方を抑へ、皆々に目ませにて退れ〜と命ずる。皆々心得て下手へはいる。

朝「マ、みこゝろをお鎮めあれ、コリヤ何となされませした。ト難なく懐刀をもぎとる。牧の方、我れに返り、朝雅の貌を見て、ひしやぶりつ

く。

牧「オ、右衛門ノ佐どの〜。聞こえぬ〜、聞こえぬわいの。なせ、せめて死骸なりと、一目見せては下さらぬ事切れてから知らずるとは、言はうやうなき情知らず〜。親の心の浅さ深さは、子をもたいでは知られぬか、見る悲みは百倍でも、たつた一聲聞くなれば、諦めもつかうもの。怨めしい右衛門ノ佐どの、花のやうなる政範を、ようむごたらしう灰にして、送るとは何事ぞいのう。たとへ腐らうが、爛れうが、氷のやうに冷きつて、穢い蛆がわかるとまゝ、熱湯のやうな此の母の涙で、温め、頬と頬、たつた一目、最期の肌膚に〜。あひたかつたをむごたらしう〜。たとへ冥土に行かうとも、親子の縁は一世を限り。情なや月日にも、天にも、地にも、かへがたない。あの政範が死にやらうとは〜。一日一夜を泣き明かしても、まだ信とは思はれぬ。コレ、右衛門ノ佐どの〜。政範は死にやつたか、いの、死にましたか、いの。朝、其のお歎きは、お道理とも、ことわりとも、申し慰めん言葉も無けれど〜。マ、まは、らく御心を〜。さやうに悶へさせたまふときは、又もや例の御瘡氣が、牧、ナニ瘡

が募らうとや。募らせたいく。いッそ此のまゝ取りつめて、一思ひに息絶えた
 ら此の苦しきは忘れうもの。とはいふものゝ親と子は、たんだ一世に聞くからは、
 何を頼みにあの世の旅。死んで甲斐なく存へても、けふより後は何樂しみ——憂
 世に未練は残らねども、死ぬるも益ない此の身ゆゑせめて和子の菩提の爲——エ
 エ迷ふまい——さうぢや。

ト又だしぬけに懐刀に手をかけるを、朝雅すかさず取り抑へて
 朝、又してもこは何事。さては餘の御なげさに、こりや御心が狂ひましたな。牧
 ナニ心が狂うたどや。何の狂はう、狂はうぞいの——狂はねばこそ忘れぬ——
 此の世あの世の哀別離苦。此の狩衣も立烏帽子も、離れぬ夫婦親と子が鼎の脚と
 榮えなん、末の榮華をあて祝ひに染めいだしたる三ッ鱗模様こそはちがへども、千
 幡どの、召料と地柄も仕立もちがはぬ晴衣。和子が出世をけふあすと、僕指へま
 ちし甲斐もなく——空とヒツたる形見の衣。なつかしい幻影の若しか宿ること
 もやと柱に掛けて起ちつ居つ泣きはらいたる双の目の、めくるめくまでながめて

も心狂はぬ證據には、これは狩衣立烏帽子——たんだ一度び通せし袖に移り香さ
 へもムらぬわいのう。

トよろしく狩衣へこなしあつて泣く。朝雅思入あつて

朝「イカニ牧の御方、御なげきはさることながら免れがたき定業と、觀念あつても其
 のお怨み——さはと御不便におぼしめす、御愛兒の政範ぬしが、まことは不思議の
 仔細あつて、非業の最後を遂げられたりと申す者のあらんには、サ、萬一にも其や
 うに、申し聞こゆる者あらば、如何ばかりの御愁傷思ひやりまゐらすさへ、此の腸は
 ちぎるゝばかり。牧、それこそは人の親の心、知らぬ推量ぞや。苔の花の年齢を
 定業と思ふにこそ、せめても敵と目ざすべき、怨の的があるならば、此の悲しみの半
 分は、怨みにまぎれて忘れうもの、當の敵を求むれば、所詮は我が身我が心と思ひ浮
 かぶる苦しさを、ナウ推量して下されいのう。朝、スリヤ御方には和子が横死を、ま
 だ、さゝかもお察しなきよな。牧、エ、何とおいやる。
 † 双方よろしく思入。

朝一大事に候ふゆゑ、態と胸にをさめ今日まで、秘しかくして候へども、和子の最後は定業ならず——サ、御驚きは尤なれど——マ、一通りおき、下され。語るも無念至極なれど、往ぬる日、腰越に宿りし、最夜中、稻毛の女照子の前、兼ねて重保と私通の取沙汰、如何にしてか手に入れけん、一大事の密書を携へ、雷雨を犯して、旅館にかけつけ、仔細あつて、落命の、其の場に手に入る一通を、恩義知らずの六郎重保、ぐさ、證據に取つてかへし、尼御臺に訴へんと、例の忠義を賣物三味、牧おのれ、又しても——朝かくと聞くより、けなげにも、さへざりと、ひる和子政範、此の事露顯となる時は、母上さまの御身の上、牧オ、朝何卒、此の身を人質とし、せめて首尾よく、下向なすまで、牧オ、朝内、濟頼む穩便にと、士に手をつき、涙を流し、牧スリヤ六郎、めに手をついて、朝乞ひ願はるれど、傍若無人、情用捨も知らざる六郎、共にと、ひるそれがしを、逆臣なりと、雑言なし、はや理不盡に、大音あげ、多勢を呼ばんと、致せしゆゑ、無慚や、和子の分別無く、藏しもつたる毒薬を、と、ひる間も無く、頓服なし、牧エ、情ないとしてたもつた——エ、何とせう、如何せうぞいのう。朝

母に代る此の身の最期、内濟頼む六郎殿と、毒の効に、惱亂の口より溢る、血は瀧津、潮。牧オ、——朝鬼神も感ずる無類の孝心、牧オ、——朝かりにも人情あらん者は、鐵石の心も溶解する筈を、苦しむ和子を、突きのけて、馳出でんとする六郎重保。牧おのれ、人非人——朝雅どのなせ、其の時六郎めを、八裂にはしやらぬぞ。朝されば、六郎一人討つて棄つるは、容易き程の事なれども、一大事を、氣取りしからは、毛を吹き疵を求むる恐れ、まった其の折入道より、送り越したる密書により、忠義面する重忠親子に、不思議の陰謀、これある由、牧イヤ、其のいひわけ聴きませぬ。たとへ、和子が命の綱取りとめること叶はずとも、其場で敵はなせ討たいで、どの面さげて歸りました——卑怯なく、見さげ果てた。薄情で、ふるわいのう。朝サ、お怒りはお道理ながら、只今も申す如く、これには、深き仔細あること——六郎をなだめすかし、其の場を穩便につくろひおきしは、牧エ、きかぬ——頼みに思ひし現在の、實の女が、聳でさへ——尼義時が不孝は、其の筈。おのれやれ、此の上は——一念力には、鬼女ともなる、生きながら、夜叉となつて、誰れ彼れのよう

しやがあらうか。

ト髪をふりみだして、よろしくこなし。

朝サ、一大事を御存じなきゆゑ、そのやうに思し召すも——コリヤどこへ、まゝ、まばらう。

ト牧の方立ちあがり奥へゆかんとする。朝雅とめる。

牧エ、邪魔なのきませう。朝、まゝ、まばらう。牧、のきませ。朝、まゝ、まばらう——

ハテマア仔細をおき、なされ。

ト朝雅牧の方をおしする。

時オ、其の仔細、きいたく。

ト奥より時政、あわたしくいづる。

朝ヤ、老公にはいつの間、時オ、最前稻毛の法師に——ヤア、誰れかあるく。

ト下手にて應答する。時政牧の方のそばにすまひ、よろしくいたはること。

時奥、無念であるく。尤ちやく、尤ちやはやい。牧、そんなら和子が横死の仔細

は 時オ、一伍一什皆聞いたり。おことの歎きは道理ぢやはやい。牧、コレナウ時政どの敵を取って下されいのう。時オ、尤ちやく。ヤア、誰れかある、はや参れ。

ト侍士一人あわたしく入り來たる。

時、委細の事は稻毛の法師にいひつけおいたり。何はまかれ疾く相州を呼びよせ

い——法師もるとも相州に疾く急いで、まゐれと申せ。侍、ハ、。

ト侍士急いではいる。

牧、八裂にしてもあきたらぬ六郎めが曲事を聞いてかいのう。それにつけても怨

めしいは右衛門ノ佐——現在和子の敵と知って 時ア、コレ、腹の立つは尤なれ

ども、其のやうに氣をあせらば身にさはらん、まばらう心をおちつけたまへ。牧、オ

オ、苦しや、胸が裂ける——五臓も六腑も惱亂して——此の黒髪の毛先からは血が

出るやうに思はる、時、道理々々、さりながら右衛門ノ佐には越度はない、其仔細

は稻毛の法師が——ヤア、義時はまだ來ぬか——義時、々々。ソレ、朝雅介抱々々。

ト牧の方癪に苦しむ。時政うるたへる。朝雅よろしく介抱する。此のうち下手扉をわけ、相模守義時其のあとより稻毛入道入り來たる。時政目早く見

時オ、義時待ちかねた。仔細はさいたか——憎きは重忠親子、疾く討手の準備いたせ。義ハ、さてく存じがけぬ不思議の御嫌疑、畠山重忠親子が故禪室の奉爲に謀叛を企て候はんとは、我れ人ともに夢いさ、か曾て存じ寄らざる所。夫れ重忠とは、治承四年始めて故幕下に仕へしより、忠義専らに聊も私無し。去々年二品御謀叛の其の砌も、彼れ彼方に候する身ながら味方に參つて忠を盡せり、是れ天下の大義を存じ、まッた二つには、聲舅の因を重んじ候ふゆゑ也。然るに今更何の爲に謀叛企て候はんや。正直の鏡といはる、重忠親子、よも亂心は致すまじ、參着の後、糺明あつて、罪明白ならば、其の時御誅戮あるも遅かるまじ、眞僞を分かつ御討手を向けられんこと、近ごろ御粗忽かとぞんじます。猶こは相州のお言葉ながら、いさゝか聞棄に致しがたし。眞僞不明と仰せらるれど、たしかな證據は此の入

道親族と心をゆるし、ひそかに送りし彼の一通に逆意正に歴然たるゆゑ、忠義には親を滅す御訴訟。義、それぞ不審の隨一條。故禪室の御謀叛を密告ありしも、和殿なれば、日ごろ重忠と中惡し、と噂高きも、和殿にあらすや。猶ヤ。義サ、其の中惡しき和殿の許へ、故禪室のおん爲には、仇にひとしき和殿の許へ、亂心あさばいざ知らず、かゝる密書を送りしこと、何共以て心得がたし。猶スリヤ、相州には拙者が訴訟を、讒言なりと疑ひめざるか。義、イヤさやうではムらねども、其ヤア、其の間答無益でムるぞ。一忠謀叛の企ありとは、今はじめて聞いたれども、思ひあたる日ごろの振舞、必定逆心に疑ひ無し——よし疑ひがあらうとま、和子の爲には不俱戴天——義時はまだ知りやるまいが、政範が最期は横死ぢやといの。人で無しの六郎めが、みづからに宛を被せ、其れゆる和子が無慚の最期——そなたの爲にも弟の敵猶豫する所しない、畠山が一門一族八裂にしてもあきたらぬ——コレ、義時時政の嚴命ぢや躊躇するは不孝でムるぞ。義、お言葉返すは恐れあれど——まッた政範が最後の始終は、今はじめて承り、驚き入つては候へども——さりどてそれは

一家の私事。牧スリヤ私事ゆる和子が横死は敵を取るにも及ばぬとや。義イヤ
 さやうではムりませねど 牧イヤさうぢや〜 さうである。後妻の生んだ子
 は古沓も同然ゆる表だつて敵を取る法無いゆる謀叛人と讒言して敵を取らうと
 思ふのぢやと— イエ〜、さう思うてゐやるゆる繼しき中ゆるみづからをば、
 者におとして世の人に疎ませう了簡ぢや。さほどまでに疎ましくば、今直に此の
 母の命をたち謀叛人の重忠親子を庇うたがようござるわいのう。
 トよろしくこなしあつて泣く。皆々よろしく思入。平賀朝雅思入あつて此
 の時義時に向ひ

朝イカニ義時ぬし貴殿の御諫言もさることなれど、重忠逆意の一條は他にも確實
 なる證據あつてもはや疑念を殘しがたし、まッた遮つて御諫争あらば、御愛兒に別
 れさせられ、御哀傷の其の折柄如何なる大變出來せんか、これもまた圖るべからず。
 孝道のおん爲に曲げて奉命これあるやう

トいひかける、このうち牧の方聲たて、泣く時政こらへかねし思入。
 時ヤア異論あらば勝手にいたせ。執權遠江守時政が申しつける入道直さま手勢
 を引具し、六郎めを討ちとり参れ。重忠追討の御教書は我れこれより参入なし千
 葉三浦を討手の先鋒— それ。

トたゝんとする、義時は非なき思入。

義マ、玄ばらく— ハテ是非に及び申さぬ。父上の嚴命母上の御腹立御嫌疑か
 りりし重忠一門何とて父母に見替申さん。時スリヤ御教書を申し乞うて 獨今
 よりすぐさま 朝出陣あるか。義いかにも命に従ひませう。時オ、満足。玄か
 らば義時は我れもろとも— 入道には討手の準備。義、稻ハ、ツ。時、右衛門ノ佐
 は奥の介抱。朝ハ、。

ト義時稻毛おの〜 思入あつて會釋し同時に座を起ちて下手へはいる。時
 政は奥へはいる。其のあと泣き伏しゐたる牧の方むツくと起き向ふを見込
 み、よろしく思入。

監チニ、心地よや、嬉しやなア。日ごろより憎しと思ひし重忠親子、我が子の敵六郎めを——オ、忘れたりむざくど、一思ひに殺しては——あきたらぬ腹が癒ぬ——八裂にせにやならぬ我が子の仇——コレ生捕って具して来いと、入道のあとおツかけ、疾く吩咐けて下さりませ。甥こは何事ぞ御怒りに、前後をお忘れあそばしましたか。重保は彼の大事を知つたるからは有無をいはせず、討つて取るが上分別——モシ、御用心はそれのみならず——御免。

ト牧のかたの耳に口寄せさ、やくこなし。牧のかた驚き怒り、貌色次第にかはる。

牧スリヤ、政範が飲んだる毒は、甥かねて因果をいひふくめし、其の源は尼御臺か相州たること疑ひなし。牧エ、すりやアノ——せんすべもあらうものを——アノむごたらしう分別なき、あの政範をだますかし、諫むる法にも事をかき、たつた一人の愛兒をば——ナニ根を絶たば幹枯りよとや——何の枯れう、朽ち果うぞ。おのれやれ、此の上は、其の計畧の裏を掻き、怨かさなる尼義時——子を殺さるゝ苦

しみを、おのれ、今に

トよろくど、たちあがり、足元にころがる立烏帽子に目をつけ

牧「この烏帽子は左馬ノ介が將軍となる其の時を、心で祝うて千幡若ど、同じ仕立に製らせし、大臣のかぶりもの、今更見るも、怨めしい。我が子の影は浮かばねども、此の烏帽子を見るにつけ、またり貌なる尼が面、

ト烏帽子を搔摺みて、悔やしき思入。

牧「おのれ、此の怨み

ト烏帽子をメリくどひきさく。

朝「ア、モシ。牧、晴らさでおかうか。

ト烏帽子をなげいだし、よろしく泣きおとす。

第五段

(其二) 杜かけの伏兵

由比が濱邊に近き杜かげの晩景。こゝへ下手より稲毛の次郎重政烏帽子腹巻にて物の具せる郎黨大勢従へて出で來たり、よき所にどまり
 政イカニ者共承れ。今般島山重忠竊に逆意を企つるの由訴人あつて露顯に及び
 已に御討手をさし向けらる。然る處同苗重保當鎌倉に在るこそ幸ひ、まづ彼奴よ
 り討つて取れど、執權職の嚴命蒙り、最前已に奇計を運らし、釣りいだし置いたれば
 程なく此の處へ參るは必定。さきだつて埋伏なし、不意に起こつておつとりまさ
 有無を言はせず討つて取らん。一同此のむね心得候へ。皆々「かしこまつてムリ
 まする。政ム、はるかに聞こゆる蹄の音——ソレ、玄のべく。皆々「心得ました。
 と重政さきに、一同上手へはいる。初夜の鐘。向ふより島山六郎重保烏帽子
 腹巻、騎馬にて長刀を携へ、郎黨數人つきそうていで來たる。此方へ來ると、寢
 鳥騒立つことあり。重保が馬驚きはねあがる、ト、よろしく乗りしづめる。
 保「ハテけふな——こよひに限つて栗毛めが、玄ばく物に驚きををるわえ。さるに
 ても心得がたきは、逆臣寄すると道路の風説、信玄から存せしに、已に御討手を差

向けらる加之又候ふ、一手の賊軍寄せたるゆゑ、疾く斥候せよと嚴命受け取るもの
 もり取りあへず立ちいでしが——雲漏れいづる片われ月、行く手は隈無き由比が
 濱敵あるべしとも思はれず——合點ゆかざることもぢやなア。
 ト不審の思入。このトタン左右にどつと鬨の聲して、以前の稲毛主従、めいめ
 い得物をひらめかし、無二無三に競ひかゝる。問答のひまなく、重保主従より
 しく防ぎ、ト、稲毛勢叶はず、左右へひく。
 保「ヤア、何奴なれば、理不盡に、名宣りもかけず、無法の振舞。
 ト稲毛の重政木薩よりたちいで
 政「何奴とは無禮至極。逆臣島山重忠父子を、誅戮せよとの嚴命によつて、汝をこゝ
 に俟つこと久し。姓名は名宣るに及ばず、鎌倉殿の嚴命也、速に伏罪せよ。保「ヤア
 舌長し、汝等こそ嚴命あつたる逆臣ならん。姓名名宣つて伏罪せよ。政「問「口無益
 ——ソレ、討つて取れ。保「何を。
 トこれにて又亂戦となり、重保馬上長刀を揮ひ、多勢を追うて上手へはいる。

あとに重保が郎黨、残る稻毛勢を敵手によるしくたちまはり、トッ下手へおう
てはいる。

(其二) 由比が濱の血の雨

上手に、盡心に岡の裾を見せ、磯馴れ松などよろしく、下手奥のかたへ深く、沖を
見せたる濱邊の夜景。片われ月やうく、空高く昇りたる躰。こゝに重保が
家來瀬平、旅装にて、多勢の敵兵に圍まれ、數ヶ所に手疵を負ひ、苦戦してゐる。
瀬大殿さまの御大事を、片時も早く六郎さまに、お知らせ申さん其の爲に、かけつけ
たる甲斐も無く、此の場にむざく討死なすか。チエ、残念やなア。敵こそごと
ぬかさず 皆々くたばつて去まへ。瀬何を。
ト又たちまはり、ト、瀬平危くなる。上手よりばたくにて、前の場の重保大
わらは、徒歩、血刀を提げ、處々に矢を折りかけ、手疵多く負ひたる躰にて、かけつ
け

保「思ひがけなき汝は瀬平。瀬ヤ、若殿でムりまするか。

ト此のうち重保敵中にわつて入り、瀬平を救ひ、はげしく働き、ト、残らずまど
める。其のうち瀬平疲れはて、倒れる。重保たちより宜しく介抱すること
保「ヤ、瀬平、汝は往日密事を、吩咐け、本國菅谷へ遣し置きしに、思ふにたがひし此の
對面、如何なる珍事の起つたりしぞ。コリヤヤ、瀬平、重保なるぞ。手は浅い心を
たしかに、瀬オ、若殿さま、六郎さま——無念至極でムりまするわい。保オ、何
よりも心懸りは、父上の御身の上——本國の様子は、何と。

トこれにて、瀬平痛手を忍び、起直るこなしよろしく
瀬「いぬる日御内意承り、平賀どの、一條を、片時も早く大殿さまへ、言上なさんとお
國表へ、夜を日に急ぐ、其の途々、逆臣寄するの雜説は、疑ひもなく、平賀の徒黨ど、一圖
に、下司のえせ、推量かやうく、云々と、尾緒を添へたる言上の、折も折とて、俄の御上
使、鎌倉表に、逆臣あり、追討の爲、今即刻、一族こそつて、驅り、催し、兵器を整へ、發向せよ
と、北條さまより、嚴しき内命。保「ナニ、執權より、密使を以て——シテ、父上には

進發ありしか。瀬さん候ふ、遠州さまの御親筆疑ふべくも候はねば、すぐさま一同御用意あつて、今朝已に武藏國二股川まで御着ありしが、保ム。瀬流石は大殿御賢慮深く、此たびの御内命は、何共以て心得がたし、其の方急ぎ鎌倉なる重保が許へ馳参り、委細の様子を心得ましたと、章駄天走り、途中に行きあふ討手の大軍——合點ゆかずと手だてを運らし、仔細を聞くより、びっくり仰天——大殿さまには謀叛の御嫌疑——こはいかに、件の討手が指して行くゑは二股川。保ヤ、ハ、ハ、ハ。瀬此の事さつそくあなたさまに、お知らせ申して御分別と思ふに、たがひし此の場の有様。あなた様にも數ヶ所のお手疵。瀬さては、讒者の舌刀にて、我ればかりかは父上まで——チエ、くちをしや、無念やなア。

ト向ふを睨み、よろしく思入。此のトタン又俄に鬨の聲して、ドンチャンはげしく打込む。

瀬この上は、やつがれ此處に踏みどまり、敵を防ぎ候ふべし。若殿には、いざ疾く此の場を、保おろかや、瀬平。命を惜むも君父の爲、君には已に棄てられまつり父

上にも重圍のうち——數ヶ所の深手を負うたるからは、生きて逢はん望なし——いで、もろともに、此の場に於て、花々しく討死なさん。

ト此のうち下手より、稻毛の重成入道物の具に身を堅め、長刀を携へ、あまたの軍勢をえたがへ、出で來たり

瀬死にぞこなひの六郎重保速かにすからべ渡せ。縁者のよし、此の入道が、最期の引導渡しくれん。保ヤ、よいどころへ、奸邪の小人。汝を殺すは、最期の忠勤、共に冥土へ行く父に語る此の世の土産となさん。瀬何をこしやくな。者共、ソレ。

ト又亂戦となり、主従手痛く働く。重保は入道を討ち取らんと荒れ廻り、入道危なる。此の時、上手に鬨の聲して、前の場の次郎重政再び手勢をひきゐて、いで來たり、父に應援して、主従にかゝる。これにて、兩勢上下に入りかはり、重成入道の一群は、瀬平を追うて、上手へはいる。あと重保一人となり、大勢を敵手にはげしく立ちまはり、ト下手へ逐ひ崩す。重政一人残り、一騎打となり、ト重政危くなる。此の時、上手より重成入道かけ來たり、此の躰を見て、驚き、長

刀をひきそばめ、ひそかに重保の背へまはり、油断を見て重保の脚を薙ぐ。重保ぞうとある。

保、武士に似あはぬ卑怯者めが。

ト重政すぐに斬殺さんとするを、入道どめて

稱「ヤレ待て、重政急くに及ばず。日ごろより馬鹿正直の父を見真似に、小賢しき堅子めが賢人面長幼の禮を存せず、よう幾度も此の入道に、赤い顔をさせをったな。中にも諸人の面前にて、飾を落し入道せしは、妻の菩提を吊ふ爲佛の道に入るとは偽り、實は北條の息女たッし、妻を病に失ひたれば、婿舅の縁切れんかと懸念なし、執權の最員をつながんため、えせ入道の阿諛追従僧衣の袖の墨染より腹の底こそ黒けれど、うぬ、よういうたな、さみしをったな。胸に徹して忘れぬ其の返禮に最期の引導——ヤイ、よく聞けようぬ等、親子は此の入道が、舌三寸のいひまはしでまんまど首尾よく謀叛の悪名——何と骨身に徹へたか。

トよろしく思入あッていふ。

保「ヤ、すりや父上の御最後も——さては汝が讒言なりしか。稱知れたことだワ。保「チエ、いはうやうなき人非人めが。

トよろしく無念のこなし。

稱「やかましいわえ。引導濟んだ上からは——ソレ、重政。

トよろしくこなし。重政心得て斬らんとする、重保痛手ながら奮戦する。入道こらへかね、長刀を揮つて只一薙に、おはや薙倒さんとする其のトタン、向ふにて、エイと箭聲して箭一つ飛び来たり、入道の肩頭を射貫く。入道尻居にさうとなる。又一箭とび来たるを、重政さそくに切ッておとし、驚きながら向ふを見込み

政、鎌倉殿の嚴命受け、討手に向ひし我々親子に名宣りもかけず無禮の手向ひ。何奴なるぞ。

ト此の時向ふにて

飛「ヤア、何奴とはたけくし。賊臣稻毛重成親子、鎌倉殿の嚴命受け、相摸守北條義

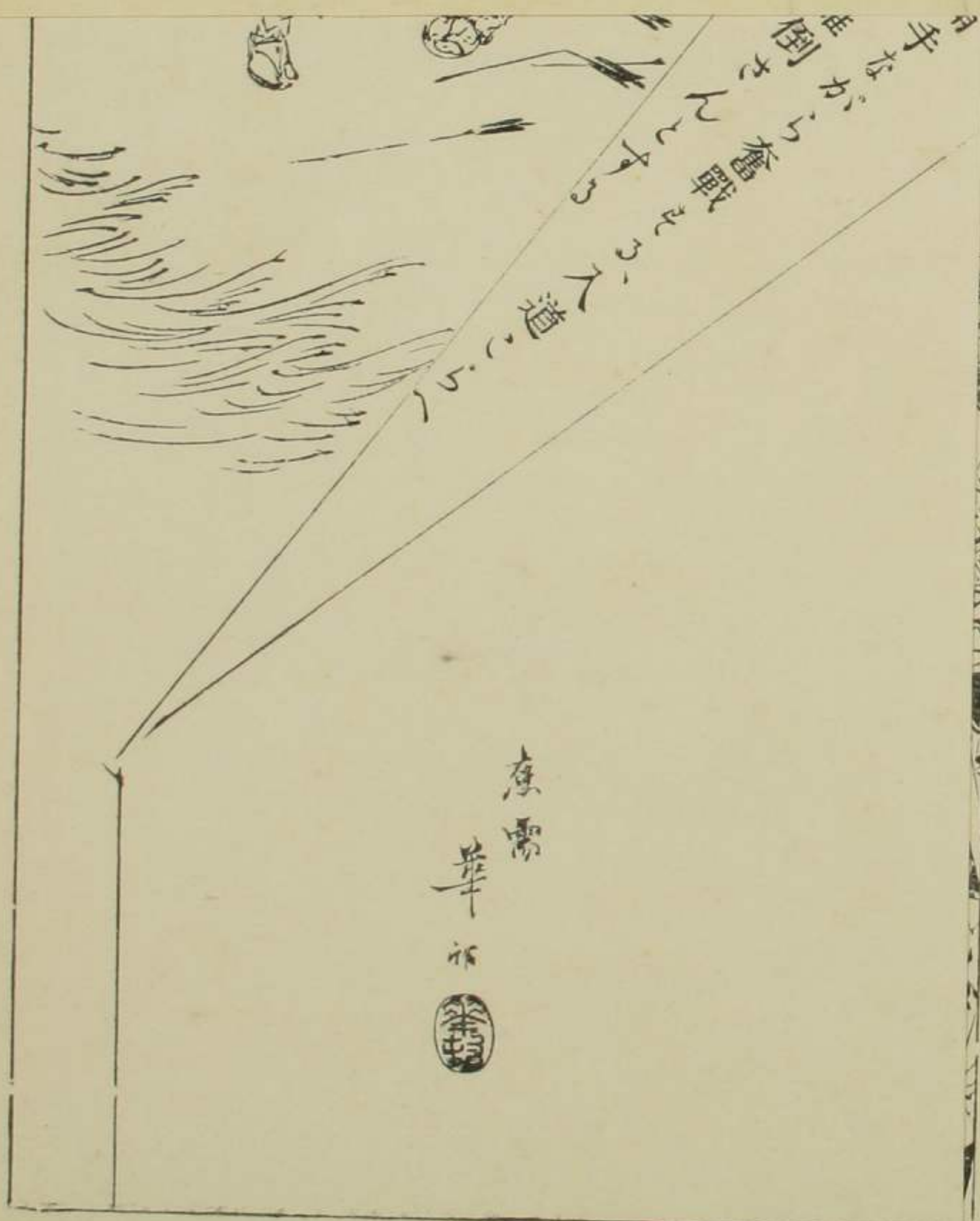
時、只今討手に向うたり。尋常に誅に伏せ。

ト此のうち重保またどうとなる。重成入道幸うじて箭をぬき、長刀を杖に起さあがり

稻、何な 稻、政、なんど。

ト向ふより北條義時、烏帽子腹巻、左手に弓を持ち、馬士馬側に義時の腹心深見三郎二郎致興、軍兵大勢ついて來たり、みき處にとり

義、忠臣畠山重忠父子を、讒言を以て陥れし、罪跡已に顯然たり、陳すとも及ぶべからず。深、まツた、二股川の戦場へも、結城七郎朝光どの、只今汗馬を走らせたまふ。義、只憾むらくは時刻おくれ、恐らく宛死を極ふに由無し。國家の發賊、義士の怨敵、せめても潔く誅に伏せよ。稻、こは存じよらぬ無實の御嫌疑。政、讒言などは我々親子 稻、かつふつ以て 稻、政、何を證據に 義、ヤア、卑怯なり、稻、毛、親子。證據は汝等が心にあらん。此の上は問答無益。ソレ、致興。深、ハツ。ト從兵へこなし、稻、毛、親子うるたへて逃げんとする、義時が從兵一齊に競ひか



彦需
華
不
印

時、只今討手に向うたり。尋常に誅に伏せ。

ト此のうち重保またどうとなる。重成入道辛うじて箭をぬき、長刀を杖に起
きあがり

稻、何な 稻、政、なんど。

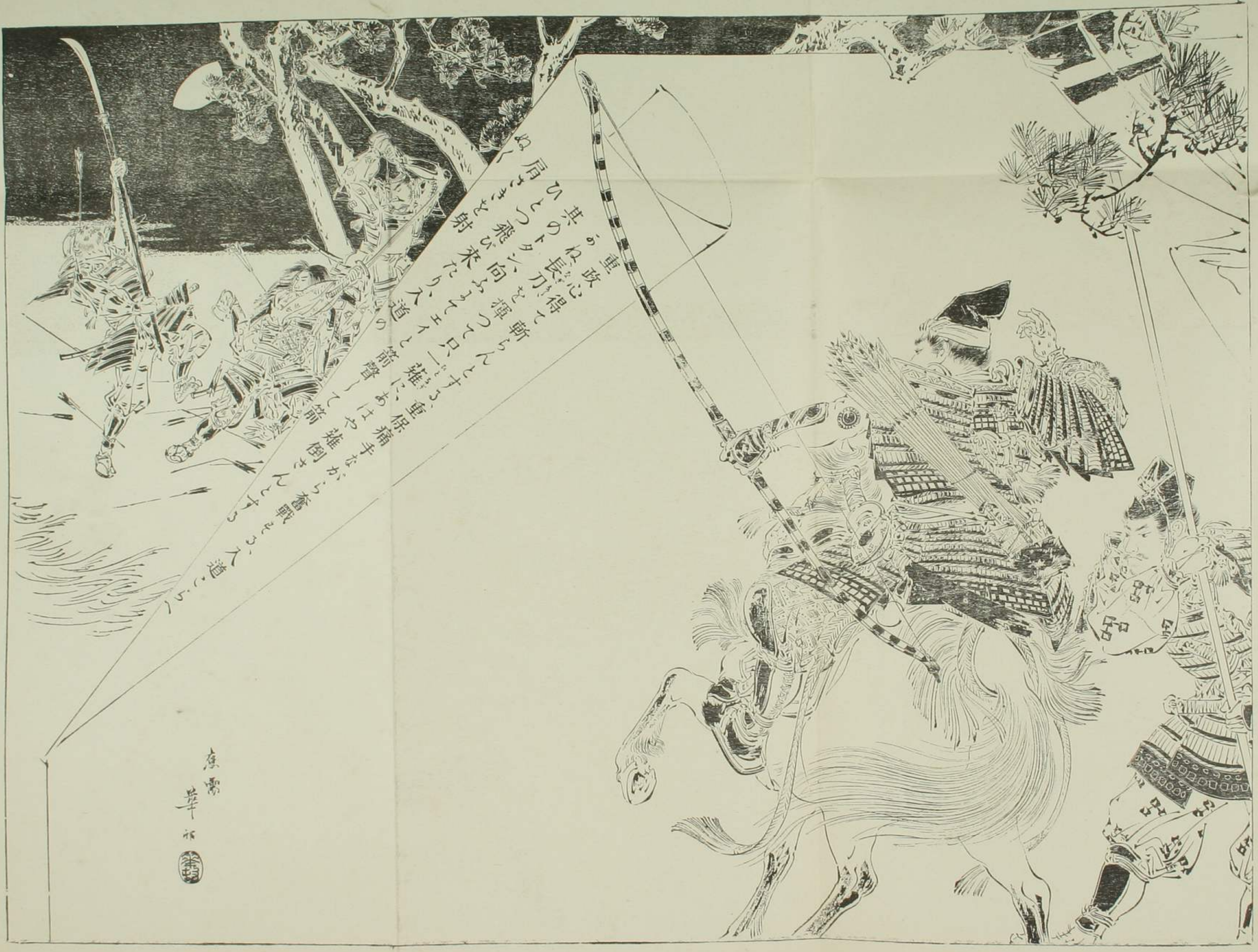
ト向ふより北條義時、烏帽子腹巻、左手に弓を持ち、馬士馬側に義時の腹心深見
三郎二郎致興、軍兵大勢ついて来たり、よき處にとり

義、忠臣畠山重忠父子を、讒言を以て陥れし、罪跡已に顯然たり、陳すとも及ぶべから
ず。深、まツた、二股川の戦場へも、結城七郎朝光との、只今汗馬を走らせたまふ。義、
只憾むらくは時刻おくれ、恐らく冤死を拯ふに由無し。國家の發賊、義士の怨敵、せ
めても潔く誅に伏せよ。稻、こは存じよらぬ無實の御嫌疑。政、讒言などは我々
親子 稻、かつふつ以て 稻、政、何を證據に 義、ヤア、卑怯なり、稻、毛、親子。證據は汝
等が心にあらん。此の上は問答無益。ソレ、致興。深、ハツ。

ト從兵へこなし、稻、毛、親子うろたへて逃げんとする、義時が從兵一齊に脱ひか



時只今討手に向うたり。尋常に謀に伏せ。此のうち重保またどうとなる。重成入道幸うして箭をぬき長刀を楯に思
 きあがり
 何なる。稲真など。
 三郎二郎致興軍兵大勢ついで来たり。處にござり
 忠臣島山重忠父子を讒言を以て陥れし罪跡已に顯然たり。陳すとも及ぶべから
 ず。西宮つた二股川の戦場へも、結城七郎朝光との、只今汗馬を走らせたまふ。義
 只憾むらくは時刻おくれ恐らく冤死を拯ふに由無し。國家の發賊義士の怨敵せ
 めても潔く誅に伏せよ。稻こは存じよらぬ無實の御嫌疑。政讒言などは、我々
 親子 稻かつふつ以て 稻政何を證據に 義ヤア卑怯なり稻毛親子。證據は汝
 等が心にあらん。此の上は問答無益。ソレ致興。運ハツ。
 稲兵へこなし稻毛親子うらたへて逃げんとする。義時が從兵一齊に追ひか



在常
 華印

60
 65
 70
 75
 80
 85

第六段

(其二) 浴室の逆謀

浴槽口を正面に見せたる浴室、上手下手、ともに扉あり。上手の板の間には衣桁、其の他、浴室の飾り付よろしく、こゝに牧の方が腹心の女ばら、魚、米、升、魚は板の間を拭ひ、米は衣桁の位置を直し、升は今湯加減を見果てたるさまにて、高くまくりあげし袖を禪と共にゆるめながら

升「ヤレ」くたびれた。ナウ皆さんも休ましやりませ。からしておけばいつ何時將軍さまがお渡りあつても、まづ大事ないといふもの。魚「さればいな、これでこちは大事なけれど、ナントマア陰陽師とやらも頼まれぬものではないか。身の上知らずと世話にもいへど、恰ど今月十六夜は、天一神さまに向うたから、御方達と將軍家にお勧め申した其お成りが、米「取りも直さず冥土へ出發。御方さまが兼ての御差配、わたしら三人御内意うけ、此のお浴室でたつた一突。升「よう、智恵のまは

る尼公さまも政範さまの御菩提を、どひらふ爲の發心と、魚「殊勝らしう珠數つまぐり、米「人前ばかりの御經讀誦、升「其のまツかいな御方さまの、深いたくみに、まんとはまり、魚「場處もあらうにうツかりと、此のお邸へお方達。米「折から恰も義時公も急の御用で俄に御他行。升「君傍さらすの鶴の目、こちどの手には阿波の局も、けふは持病のいたつきにて、つい御侶に洩れたとやら。米「一から十までトン、拍子。魚「御願成就はこちどの立身。升「ほんに浴室は源氏に祟る。米「禪室さまも伊豆の修善寺、魚「義朝さまも尾張の内海、升「ほんに争はれぬ、三、ものぢやなア。

ト此の時、下手の扉をあけ、牧ノ左源太輝英、今旅先より歸つたといふ服装にて浴室をのぞき

左「御方はこゝに御座あらぬか。魚「オ、どなたかと存じましたら、米「御方さまの御内意うけ、升「御旅行ありし、三、左源太さま。左「コレ。他處にては人目の憚り、輝英、只今立歸つたど、ひそかに御方へ傳へておくりやれ。三、かしこまりまし

てムりまする。魚、ドレそんならばわたくしが

ト魚たんとする。上手の扉のうちに

牧、まゐるには及びませぬ。今そこへゆきませぬの。

ト扉をわけ、牧の方下髪質なる服装すべて有髪の尼といふこしらへ。手に珠数をたづさへ、五六歳の女童に秋艸を折り入れたる水桶を携へさせ、まづま

づと入り来たり

牧、オ、輝英。思うたより早い歸着御太儀でムりましたの。左ハ、お悦びあら

せられい、まづ以て万端上首尾。牧、ホ、以來しました。シテまた花洛の平賀

朝雅どのへ機密を傳ふる早飛脚も。左ハ、其の儀も昨夜亥の刻ころ

牧、ア、コレ。誰れやら足音。

ト上手へこなし。程なく上手の扉をわけ下髪盛服の侍女一人、いそがはしく

いで来たり

侍、ハ、御方さまへ申しあげまする。只今御先觸として、相州さまの夫人吳羽の前

さまは、御入りになりませす。まツた程無く將軍家にも、結城七郎さま、伊豫のお局、笹尾のお局をはじめ、御方々御侶にて御入御げになりませす。牧、オ、心得た。ト魚米舛に向ひ

ト牧の方女童に向ひ

牧、そもじも共に。オ、その花はいつもの持佛へ。童、かしこまりました。

トこれにて魚米舛女童侍女、皆々牧の方に會釋して上手へはいる。あと牧の方左源太のこる。牧の方思入あッて

牧、ム、首尾は上々。今一時が成否のわかれ目。女どもにいひつけし其の手、と、のうたれば、萬に一つも仕損すまい。左よしまた浴室で、左そんなすとも、御渡殿の左右には、牧兼ねて伏せおく、あまたの力士有無を言はせずひッぶせて。牧、左、るしをあぐるが。合圖の狼煙。左、いざ御大事と見るや否、まづ第一に參

着すべきは無念に亡びし稻毛が殘黨其の外譜代恩顧の面々機密を知れるも知らざるも狼煙を見たらば馳せ參れ時政公の内命と一々御内意含ませたれば在鎌倉はいふに及ばず十里以内の御味方は狼煙の煙の消えぬ間に馳せ集らんは案のうちに。牧俄に他行し義時のこゝにあらぬは究竟一。目指す敵は東御所と年老いたまへど遠州どの。左其の御出馬のまツさきがけは此の輝英が出世の發程。無二無三にひんがし御所。手むかふ奴輩斬りたて焼きたて。牧尼前はすぐにおしこめ同前。左ついで目指すは和田の一黨。牧大江廣元は不覺人——外には手にたつ者もなし。左御事成らんはまたくうち。牧アラ心地よやなア嬉しやなア。

ト兩人よろしく思入。

牧オ、それよ念にも念を入れよのことわざ——おことは股肱の力士等に尙あらためて機密をふくませ。左、左からばこれより。

ト左源太急ぎ起ちあがり、かけいでんとする。

牧待ちや〜。左ハ、ハ。牧必ずせくさい、去そんすさいぞや。左心得ました。牧「ゆきや〜。左ハ、ハ、ッ。」

ト左源太下手へはいる。牧の方ひとり残り、よろしく思入、ト、にツたりと打笑ひトタン上手の扉をあわたくしくわけ、北條時政、立烏帽子水干安からぬ顔持にて進み入り

時オ、おことの居どこを、こゝかしこ尋ねてをツた。ナウ、さしか、ハッて談合すべき、一大事が出来いたした。牧エ、。一大事とは心が、り。穩かならぬ御面持——シテ、仔細は、時マ、下に。あたりに他聞の虞はなきや——マ、下におはせ。

ト時政あたりへこなしあつて上手に、牧の方は下手に、そばちかくすまふ。

牧もしや大事が露顯なせしか——シテ、何者が。時ア、イヤ〜、さにあらず〜。其の儀はかつふつ氣づかひなければ。牧スリヤ一大事とおはせあるは。時サ、其の一大事の仔細といふは——コリヤ、奥よ氣をまづめて、よう一通りきいてたもれ

よ。御方達の御事昨朝はじめて仰せいだされ、おことに其の事語りしまでは——
もとより尼御前の振舞は、御身が日ごろの異見により、不快らずは存じをりしが——
さりとして、未だ予に於ては何等の別心もなかつしところ、段々とおことのお勧め——
已に左源太輝英もて簡様くの手配なしまつた云々の仔細によつて、幼弱なる當
將軍が虚位を擁して在さんには、所詮諸人の怨を招き、當家も共つぶれ、天下大亂の
兆、其のことわりはかやうくと、理を盡したるおことが、勧めに心次第に動いたる
折も折、政範めが横死の仔細をおことが口よりはじめて知り、牧コレく——
一大事とおほせあるゆゑ、如何なる大事かと思つたれば、時マ、聞いてたも、聞い
てたもれ——其故予れも、心動き、そなたの意見に合體なし、我れにもあらで怖しき
一大事は思ひたしが、今がたしも何心もなう入御なつた、實朝公の其の面影！
見れば見る程、いたいたいけらしい——血すぢの縁の孫とはいへ、心の迷ひか、政範めに
似たとは、愚か生寫し、牧、フム、すりや將軍家の面ばせが、アノ政範に似たるゆゑ、そ
れで心が變りましたか、イ、エイナ、千幡若と政範とが、よう似たく——とは十年以來

耳聾の出来るほど、イヤサ、穿入るほどきゝふるいた。それに何の不思議がある。
酷う肖たればとて、薬は薬、毒は毒、誰が斑猫を玉蟲に代へて鏡の匣に收れ、猫によ
似た虎の兒を、生長うなるまでぞだつるぞや。肖たのが何の珍らしい。それを今
さら新らしさうに——ア、きこえた——スリヤあれほどにわつつくどいつ、昨夜
よもすがらいうたることをも、やッぱり成さぬ中の繼母根性、譏誣ひがみと思つて
かいの、イ、エイナ、二世とちざりし夫にすら——二十餘年が其の間、心知られし夫
にすら疎まれて何とせう。時マ、牧、イ、エ、く、さうぢや、さうでム。成さぬ
中の尼御臺や、義時夫婦が目の敵に、わらはの過失を、あなぐり求め、額に波うつ今と
なつて、和子政範が、りしを、よい潮時と此の母を、西の海へも掻い流さん、不孝非道
の振舞——先妻の子となれば——それほどまでにも可愛いか。頼朝どの、後
見して、日本國六十餘州に、武名威名を轟かせし、遠江守時政どのも、老いては小荷駄
に息はづむ、牡馬にも劣るかいの。一旦かうと誓うたことを、今更變改したまふと
は、餘りといへば言ひがひなし。ア、まかしながら、それもこれも畢竟は——子故

の暗の袖の雨に、色香あせゆく姥櫻妾に愛相が盡きたゆゑ、とく散れがしの 時、いやさにあらず、さういふ譯では、毫なけれど、尙其の他に仔細あり、さて其の仔細といふは、牧、エ、きかぬ。時、仔細といふは、牧、きかぬ。時、こよひの手筈は浴室に於て、左右なく討取らんず結構なりしが、最前局等の間は、す語り、いぬる日の御神灸、如何にせしか、其の跡いさ、か咎をなし、腫物の如く膿もつたり、さるによつて、兩三日は、入湯遠慮せらるゝ由、きいたる時は、疵もつ脛、さてはと胸を躍らせしが、吳羽の前の話といひ、童小姓の言葉といひ、疑ひ危む仔細も無けれど、まづ此の一事に、膽を落し、手筈は、晝餅と思ふと、共、只今語りし一伍一什、未練といへば、未練なれど、如何に天下の爲なりとて、血で血を洗ふくわだては、牧、ハテ、大の蟲をたすけう爲には、小の蟲の二百三百——よい、手本は、頼朝どの血で血を洗うて、研ぎあげし、鎌倉山の星月夜、其の血の雨の洗濯を、現在幾度も手つだうた、覚えある身が、今となつて——ア、今更に言ふも、甲斐なし。問答も、無益、怨むも、愚痴——さうぢや。

ト、牧の方懐より、手早く、懐刀をぬき、いだし、あはや、自害せうとする、時政あわて

時、こりや何と——まア、く、まった。牧、はなして、く——はなして、下され。頼む夫は、心がはり、思ひ子には、先だ、れ、なに、憎まれに、生きながら、へう——そこ、離して、下さりませ。時、ハテ、此の上は、是非に、及ばず。いざさらば、初志の如く、改めて、手だてを、めぐらし、有無を、いはせず、討つて、とらん。牧、エ、その、氣休め、聞きたうない。やツ、ぱり、わらは、ハ、時、ヤア、き、分け、なし、大事の、瀬戸際、時、おくれ、なば、事の、破れ。牧、スリヤ、其の、言葉に、相違ないか。時、念に、や、及ぶ、論より、證據。

ト、ついと、起ちて、浴室の一隅に、装置したる、呼鈴を、引き、鳴らす、ト、すぐに、ば、たば、たにて、牧、ノ、左源、太、下手より、出で、來たる。

左、お召し、ありしは、時、オ、近かう。左、ハツ

ト、左源、太、進み、寄る。

時、手筈、いさ、か、間ち、が、うたり、此の上は、是非に、及ばず、汝は、すぐさま、力士を、ひきつ、れ、奥の、一間へ、亂入、なし、有無を、言はせず、まを、あげよ。牧、ア、モシ。

ト牧のかた制めて左源太にさゝやく。

左スリヤアノやツぱり其の折までは 牧あらだてゝは何かと爲損じ。

ト時政の耳に口。

時フムすりやアノ池の中島に 左力士を伏せ置き將軍家を 牧幸ひこよひは十

六夜の月見にことよせ 時左釣殿にて 牧アコレ。

ト三人よろしくこなし。牧の方又二人にさゝやくこと。

(其二) 築山邊の小道遙

上手繁りたる植込築山下手及び向ふへだらく下りかなたに池の中島の水
亭及び橋殿の遠見。下手うしろへだらく下り池水に臨めるころこゝに
枝より面白き磯馴れ松。すべて北條邸内の泉水築山月は今やうやう昇りた
れど薄雲かゝりて朧なる躰。こゝへ下手奥より北條義時の腹心深見三郎次

郎致興黒衣覆面のまのび姿小舟に棹さし松かけに着き舟より島に上り徐か
に四下を見まはし思入ありて上手植込かけへはいる。トすぐに下手陸つ
きより前の場の牧左源太甲斐々々しくいでだち力士甲乙丙を具しうかひ
いであたりへこなし。

左只今も申せし通り初手の合圖は御方のエヘンく、第二の合圖は此の蟲笛心得
たか。昔心得ました。左万一こゝにてまそんずともあの釣殿では袋の鼠必ず共
に早まるまいぞ。昔心得ました。

ト此のトタン上手奥にて

曇さやうならばみづからも——サ皆も一所に來やいのう。女皆かしこまりまし
た。

ト左源太これをき

左ム、あの聲は吳羽の前——ソレまのべく。

ト皆々下手へはいる。左源太残りあたりを見廻しふと舟に目をつけうなづ

き、そこへ忍ぶこと。やがて上手より牧の方さきに、ついで吳羽の前女ども

大勢ついていで來たる。此のうち明月となること。

牧「イヤナウ吳羽の前今噂ありし平家を語る琵琶法師とやら、其の名を聞くもはじ
めなれど、折から月も薄ぎぬ脱ぎ千艸の蟲もどりどりに、音色あはする秋の樂平家
亡びし物語も、時にとつての御なぐさみ、君にも嘸めでたまはん、とく其の法師をお
招きあれ。吳ハ、お許しとあらから、急ぎ召寄するでムりませう。誰ぞある、中
門際にひかへさせし、最前の琵琶法師を、釣殿へ案内しや。女、かしてまりました。

ト女一人上手へはいる。此のうち女共一同むかうを見て

女甲「アレ、御所さまが、はや御出御にムります。女乙「オ、ほんに將軍家が御
童衆をお敵手に 女丙「鬼ごとの御たはむれ 女丁「まッさきなは荏柄の御秘藏、小
平太さま。女戊「ほんに鬼ごと、皆々見えますわいなア。吳「日ごろに似ぬ好い
御機嫌——アレ、あぶない——岩かど、松が根。モシ母上、おでむかひいたしま
せうか。モシ母上

ト此の間牧の方向を見つめてゐる。

吳「モシ 牧「エ、。

ト牧の方びつくり氣をかへ

牧「サ、おでむかひ、しやらぬかいのう。

ト此のトタン、はた、にて、向うより和田胤長の末男、小平太、七八歳の童姿一
さんに走つてでる。ついで將軍實朝卿、十二歳狩衣、笠烏帽子、小平太を追うて
出る。すぐ其のあとより北條次郎朝時、十三四歳の童形、御太刀をさ、げもち
少しおくれて伊豫の局、笹尾の局、結城七郎朝光、五十恰好、其の他近侍女房、大勢
ついで出る。

伊「モシ、おあぶない。無、お怪我ばし遊ばしますな。

ト此のうち牧の方、吳羽の前一同でむかふ。トタンに小平太かけて來て、吳羽
の前の袖の下をく、追ひすがりて實朝卿をろびかけるを
牧「ア、あぶない。

ト牧の方おぼえすだきとめる、實朝其の手にすがりて

實ア術なかつた——ヤ、そなたは祖母前

ト牧の方の手にすがりながら見あげる、牧の方ゾツとしたる思入、ト、氣をか

ハ

牧オ、御前さま、お慮外おゆるし下さりませ。マ、みづからとしたことが、おゑしや

くもおそなはり——ホ、ホ、ホ、失禮御免下さりませい。

ト作り笑ひして上手へ請する。このうち皆々集ひ

蓋とこもお怪我はムりませぬか。ヤイ——小平太氣をつけませうぞ。實何ともな

い——。サア釣殿へ、ゆかう。吳はんはマアいつものに似ぬ——うるはしい御前

の御機嫌——さやうならば御案内——サ、いづれも 蓋いざ、御案内 皆々下さ

りませう。

ト吳羽の前さきにたち、一同實朝卿を圍繞し、上手へはいる。此の間、牧の方は

始終實朝に目をつけ、恍然と下手に立ッてゐる、皆々心づかずはいッて去も。

牧の方、我れ知らず二足三足上手へ往き、尙見送ッてゐる。此の以前、左源太舟より半身をあらはしたび——こなたを窺ふことあり、此の時不審の思入にて島に上り、あたりへこなしあッて、牧の方の傍へ來たり、小聲にて、モシ——と呼ぶ。牧の方聞えぬ思入。

牧かほせまでにも肖たりとは——烏帽子姿も——狩衣までも 左モシ、御方、

和子が料に、そツくりそのま、左コレサモシ、御方さま。

ト左源太牧の方の袂を引き、大きく呼ぶ。これにて牧の方びツくり思入。

牧ヤ、そなたは左源太、左、手筈も首尾も、十二分と存じましたに、何故お見のがし、あ

らばしましたか。牧オ、

ト牧の方夢のさめたるやうの思入。

牧ム、此の上はかねての手筈——万一にも玄そんじなば、合圖は柱にまかけし

狼煙——左源太ぬかるな。左、心得ました。牧ソレ。

ト牧の方きツと思入、懐中の短刀に手をかけながら、急ぎ足に上手へはいる。

あとに左源太呆れし思入。此のうち月又昏くなる。
左さッぱり譯がわからぬわえ。何はまかれ、一まづ彼奴等を

ト懐中より合圖の蟲笛を取りいだし吹かうとする。此のトタン、上手奥の植
込より、以前の深見三郎次郎以前のまゝの服装にて、つゝといで、無言にて立ち
より、灸所をあてる。左源太ウツといつたまゝ、倒れる。深見懐中より捕縄を
とりいだし、難なく縛り、蟲笛を奪ひて、月影に透し見ること。

第七段

(其一) 月前の平家琵琶

上手に寄せて釣殿やらの建物、正面の外は小簾を下し、欄干廻り椽下手奥へ
や、斜に池水に臨みたるころ。左側の椽側より、同じく下手奥へ、又斜に橋
形の渡殿、其の止り、四面に小簾を垂れたる離れ小島の水亭、これも四方椽欄干
附。すべて北條邸の奥庭、泉水築山の遠見よろしく、渡殿のかなた、八月十六夜

の明月空高くさしのぼりたる體。釣殿のまん中よき處に、實朝卿、其のうしろ
に和田ノ小平太御、太刀をさへげてゐる。上手や、前のかたに結城七郎朝光
北條相模ノ次郎朝時、其の次に吳羽の前下手や、前の方に伊豫の局、笹尾の局
其の外女房侍女、おのゝよき處にすまひ、さて椽側に近くや、下手に、盲目の
琵琶法師、恰も一曲語り了りたる體、琵琶をいだし、頭をさげてゐる。皆々感に
入り、中にも伊豫の局、笹尾の局、結城朝光などは、涙を催せしこなし。
結信濃ノ前司行長、ぬし、近きころ入道あり、公用の暇々に、平家と名づくる物語を、物
せられ候ふ由、兼ねて承り及びつれど、かくまでいみじき作ぞとは、存じもかけず候
ひしに、伊折も折とて、仲秋の御釣殿の月の底に、笹只讀みて、だにと思はれ、す
る、哀れも深き御物語を、伊妙なる琵琶のいとよきは、結諸行無常の世の姿を、さ
ながらに見る心地して、笹そゝる涙の催され、女甲「何わさまへぬわたくしども
まで、女乙「面白いで、皆ムりました。
ト皆々感心の思入よろしくある。

吳御意に叶ふか、どうあらうと、御聞には供へながら、胸安からずぞんじましたに、冥加に餘る御感のお言葉——法師にもさぞ面目。琵琶のはまれと申さうか、筆のはまれと申さうか、取りも直さず當家の面目——かくと傳へはんべらば、御もてなしに奔走の、あるじ夫婦も嘸よろこび——かたじけなう、ぞんじあげます。昔イヤナウ御方、只一曲ではあまりに本意無し、何をがな今一節。昔はんに結城さまの御意の通り、こたびは何がな、をさないに、因みましたる一條を、昔オ、それこそは、しはに、我が君は、じめ童御たちの、昔いかさま、お氣にめすことで、ムらう。何とぞ御所望下されたし。

ト吳羽の前へむかひ三人よろしくある。

吳心得まして、ムりまする。イヤナウ法師、方々の御褒美は、世にありがたい、其方の面目。あのやうに仰せらるゝ、何をがな今一曲。昔ハ、冥加至極に存じまする。さやうならば、恐れ多くは、ムりまされど、幼君に因みまして、先帝御入水の一條を、昔オ、その一段は、さぞかし。昔ナニ御入水の一段とや。承らぬ其のうちか

ら、いにし昔しの、偲ばれまして、そゝる哀れを、おぼえまするわいのら。

ト伊豫の局目を拭ふこと、此のうち琵琶法師撥を取りて、調を整へ、平家先帝入水の條を語りいづる。

平家「其の後は、四國鎮西のつはものども、皆平家を背いて、源氏に附く、今まで、隨ひつき奉つたりしかども、君に向つて、弓を引く、主に對して、太刀をぬく、されば、彼の岸に、着かんとすれば、浪高くして、叶ひがたし、此の汀によらんとすれば、敵矢先を揃へて、待ちかけたり、源氏の國あらう、今日を限りとぞ見えし、さる程に、源氏の兵ども、平家の船に乗り移り、乗りうつる、水主楫取ども、或は射殺され、或は切り殺されて、船をなはずに及ばず、船底に皆倒れ伏しにけり、新中納言知盛の、御急ぎ、御所の御船へ、まゐらつさせたまひて、此の世の中の有様さりと、どこぞ存じ、が、今は、かうにこそ候ふらめ、見苦しき物どもを、ば海へ入れて、船の掃除めされ候へ、とて、掃き拭ひ塵、ひろひどもへ、に走り廻つて、手づから掃除し給ひけり。

ト此のうち、皆々感に入り、伊豫の局涙を催せし體にて、鼻汁をかひことなど。

和田ノ小平太やうく、退屈したる思入、ト、實朝のうしろにて吹呟する、實朝卿うしろを見かへり睨む真似、小平太戯れてわびる真似。

平家「女房たちはさしつとひて、いかにかにや新中納言どの軍のやうは如何にや、如何にど問ひたまへば、只今に珍しき吾妻男をこそ御覽せられ候はんすらめどて、からからと笑はれければ女房たち、何條只今の戯れずやどて、聲々にをめき叫びたまひけり。

ト此のうち女房たちいよく感に入り、落涙の體。次郎も默然としてうつむき、結城朝光も頭をうなだれ、悵然として聽きはれてゐる。小平太實朝の耳に口よせ、何事かさやく實朝うなづく。

平家「二位どの、は日ごろより思ひ設けたまへることなれば、

ト此の時橋殿のかなたなる水亭の小簾かけより、牧の方半身をあらはし、こなたへ思入。

平家「鈍色の二ツぎぬ打かつぎぬ、袴のそば高くどつて、神璽を脇にはさみ、寶劍の

腰にさいて

ト此のうち牧のかた懐刀を取りいだし、目くぎをえめすこと。

平家「我れは女なりとも敵の手にはかゝるまじ

ト牧の方きつと思入あつて橋殿へかゝる。

平家「主上の御侶にまゐるなり、君に御志思ひまゐらせん人々は急ぎつゝ、たまへやどて、まづいど舩へぞ歩みいでられける。

ト此のうち牧の方ひそかに橋殿を渡りはて、こなたへ近づかんとする、同時に實朝卿、小平太、うなづきあうて、そつと座をたち、左側の縁へぬけいづる。牧の方目ばやく見てきつと思入、足早に橋殿を逆戻りして、再び小簾かけ、かくれる。皆々心づかぬ體。

平家「主上、今年は八歳にぞならせおはします、御年の程より遙かにぬびさせたまひて、御かたちうつくしう、傍も照り輝くば、かななり。

ト此のうち、實朝卿、小平太、互ひに合笑みながらさやくさあひぬき足して橋殿

へかゝる。

(其二) 橋殿の一刹那

ト牧の方再び小籠かけより半身をあらはす、實朝之れを知らず、何事か小平太にさゝやく、小平太うなづき、橋殿を走りもどり、前の釣殿の背面へはいる、(隠れ遊びのころなり)。牧の方また身をかくす。實朝、小平太の合圖を待つ思入にて、水亭の前のかたへ、釣殿へ思入あつて徐かに歩みゆく。やりすとして、牧の方ひそかにうしろより忍びよる。

平家「御ぐ、し黒うゆら、いと御背中すぎさせおはします、

ト牧の方懐刀をぬき、逆手に取り、只一突どうかゝひ寄りながら、横貌が我が子に似たりといふ思入あつて、突かんくとして突きかぬるこなし。

平家「主上あされたる御ありさまにて、

ト實朝何氣なくふと見かへる、牧の方はツとこなし、懐刀をうしろへかくす。

(ト此の次の平家の詞及び地を消し、琵琶の撥音のみをあしらふ)。

實「オ、祖母前か。まろはびつくり、またわいのう。

ト牧の方思入よろしく、トッやうく、にそら笑をよそはひ

實「ホ、お盧外おゆるし遊ばしませ。ツイアノ物で——オ、それく——

アレ、御覽じませ、それく、あれなる水の面に、實「エ、何が、實「それく、月影、實「ヤ、魚がとんだ。アレく、月が——碎けるく。

平家「まづ東に向はせたまひて、伊勢大神宮にお暇申させおはしまし、其後西に向はせたまひて、西方淨土の來迎に預らんと、誓はせおはしまして、御念佛候ふべし。

ト此のうち牧の方脚蹠の思入、こなし、よろしく、トッ思ひ切、て懐刀をふりあぐる、トタンに釣殿の方にて小平太合圖の口笛を吹く。

實「ヤ。

ト實朝ふりかへる、牧の方覺えずあどすざる、實朝心づかず、つかく、と橋殿の方へ走りゆく、トタンに釣殿にて

皆我が君さまく。

トあわてたる聲々同時に撥音バタリと止む。牧の方はツとこなし、きつとなり
すぐ實朝に追ひすがる。此の間一刹那。實朝釣殿の背面 かけ入る。牧の方
ついでにかけ入る。トタンに小平太

小「アレ御方が——アレイノウ。」

ト同時に釣殿の中どよめきわたり、人聲物音はげしく聞える。すぐ牧の方懐刀
をもつたるまゝ、かけ戻り、橋殿の柱を一刀切る。すぐにすさじき物音して狼煙
上りしところ。牧の方すぐに釣殿へかけ入らうとする。トタンに釣殿より吳
羽の前懐刀の柄に手をかけ、さきにたち、侍女大勢甲斐々々しきいでだちにて
たちいで、吳羽前よりしく牧の方をとめて

吳驚き入つたる御振舞母上御亂心あそばしましたか。慮外ながら君の奉爲、そこ
一寸もお進みあるな。
ト此の間遠寄せになり、ドンチャン次第にはげしく聞える。牧の方思入あつ

て

牧「ヤア、ござかしき其のとめだて——そちたちに問答無用。ヤア、左源太はや
まゐれ。

トすぐに上手へ行かうとする。吳羽の前とめる。一寸あつて上下に入りかは
り、ト、牧の方懐刀をふるひ切りぬけうとする。立まはりあつて女ばら皆々
下手へ牧の方上手へ。

(其三) 釣殿の大團圓

牧の方釣殿の正面へ来る。吳羽の前さきに女ばらづゝいて追ひ來たる。此の
時、釣殿の上手より深見三郎二郎鳥帽子直垂の下に腹巻して兵をまたがへ立
ちいで、よろしく牧の方を遮る。牧の方ギョツとして立ちどまる。

深「ヤア、御不覺なり、牧の方御謀反たちまち露見に及び將軍家には恙なく、はや御
還御と相成つたり。牧「ヤ、すりや空しく、遠かくなる上は、御懺悔く。牧「たど

へ釣殿は逃るゝとも、四方を取りまく一味の軍勢。深ヤア、おろかなる其のお言葉。只今恰も義時公中をとばして御歸館あり群る中へかけいらせ獅子の一聲おのゝ百獸怨敵たちまち羸服なしたり。吳すりや我夫には、御歸館ありしか。深聞ゆる太鼓貝がぬが目ざす敵は御方御夫婦。咄ヤ、ハ、ハ、ハ。深いでこの上は尋常に吳御悪心を御懺悔あつて。深御所のお沙汰を御まらあるべし。吳夫もろともみづからが、一命かけても御どりなし。咄ヤア、なめすぎたり、取なしとは。左源太はいづこにある——左源太——。

ト此の時、正面奥の小簾のかけにて。義アイヤ母上、其の左源太輝英も、已に誅に伏して候ふ。此の上は是非もなし、尋常の御懺悔。吳ヤ、あのお聲は。皆々相摸守さま。ト此のトタン遠寄ばたりと止み、正面奥及び左側は、小簾悉く落ちて、釣殿見透しになる。正面旗側より北條相摸守義時鳥帽子水干侍士若干ひききたがへ、右手に三方をさゝげ、侍士一人に左源太が首級を提げさせ進みいづる。吳羽

の前、深見等左右に退き、おのゝよろしくすまふ。ト義時うやゝしく牧の方立ッたる下手よき處にすまひ。

義左源太づれば申すに及ばず上洛中の朝雅をも、即刻誅伐の御汰沙あり、已に御教書を下され了んぬ滅亡三日を越ゆべからず、まッた父上時政どのにも、一念已に御發起あつて、まッこの通り御落飾。

ト三方に載せたる白髪のもどりを示す。牧の方無言にて、よろしく思入。義此の上は母上にも、只いさぎよき御改悛——申すに忍ひず候へども、罪業消除の御落飾——ひとへに願はしう、ぞんじたてまつりまする。

トよろしく愁の思入あつていふ。吳羽の前、深見はじめ、一同愁然としてさしうつむく。牧の方は此の間、まよんぼりとして立つたるまゝ、うつむいてゐる。義時も言ひ終はりて、落涙の體、皆々しばらく無言。此のうち牧の方まづかに懐刀を取りなほし、突然乳の下を貫き、アツと叫びて倒れる。

深ヤ、御方には、吳こは何故の 二人御生害。

ト吳羽の前深見左右よりかけ寄り介抱する。牧の方苦しみながらよろしく

二人をといめ
悠何故の生害とや。子故の闇の雲破れ時しもこよひ十六夜の月に真如の影拜み
和子の蹤追ふ死出の旅。今更いふべき言葉もなし親子の因縁義時との疾く介錯
頼みまする。

トよろしくこなし。一座をめぐりかへる。義時よろしく愁の思入ありて
義男まさりの母上ゆゑかゝる御覺悟もあるべき筈を——アまなしたりおろかに
も心づかず——

ト牧の方のそばにさし寄り

義ナウ母上たとへ朝雅亡ぶるとも今懐胎と傳へ聞く妹萩の前は手許に引きとり、
よしや男兒生まれんども一命にかへて申し乞ひ此の義時が猶子となし行末長く
後見せん。せめてもそれを冥土の御つと。

ト此のうち牧の方次第に弱り義時の語を聞き微に打笑ひやうなるうち

衰へてがツくりと落ち入る。吳羽の前深見驚きさし寄り

「モシ」。吳母上さま母上——

ト大きく呼ばうとするを、義時

義「ア、コリヤ。

トといめ

義「ア、さすがは母上。

ト觀念の思入あつて

義南無阿彌陀佛——。吳深南無阿彌陀佛——。

ト女ども侍士等一同皆々手をわはせ小聲にて念佛する思入。夜半の鐘。



牧の方 大尾

春のや主人白す、拙作『牧の方』はこゝに一段落を成したれども、本篇の趣意はいまだ盡きたるにあらす、此の篇中に只頭首のみをあらはしたる北條義時、深見致興、實朝卿の三人物は、別に『源實朝』と題したる續稿に於て、其の胴と尾とを描きいださんとす、其のうち義時だけは『源實朝』にて胴をあらはし、其の續篇『左京兆』に於て其の全身をあらはすべきものとす。

春之舍著譯

『春舍漫筆』(華文)

「壹圓紙幣の履歴ばなし」は壹圓紙幣の物語に托して中流以下の情態を描ける一種の小説、「梓みこ」は神子の語を假りて近松、馬琴、西鶴を評論し兼ねて明治の文壇に及べる諷刺滑稽の文、「わかし」は欧米詩文人の奇譚逸話等を集め、「政界叢話」は欧米名士の珍聞を蒐めたり

明治廿四年九月出版
實價 金 卅 錢

『小羊漫言』(評論)

「春舍漫筆」は著者が明治廿三四年間の叙事の華文を集め本書は同年間の批評及び論辨を集めたり明治二十二年のころの文界の傾向は本書によりて瞥見するを得べし

明治廿六年六月出版
實價 金 卅 錢

『桐葉』(脚本)

豊臣氏の末路を舞臺として片桐且元の苦忠遊殿の猜忌等を描きいだせる著者が脚本の初作なり

明治廿九年二月出版
實價 金 卅 八 錢

『文學其の折々』(評論及び隨筆)

明治廿九年九月出版
實價 金 壹 圓

千ムーッに垂んたる大冊、明治廿四年以後廿九年までの諸種の評論、漫筆等を集めたり

『梨園の落葉』

明治廿九年十一月出版
實價 金 五 十 錢

前書と同種のもの、但し専ら演劇及び脚本に關する評論のみを集めたり

『ふたごゝろ』(小説)

明治卅年三月出版
實價 金 卅 八 錢

＊國作家某の作を義譯せるもの、大膽不敵なる悪人を主人公させる物語なり

『列傳徳川小説史』

明治卅年五月出版
實價 金 七 十 五 錢

水谷不倒氏と共著なり、紙數七百頁に餘る大冊、古くはお伽草子、怪談もの、昔より近くは假名垣魯文に至るまでの諸作家の傳統は此の書によりて詳かに知るを得べし

明治三十年五月一日印刷
同三十年五月四日發行
同三十五年六月一日訂正五版

牧の方

實價金四拾錢

著者 坪内雄藏

東京市日本橋區通四丁目五番地

發行者 和田静子

東京市麴町區内幸町一丁目四番地

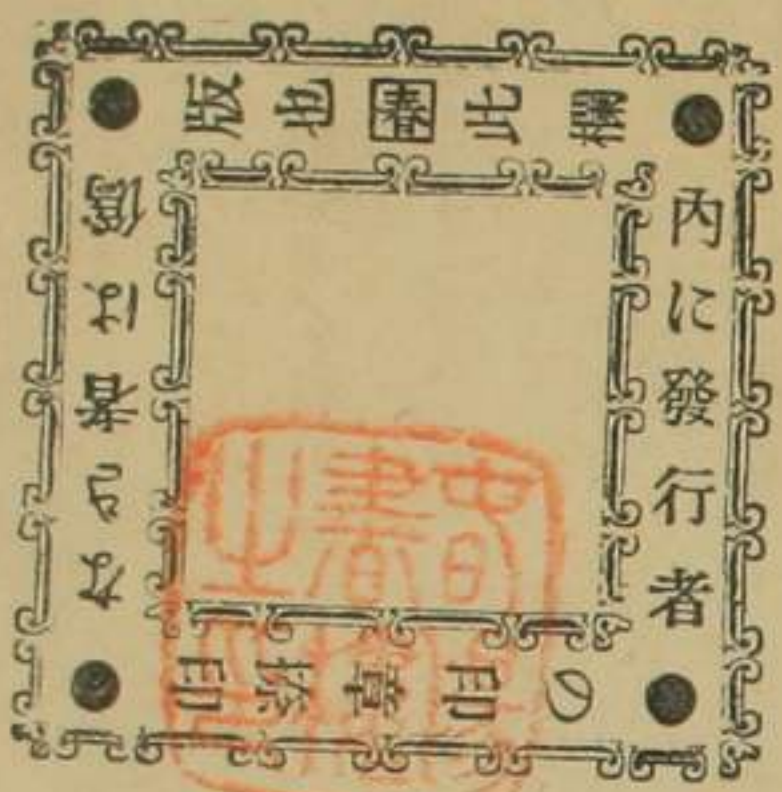
印刷者 西原重暉

東京市京橋區長澤町十六番地

印刷所 白川印刷所

發行所 東京市日本橋區通四丁目角 春陽堂

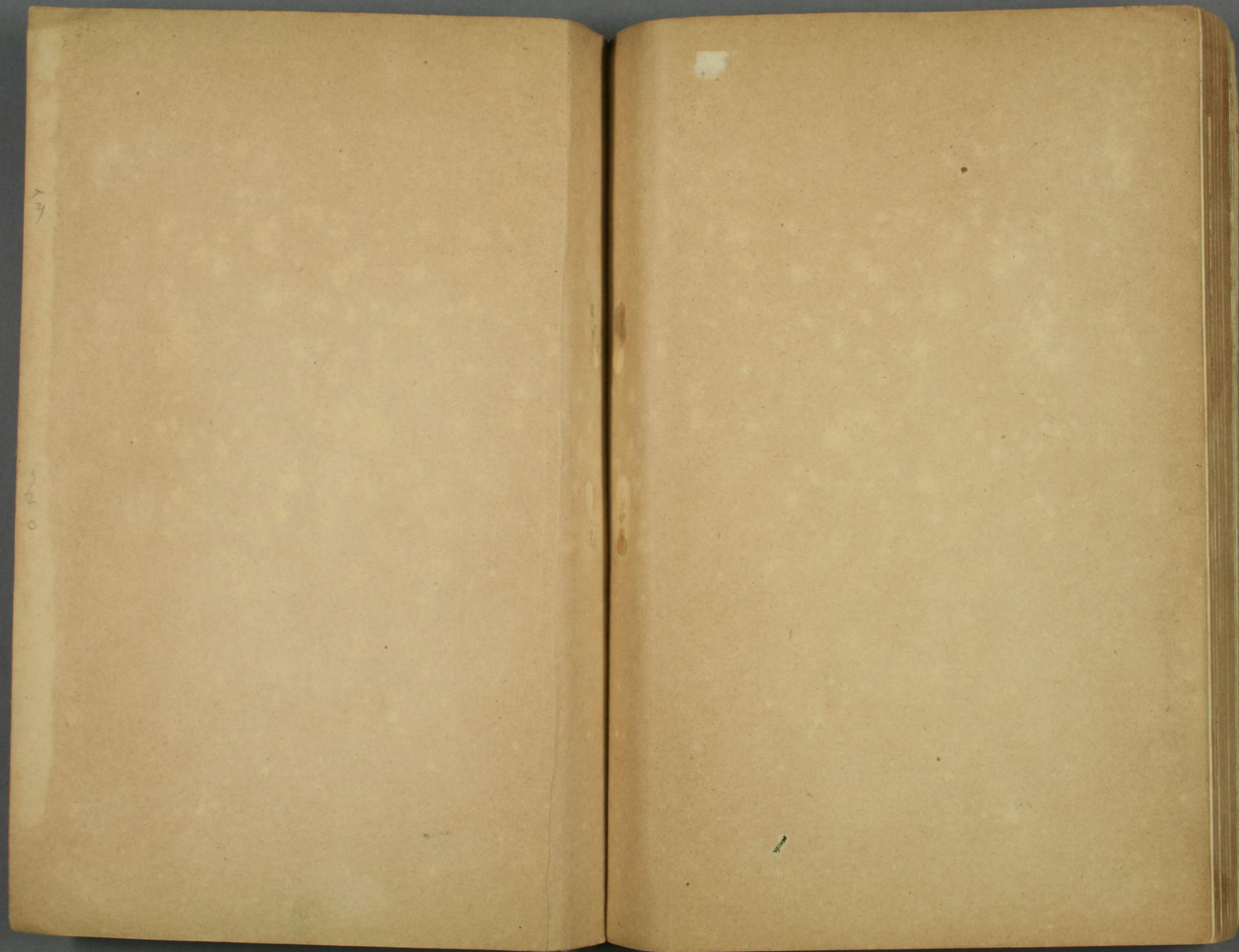
(電話本局五十一番)
振替口座東京一六一七番



5498

27

320



23

20